

# 神谷所遺跡Ⅲ



1994

長野県辰野町教育委員会

# 神谷所遺跡Ⅲ

1994

長野県辰野町教育委員会



青 磁



白 磁



国産陶磁器



片口鉢



豎穴建物址出土陶磁器

## 序

ここに平成5年度に発掘調査を実施しました、第3次の調査報告書を刊行することができました。これまでなかなか進まなかった整理作業も、第2次調査報告書、第3次調査報告書ともにふると雇用再生事業の補助金を得て完了し、刊行に至ったわけですが、文化財保護と他の業務との狭間で揺れている文化財保護行政の立場を象徴しているかのように感じます。

「国民が行政の執行によって享受する福利」として、また「能力に応じてひとしく教育を受ける機会」のための資料として、そして「国民一人一人が自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう」学習するために「提供できる情報」のひとつとして、この報告書の刊行は必然性があるのではないのでしょうか。文化財保護は、ひいてはユネスコ憲章の希求する世界平和にも通じているという観点が、今求められているのかもしれない。

国宝でもなく、県宝でもない埋蔵文化財ですが、そこには先人が土地に残した生活の痕跡が、確かに残されています。文字ではなく、肌で感じられる歴史資料として、今後も保護活動を行っていかなくてははいけません。

現代人が土地に歴史を刻む時には、近代までとは違い過去の歴史を根こそぎ失ってしまいます。「失われゆく歴史」を後世に伝えるための「最後の手段」として実施される発掘調査報告書の刊行の意義を再度認識し、より積極的に整理作業を進めていく所存です。

末筆になりましたが、調査成果を見ずに逝去された、友野良一調査団長さん、福沢幸一さんをはじめ、発掘調査に従事して頂いた方々にこの報告書を捧げ、そして報告書刊行に向けて整理作業を続けている皆さんにお礼を申し上げ、ごあいさつとします。

平成23年3月

辰野町教育委員会

教育長 古村 仁士

## 例 言

1. この報告書は後山工業団地造成事業に先立って実施された長野県上伊那郡辰野町大字伊那富字後山5908番地5他に所在する神谷所遺跡の第3次発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、辰野町教育委員会が実施した。なお、発掘調査の組織については発掘調査関係者名簿として別掲した。
3. 発掘調査は、平成6年4月11日から平成6年8月19日まで現場での作業を行い、平成6年8月22日より平成23年3月31日までの間、遺物整理及び報告書の作成を断続的に実施した。
4. 発掘現場における記録は福島永が担当し、遺構等の実測図の作成は大森淑子、上島元彦、古畑明美、山崎貴弘が行い、遺物等の実測図及びトレースの作成は赤羽弘江、板倉裕子、大槻直子、大森淑子、佐藤直子、白鳥栄子、竹内みどり、早川裕美子、平沢正子、福島永が行ない、土器復原については福沢幸一氏にお願いした。  
なお、報告書作成は、ふるさと雇用再生特別事業の補助金を受けて実施した。  
また、鉄器の保存処理については（財）帝京大学山梨文化財研究所に委託している。
5. 本報告の古代の時期区分については、『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4 総論編』に従った。
6. 調査時及び、整理時に作成した実測図及び写真は、辰野町教育委員会が保管している。

## 発掘調査関係者名簿

### 1. 神谷所遺跡発掘調査団

- 調 査 団 長 友野 良一（日本考古学協会会員・発掘担当者）  
調 査 員 福島 永（辰野町教育委員会社会教育課文化係）  
調 査 補 助 員 山崎 貴弘  
発掘調査協力者 板倉たせ子、大森淑子、山崎誠、山崎良之助、長田作衛、上島元彦、桑沢とよ子、城倉けさみ、茅野安男、中谷あき子、宮沢英子、山崎馨、唐沢房夫、松田あつ子、松田春美、宮沢八千代、上島芳子、矢島郁夫、宮沢頼子、中谷美代子、松井公夫、垣内輪、古畑明美、植村翠、丸山雅子、福沢幸一  
整理作業協力者 赤羽弘江、板倉裕子、宇治ひろみ、大槻直子、大森淑子、工藤信子、佐藤直子、白鳥栄子、竹内みどり、早川裕美子、平沢正子、村上茂子、株式会社シン技術コンサル

### 2. 辰野町教育委員会事務局（発掘調査当時）

- 教 育 長 小林 晃一  
社会教育課長 赤羽八洲男  
文 化 係 長 平泉 栄一  
文 化 係 三浦 孝美・福島 永・山崎 貴弘



# 目 次

序

例 言

第I章 遺跡の位置と環境 .....	1
1. 位置と付近の地形・地質 .....	2
2. 歴 史 的 環 境 .....	4
第II章 発掘調査の経緯 .....	6
1. 保護協議の経過 .....	6
第III章 発 掘 調 査 .....	7
1. 調 査 の 方 法 .....	8
2. 調査結果の概要 .....	8
第IV章 遺 構 と 遺 物 .....	11
1. 住 居 址 .....	12
2. 土 坑 .....	39
3. 集 石 .....	69
4. 溝 址 .....	74
5. 竪穴建物址 .....	74
6. 不明遺構 .....	87
7. 遺構外出土遺物 .....	91
第V章 ま と め .....	104
写 真 図 版 .....	105
付 図	

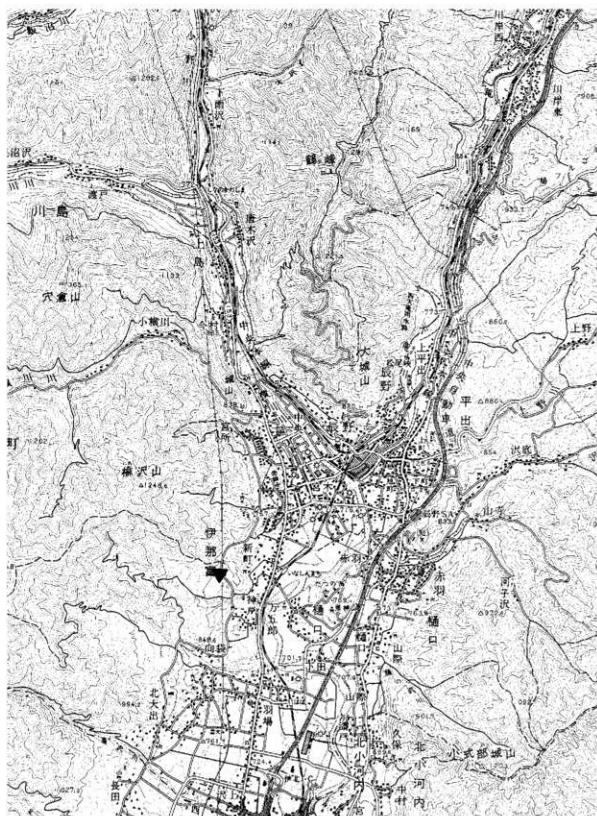
## 插图目次

第1图	遗址位置图	1	第39图	土坑遺構平面圖(3)	54
第2图	調査区位置图	3	第40图	土坑遺構平面圖(4)	55
第3图	周辺道路分布图	5	第41图	土坑遺構平面圖(5)	56
第4图	調査地区地形图	7	第42图	土坑遺構平面圖(6)	57
第5图	調査地区全体測量图	11	第43图	土坑遺構平面圖(7)	58
第6图	第78号住居址遺構平面圖	12	第44图	土坑遺構平面圖(8)	59
第7图	第78号住居址出土遺物	13	第45图	土坑出土遺物(1)	61
第8图	第80号住居址遺構平面圖	14	第46图	土坑出土遺物(2)	62
第9图	第72・80号住居址出土遺物	14	第47图	土坑出土遺物(3)	63
第10图	第69号住居址遺構平面圖 ・遺物出土状況图	16	第48图	土坑出土遺物(4)	64
第11图	第69号住居址出土遺物	17	第49图	土坑出土遺物(5)	65
第12图	第70号住居址遺構平面圖	18	第50图	土坑出土遺物(6)	66
第13图	第70号住居址遺物出土状況图	19	第51图	土坑出土遺物(7)	67
第14图	第70号住居址出土遺物	20	第52图	土坑出土遺物(8)	68
第15图	第71・72号住居址遺物出土状況图	22	第53图	集石出土遺物	70
第16图	第71・72号住居址遺構平面圖	23・24	第54图	集石遺構平面圖(1)	71
第17图	第73・79号住居址遺構平面圖	26	第55图	集石遺構平面圖(2)	72
第18图	第73・79号住居址出土状況图	27	第56图	集石遺構平面圖(3)	73
第19图	第74号住居址遺構平面圖	28	第57图	溝址遺構平面圖	75
第20图	第74号住居址遺物出土状況图	29	第58图	竪穴建物址礎出土状況图	80
第21图	第73・74号住居址出土遺物	30	第59图	竪穴建物址遺構平面圖(1)	81
第22图	第75号住居址遺構平面圖	31	第60图	竪穴建物址遺構平面圖(2)	82
第23图	第75号住居址遺物出土状況图	32	第61图	竪穴建物址遺構平面圖(3)	83
第24图	第75号住居址出土遺物	34	第62图	竪穴建物址遺構平面圖(4)	84
第25图	第75号住居址出土遺物	35	第63图	竪穴建物址遺構平面圖(5)	85
第26图	第77号住居址遺構平面圖	36	第64图	竪穴建物址出土遺物	86
第27图	第77号住居址遺物出土状況图及び 出土遺物	37	第65图	不明遺構平面圖	87
第28图	第81号住居址遺構平面圖	38	第66图	不明遺構遺物出土状況图	88
第29图	第402号土坑出土遺物	44	第67图	不明遺構出土遺物(1)	89
第30图	土坑遺物出土状況图(1)	45	第68图	不明遺構出土遺物(2)	90
第31图	土坑遺物出土状況图(2)	46	第69图	遺構外出土遺物(1)	93
第32图	土坑遺物出土状況图(3)	47	第70图	遺構外出土遺物(2)	94
第33图	土坑遺物出土状況图(4)	48	第71图	遺構外出土遺物(3)	95
第34图	土坑遺物出土状況图(5)	49	第72图	遺構外出土遺物(4)	96
第35图	土坑遺物出土状況图(6)	50	第73图	遺構外出土遺物(5)	97
第36图	第408号土坑遺物出土状況图及び 出土遺物	51	第74图	遺構外出土遺物(6)	98
第37图	土坑遺構平面圖(1)	52	第75图	遺構外出土遺物(7)	99
第38图	土坑遺構平面圖(2)	53	第76图	遺構外出土遺物(8)	100
			第77图	遺構外出土遺物(9)	101
			第78图	遺構外出土遺物(10)	102
			第79图	遺構外出土遺物(11)	103

## 写真図版

- 図版1 第69号住居址  
図版2 第70号住居址  
図版3 第71・72号住居址／第72号住居址炉／第80号住居址炉  
図版4 第73号住居址（1）  
図版5 第73号住居址（2）  
図版6 第74号住居址  
図版7 第74・75・77号住居址／第75・77号住居址  
図版8 第75号住居址（1）  
図版9 第75号住居址（2）  
図版10 第77号住居址（1）  
図版11 第77号住居址（2）  
図版12 第78号住居址  
図版13 第79号住居址  
図版14 第81号住居址  
図版15 土 坑（1）  
図版16 土 坑（2）  
図版17 土 坑（3）  
図版18 土 坑（4）  
図版19 土 坑（5）  
図版20 土 坑（6）  
図版21 土 坑（7）  
図版22 土 坑（8）  
図版23 土 坑（9）  
図版24 土 坑（10）  
図版25 土 坑（11）  
図版26 土 坑（12）  
図版27 土 坑（13）  
図版28 土 坑（14）  
図版29 土 坑（15）  
図版30 第23号集石／第24号集石／第25号集石／第28号集石  
図版31 第29号集石／第30号集石  
図版32 第31号集石／第34号集石  
図版33 第32号集石／第33号集石／不明遺構  
図版34 竪 穴（1）  
図版35 竪 穴（2）  
図版36 竪 穴（3）  
図版37 竪 穴（4）  
図版38 竪 穴（5）  
図版39 竪 穴（6）  
図版40 竪 穴（7）  
図版41 第69号住居址／第70号住居址  
図版42 第73・74号住居址／第75号住居址（1）  
図版43 第75号住居址（2）／第77号住居址  
図版44 第78号住居址／第80号住居址  
図版45 土坑（1）／土坑（2）  
図版46 土坑（3）／土坑（4）  
図版47 土坑（5）／土坑（6）／土坑（7）  
図版48 土坑（8）／土坑（9）  
図版49 土坑（10）／土坑（11）／ピット／土坑（12）  
図版50 土坑（13）／土坑（14）  
図版51 土坑・集石／竪穴建物址鉄器  
図版52 竪穴・不明遺構出土遺物／不明遺構（1）  
図版53 不明遺構（2）／遺構外出土遺物（1）  
図版54 遺構外出土遺物（2）  
図版55 遺構外出土遺物（3）  
図版56 遺構外出土遺物（4）  
図版57 遺構外出土遺物（5）  
図版58 遺構外出土遺物（6）

## 第I章 遺跡の位置と環境



第1図 遺跡位置図 (S=1/50,000)

## 1. 位置と付近の地形・地質

### (1) 地 形

辰野町は、長野県のほぼ中央部、北は松本平、東は諏訪盆地に接し、西は木曾山脈を経て木曾谷へと通じる南北約70kmの伊那谷の最北部に位置する。町内を取り囲む山は、西を木曾山脈の最北部にあたる経ヶ岳（標高2,296.3m）より連なる標高1,100m以上の6つの山塊が占め、東には伊那山脈の北端部が延びている。伊那山脈は、天竜川の支流の一つである沢底川を境として南部は標高700m～1,200mの小式部城山塊、北部は標高800m～1,000mの東山丘陵に二分されており、東山丘陵は辰野町でも最もなだらかな丘陵状の山地となっている。

一方、諏訪湖に源を発する天竜川は、数段の断層崖に挟まれてその最低部に町を南北に縦断するように南流している。この断層崖の山麓部には扇状地の発達が目立ち、特に楡沢山～桑沢山山麓では扇状地が重なりあった複合扇状地が形成されている。

天竜川の西部では、横川川や、天竜川の支流としては町内で横川川に続く流路距離を誇る、小横川川の上流部には、横川渓谷に代表されるようなV字谷が深く入り込んでおり、下流では川幅がひろがって小規模な谷底平野・段丘・崖錐が発達している。

また、権兵衛峠—経ヶ岳—牛首峠—善知島峠の連なりは南北分水界となっており、これより北部は千曲川水系として日本海へと流れ込み、南部は天竜川水系として太平洋へ注ぎ込んでいる。

神谷所遺跡は、楡沢山の南西麓標高約800m～約780mに広がる、扇状部に豊かな湧き水をたたえた、扇状地上に位置し、断層によって形成された前山をはさんで、その東部に町内が一望できる地点に位置する。

### (2) 地 質

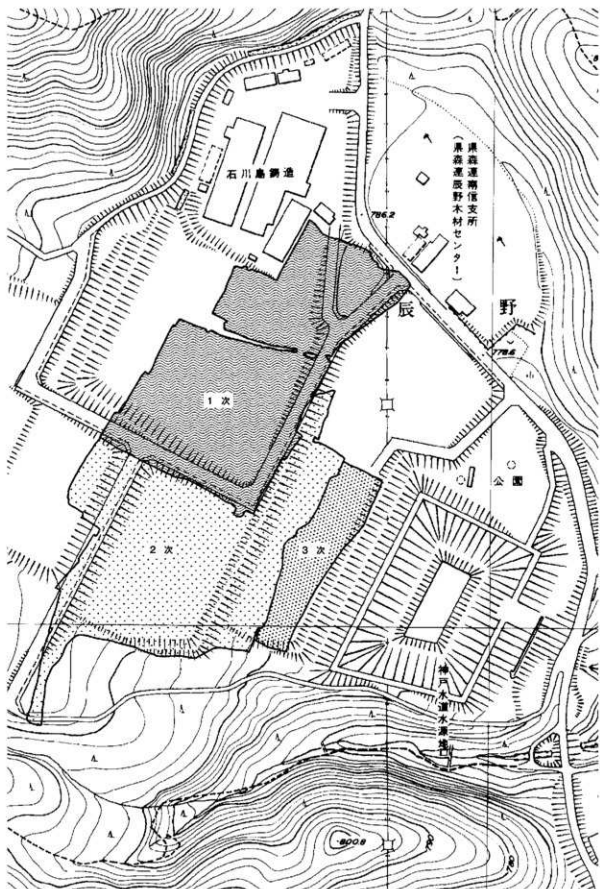
長野県は日本を代表する構造線である、フォッサマグナの西沿に存在する大断層の糸魚川—静岡構造線が、中央に存在している。また、南部には中央構造線が東西に縦走し、地質学的には非常に複雑な構造を呈している。辰野町はこれらの構造線に近い地点に位置し、地質的には西南日本内帯の東端部にあたる。このため、赤石山地は辰野町北部で途切れ、木曾山脈の花崗岩についても辰野町付近で途切れている。

辰野地域は大陸縁辺部で形成された堆積岩を基層とし、その上部に領家花崗岩がのり、その後、霧ヶ峰方面の溶岩や火砕流、辰野地域南部からの礫の流入によってこの地域の地質的な構造ができあがった。また、木曾山脈や赤石山脈の衝突境界としての構造盆地として形成された伊那谷には、木曾山脈を中心とした砂礫が堆積して平地を形成している。辰野地域ではこの堆積層は浅く、100m未満といわれている。

なお、横川川や小横川川は奈良井川と同様に北に流れる川であったものが、断層が動いたために南流するようになった様子が伺える。

また、伊那谷は西部や東部の山麓に大きな断層が走っており、特に西部山麓の断層は「伊那谷断層」と呼ばれ、神谷所遺跡の所在する後山地帯においては断層によって尾根が孤立し、稗塚と呼ばれる丸山が形成されているほか、西側の明神山は古い扇状地が活断層によって持ち上がったものである。

さらに、新町の上水道水源地の掘削では、昭和4年に春日琢美によってテフラを切る断層が観察され、スケッチに残されているが、このスケッチをみるとテフラの降灰が停止してから15,000年の間に西方の山地が約2.3m上昇したことがわかる。また、新町の天竜川河畔の赤洗より、天狗坂を通過して宮所、上島を結ぶ線は赤洗断層と呼ばれ、宮木の大新田より新町の原因地帯へ上がる坂で、断層によって原因の地盤がはね上がった様子が観察されている。



第2図 調査区位置図 (S=1/2,500)

## 2. 歴史的環境

新町地区は、縄文時代中期中葉の集落跡が発見された新町大原遺跡（60）をはじめ、泉字に指定されている縄文時代後期の仮面付土偶が出土している泉水遺跡（52）が存在する地区である。

この新町地区は経ヶ岳山塊の楡沢山と天竜川に挟まれた地域で、遺跡の立地も、扇状地上に位置する泉水遺跡、神谷所遺跡（66）等と段丘に位置する新町大原遺跡（60）、新町原田南遺跡（62）、新町原田北遺跡（61）、新町北原遺跡（49）等に大きく二分される。前述の泉水遺跡は扇状地上に位置しており、土偶のほかは遺物も採集されていないために遺跡の状況は不明である。また、神谷所遺跡に隣接する新町丸山遺跡（65）の西麓の畑からは、昭和32年に平安時代後期の鉄製羽釜が耕作中に出土している。新町丸山遺跡は通称塚と呼ばれており、当初古墳ではないかの疑いが持たれたが、この小山は活断層によって断ち切られた、いわゆるケルン・バットであることが確認されている。神谷所遺跡では鉄製の鍋の破片と思われる遺物も試掘調査によって出土しており、鉄製羽釜と神谷所遺跡との関係については今後更に検討していかなければならない課題であろう。

一方、段丘上に立地する新町原田南遺跡は、新町原田北遺跡、新町大原遺跡と共に圃場整備事業に先立って昭和63年度に調査が実施された遺跡で、縄文時代中期末葉の住居址をはじめ、中世の居館址等が出土している。中世の居館址は、堀によって区画された地点では掘立柱の建物址が出土し、その区画外の郭かと思われる部分には多数の堅穴建物址が検出され、館の空間的な使い分けについての良好な資料を提供することができた。また、玉縁状口縁をもった白磁碗や白磁製の四耳壺破片、東海系の鉢、鍋連弁をもつ青磁碗など鎌倉期を中心とした陶磁器が出土しており、辰野町で調査された中でも古い時期に位置付けられる居館址となった。

新町原田北遺跡は、試掘のみではあったが、平安時代前半期の住居址が確認されている。

新町大原遺跡では、縄文時代中期中葉の集落が発見されており、単独に埋設された有孔罅付土器をはじめ、石壇を持つ住居址、東海系の土器をともなう一括廃棄された土器群が出土した住居址等が出土している。そのほか、集石が20基、中世の掘立柱建物址の出土等、非常に貴重な成果をあげている。

うずらい北・うずらい南遺跡（58・59）は、平成5年度に区画整理事業に先立って調査が実施され、縄文時代前期の焼土を伴う土坑が1基出土している。この遺跡を試掘した結果では、礫が散在した地点や、テフラが確認される地点が観察され、地形的には不安定な地域といった様相を示している。

また、山麓に立地している遺跡としては櫛林遺跡（51）があげられる。この遺跡は楡沢山麓のわずかな平坦部に位置し、昭和61年度と平成元年度に調査が行われ、縄文時代早期から後期にわたる遺構が出土している。なかでも押型土器を出土した住居址1基や、深さ2mに近い円形の大型堅穴、集石が10基の出土はこの地区が縄文時代早期にベースキャンプ地として利用されていたことを伺わせる。また、縄文時代前期から中期初頭の小型穴群と、後期の土坑が発見されているのをはじめ、縄文時代中期中葉と思われる壺形土器が出土し、この中から黒曜石の大型のかたまりが発見されるなど、比較的小規模な遺跡にもかかわらず縄文時代の遺跡として非常に貴重な成果をあげている。

また、宮垣外遺跡（56）は平成19年に耕作土の持ち出しによって破壊され、急遽発掘調査を実施した。その結果、縄文時代中期末葉の住居址をはじめ、後期の土坑などが出土し、破壊のおよばなかった地点において貴重な成果をおさめた。

その他、発掘調査を実施していないが、道下遺跡（63）、神戸遺跡（67）、神戸北原遺跡（68）、羽場上遺跡（69）、どん沢遺跡（70）、神戸南原第一遺跡（71）、神戸南原第二遺跡（72）、山崎遺跡（73）、向袋遺跡（74）、北之沢遺跡（75）古城遺跡（76）等が分布している。





## 第Ⅱ章 発掘調査の経緯

### 1. 保護協議の経過

平成元年10月11日に「平成2年度開発事業に係わる埋蔵文化財について」の依頼文書に対する報告が辰野町土地開発公社より提出された。これによると新町後山地区において、工場用地の造成のため、約120,000㎡を平成2年度から造成する予定であった。このため、同年12月4日に教育委員会と、土地開発公社の二者で保護協議を実施した結果、隣接している丸山遺跡は緑地帯として保存し、神谷所遺跡のみ造成の対象になることが判明した。このため、事前に試掘調査を実施して遺跡の分布状況及び性格等を把握した後に本調査を行う、また試掘調査後に再度保護協議を実施することを申し合わせた。

平成2年11月5日には、「新町後山地区開発対策会議」が開かれ、この席上で、発掘調査については、地元には土地の買収が終了してなくても調査を行うことをお願いしており、地権者の了解が得られれば届を提出した後に調査を開始することが報告されている。

平成2年11月26日に保護協議の経過をふまえる形で、発掘届が辰野町土地開発公社より提出された。これに対して長野県教育委員会教育長から、辰野町長あてに、「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」の文書が送付され、発掘調査を実施するように指示を行っている。

発掘届が提出されたのをうける形で、町教育委員会では平成3年2月21日に長野県教育委員会文化課の指導主事を迎えて三者による保護協議を実施した。

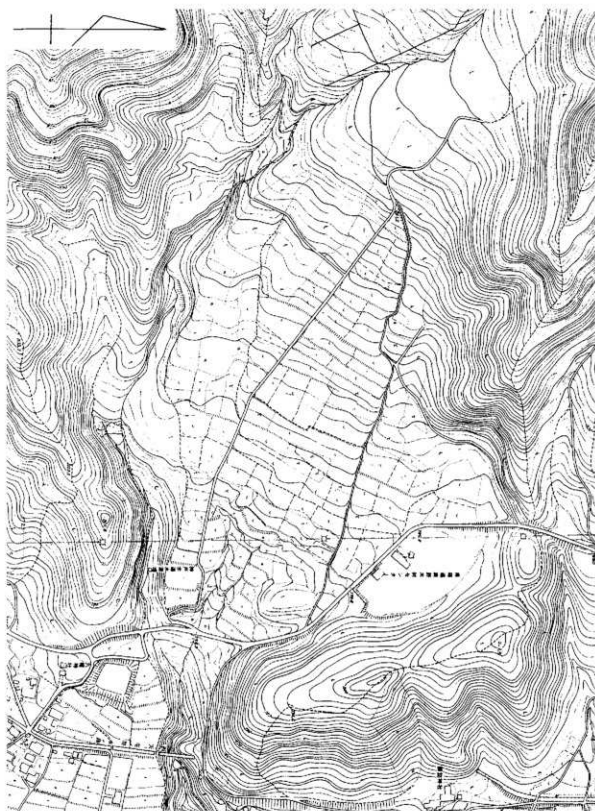
このなかで、この事業の対象面積は135,750㎡であり、これを平成4年8月から平成6年8月にかけて、年度区分にしたがって第1期から第4期までに分けて造成したいという計画が示された。また、地権者の一部に代替地を求める声があるために一部を畑地とすることも説明があった。これに対して畑地として残す部分については一部盛土が実施されるということもあるので本調査は実施しないが、遺跡の性格を把握するために試掘調査は実施したいと説明し、理解を得た。また、全体を調査するとおよそ7地区に調査範囲を分割して実施しなければならず、単年度に調査が実施できる面積も限られ、更に、このように広大な面積を調査することは今まで経験がなく、調査期間も把握できないため、少しでも早く試掘調査を実施し、遺跡の規模、性格を把握したいという説明も行った。これに対して土地開発公社は、地権者には説明をしてあるので、平成2年の作物の収穫後には試掘調査に入れるようにしたいという回答を得た。これを受けて、試掘調査を実施することとし、調査によって遺跡の様子がはっきりした時点で、再度保護協議を行い、期間等の調整をはかることとした。

平成4年1月16日この保護協議の結果をうけて試掘調査を開始し、3月10日に終了した。

なお、この試掘期間中の、平成4年1月22日には「新町後山地区開発計画について」という文書が土地開発公社から提出され、このなかでも、長野県教育委員会文化課の指導を受けるなかで、試掘調査を実施している旨の説明がなされている。

試掘調査によって遺跡全体の様子が把握できた平成4年3月4日に、長野県教育委員会をまじえた三者による保護協議を再度行い、開発範囲全体に遺跡が分布していることを説明し、単年度の工事区間ごとに発掘調査を実施していくことで合意した。

### 第三章 発掘調査



第4図 調査地区地形図 (S=1/5,000)

## 1. 調査の方法

神谷所遺跡は、楡沢山山系から流れ出る鳥居沢川の押し出しによって形成された扇状地上に立地しており、東にむかってなだらかに傾斜している地形であった。工事の実施設計では、この傾斜を大きく掘削して数段の平坦部を造成する計画であった。このため、代替用地として盛土する地点を残して遺跡全面を調査する事となり造成区分にしたがって調査することとした。このうち、今回は残された第3期造成地点について、本調査を実施した。

調査はまず重機を使用して表土を除去し、遺構検出面があらわれたところで、ジョレン等を使用して手作業で遺構の検出をおこなった。遺構が確認された段階で移植ゴテ等を使用して遺構内を掘り下げた。遺構は多くがローム層上面で検出されたので比較的確認作業は容易であったが、東部においては黒色系の遺構検出面から遺構を検出せねばならず、遺構の存在が予想される地点にサブトレンチをいれて確認した地点もある。

遺構内の調査に際しては、土層の観察を行うために住居址については十字に土層観察畦を残し、土坑等については半割にして土層を確認しながら掘り進め、掘り上がった時点で実測図を作成し、記録につとめている。

出土物の取り上げ、遺構平面図の作成に際しては、調査中に業者に委託して設定した、国土座標に沿った10m×10mのグリッドを基準として細分した2m間隔の方眼を使用した。なお、遺構平面図については1/20の縮尺を基本として図化を行い、遺物の出土している遺構については1/10の縮尺を基準として平板測量または遣り方測量によって記録している。その他、必要に応じて写真撮影等も実施している。

また、グリッドは南北方向を数字で、東西方向はアルファベットを用いて表記している。なお、現場でのレベルについては、基準杭の設定時にあらかじめ設定しておいたベンチマークを使用している。

なお、調査を実施するにあたり、遺構名を現場では仮に1号からとし、遺物整理時に第1次調査からの通し番号に改称した。

遺物を整理する段階では遺物台帳を作成し、各遺物には遺跡の略称(KYD-Ⅲ)および遺物番号を、また、必要に応じて遺構名等も注記した。現場での写真撮影については35mm一眼レフカメラを使用し、モノクロームネガフィルムと、カラーポジフィルムを用いた。遺物写真についてはデジタルカメラを使用して撮影した。

今回の発掘調査によって出土した遺構・遺物の概要は巻末の報告書抄録に記載している。

## 2. 調査結果の概要

### (1) はじめに

神谷所遺跡は、第1次調査報告書に掲載しているとおり、3次に渡って調査が行われている。

これまでの調査では、縄文時代の住居址、小堅穴、土坑（落とし穴を含む）をはじめ、弥生時代の住居址や平安時代の住居址等が出土している。また、平安時代末期から鎌倉時代初期頃と考えられる製鉄関連遺構や、時期が明確にできないものの、大型の礫群なども発見されている。

本書は、後山工業団地の第3期造成部分のうち、試掘調査によって遺構等が確認された地点約3,200m<sup>2</sup>の第3次発掘調査報告書である。今回の調査は、第2次調査の東部に隣接する地点について調査を行った。その結果、第2次調査区域の東端でも検出された、中世の堅穴建物址を中心とした、平安時代の住居址や土坑・集石等が出土した。

発掘調査に際しては土層観察を行うように努めたが、土層畦の設定が適当でなく、整理段階で平面図上のレ

ベルを使用して断面図を作成している遺構もある。また、調査時に誤った遺構名をつけたものについては、整理段階で訂正した。

## (2) 発掘調査の成果

今回の調査地点は、前回までの調査とは異なり、畑の耕作が遺構面にまで深くおよび、特に住居址においては壁がすべて削平されている遺構もあり、遺存状態はあまりよくなかった。

このような状況の中で、縄文時代の住居址が1基、弥生時代の住居址が2基、平安時代の住居址が9基検出された。

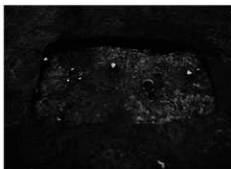
また、中世と考えられる竪穴建物址は33基出土した。

縄文時代の住居址は、時期としては前期末葉と考えられる。

この住居址では壁の周囲に小さなピットが出土しただけで、柱穴を明確にはできなかった。また、床面に埴の痕跡を確認することができず、遺物も破片が少量出土したのみであった。

土坑は92基が出土している。これらの多くは前期末葉から中期初頭に位置付けられる遺構が主であるが、縄文時代早期末葉や後期、弥生時代前期の土坑も出土した。縄文時代後期の土坑は、覆土から焼土が検出されることが多かった。第402号土坑は、第25号竪穴建物址と重複していたものの、残存部から縄文時代中期初頭の土器が、逆位で押しつぶされたような状況で出土した。また、第381号土坑は形態から小竪穴と考えられる。これらの内、断面が筒状の形態では、比較的深い掘り込みのものもあったが、大半は断面形態に関わりなく浅い。第163号土坑は、深さ約10cm程度の掘り込みとして検出されたにもかかわらず、中期初頭の器形が復原できる深鉢や浅鉢が出土している。なお、この遺跡の調査を通して出土した落し穴状土坑は、今回の調査では1基出土したにすぎない。今回の調査地点は第2次調査までとは異なり、傾斜が緩くなった地区であることから、狩猟を行うのに適していなかったと推測される。

集石は、時期を確定できるような遺物が出土していないため、詳細は明確ではない。形態としては第23号集石と第24号集石の平面形態が近似しており、出土地点も遺構の検出されていない地点からであるため、比較的新しい時期の集石の可能性もある。同様に第26号、第27号集石も新しいと考えられる。また、第29号集石は底面に大型の礫を敷き、その上部に拳大の礫を詰め込んでいる形態から、縄文時代早期の集石埴の可能性が高い。その他、前回までの調査でも出土した、底部に掘り込み





を伴うタイプや、遺構検出面に礫が集められただけの様なタイプも存在している。なお、掘り込みを伴う集石の底部に石を敷いたような痕跡が確認できたのは第30号集石のみであり、他は土坑を掘った後にそのまま礫を入れ込んでいたと考えられる。なお、第30号集石の底部には焼土が見られた。



弥生時代の住居址は床面まで耕作がおよんでおり、住居址の規模を把握することができなかった。特に第80号住居址は炉が検出されたのみであった。なお、出土した炉として使われた壺から、後期後半と考えることができる。



土坑では、第338号土坑は深さ約1m、直径1mに満たない土坑であるが、底部から煤の付着した条痕文を伴う土器片が出土している。底部は失われていたが、破片は比較的大型であった。また、これとは別個体の破片も底部から出土している。前期の土器を伴う土坑は第2次調査でも出土しており、今後当遺跡において、前期の生活遺跡の発見に期待が寄せられる。



平安時代の住居址も遺存状態が悪く、住居址の規模を正確に把握することができた遺構はなかった。これらの内、第70号住居址の覆土中から帯金具が出土したのをはじめ、第73号住居址からは鉄製紡錘車等が見つかっている。なかでも第75号住居址は土師器坏・盤、灰輪陶器碗・皿といった食膳具、鎌・火打金・刀子といった鉄製品等がまとめて出土した。



平安時代の住居址は、時期の判明するもので11世紀後半に該当するようである。

そのほか、今調査では中世の竪穴建物址も出土している。竪穴建物址の覆土内は、地山の黄色土や、炭・焼土が混入している例がある。また、平面方形プランの竪穴建物址は重複が激しく、建物址としていいのか検討の余地がある。遺物もあまり出土しておらず、遺構の性格を明確にすることは難しい。

遺物は白磁碗破片や、龍泉窯鍋連弁文の青磁碗破片、美濃瀬戸系の香炉・内耳土器が出土しているほかに、鉄製品が出土している。時期としては、第1次・第2次調査で出土している陶磁器と同時期と考えられ、製鉄関連遺構と合わせて考えていく必要があろう。

## 第Ⅳ章 遺構と遺物



第5図 調査地区全体測量図 (S=1/800)

## 1. 住居址

### (1) 縄文時代

#### 第78号住居址 (第6図)

この住居址はDW-87グリッドを中心に出土している。東部を平安時代の住居址である第75・77号住居址によって破壊されている。直径は約4mの隅丸方形の平面プランと考えられ、壁高は約20cmであった。

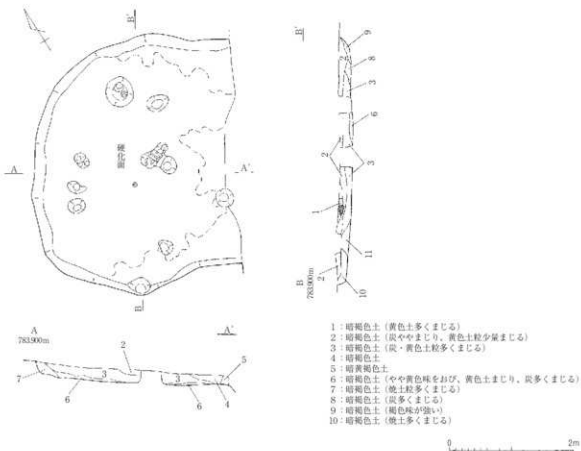
床面の中央部にはピットが集中して確認されたもの、焼土は確認されていない。このため、炉の位置は確定することができなかった。また、その周辺にもピットが複数出土しているが、いずれも支柱穴として確認することができなかった。

なお、覆土中には炭片が混入しており、特に北部隅で比較的多く検出された。また、北西部には焼土も多く混入していたことが観察されている。

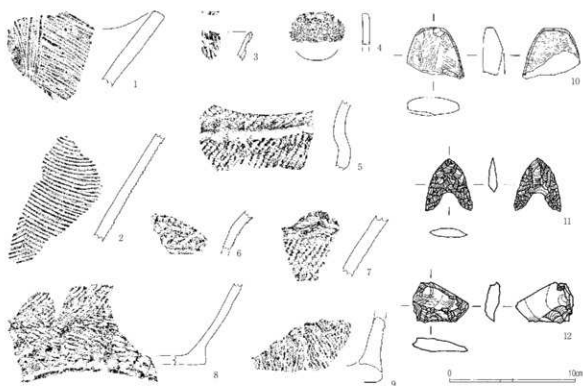
#### 遺物 (第7図)

この住居址からは縄文時代前期末葉の土器片が出土している。

1・2は、半截竹管状工具を使用しての平行沈線文を弧状に密接に施文している。1の口縁部は波長の大きな波状を呈し、波頂部と考える部分の下部から数条の平行沈線文が縦位に垂下されている。その後、口縁部と



第6図 第78号住居址遺構平面図



第7図 第78号住居址出土遺物 (11・12: S=2・3)

平行になる形で密接な平行沈線が施文されている。2の口縁部下半部では、この密接に施文された平行沈線文がレンズ状文となっていることから、1の破片についてもレンズ状文の可能性がある。なお、両破片とも外面にススが附着しており、1の内面にはミガキの痕跡が確認できる。

3は薄手の器壁で、口唇部を肥厚させるために粘土紐を貼付し、その口唇部下部から、口縁部に斜めに扁平な粘土紐を貼付している。粘土紐の貼付後には、クシ歯状工具を使用して縦位の沈線を引いている。また、口唇部は同一の工具と考えられるクシ歯状工具による刺突文が見られる。

4は土製円盤である。

5～8は縄文を施文している土器である。5は体部の破片である。胎土が白色系であり、外来系の土器の可能性も考えられる。8は底部の破片である。無節の縄文で、内面には横位のミガキ調整が施されている。なお、6の外面と7の内面、8の内外面および破断面にススの附着が見られる。

9は底部である。1より浅い平行沈線文がやや粗雑に縞杉状に施文されている。上端部の破断面にはススの附着が見られる。

10は磨製石斧の基部破片である。蛇紋岩製で、整形痕を留めている。

11は黒曜石製の石鏃である。凹基鏃で、脚部が比較的長い形態である。

12は剥片石器である。



(2) 弥生時代

第72号住居址 (第15図、第16図)

この住居址はDP-91付近より出土した。第71号住居址を調査中に床面から埋燗炉が出土したため、弥生時代の住居址の存在を確認した。

この住居址は第71号住居址と重複し、東部は開鑿のための掘削および耕作によるカクランがあり、更に中世と考えられる竪穴建物址も出土しており、遺構が複雑に重複していることから、検出されたピットの時期も複雑で、住居址の規模を明確にすることができなかった。

炉体は、直径約20cmで、周囲にはやや長く被熱による赤色化の範囲が広がっていた。また炉の内部には焼土が厚く検出された。

また、出土した土器の残存部の高さが約5cmと薄いことから、平安時代の住居址が造成される際に、上部を削られた可能性がある。

遺物 (第9図1)

この住居址では、炉体として使用されていた甕の体部が出土したのみである。外面には器面全体に板状工具による斜位のナデ調整を行い、その後、上部に斜行する短線文が施文されている。また、体部中部の数箇所に縦位のごく短いナデ調整の痕跡が見られる。内面には板状工具による斜位の粗いナデ調整が行われているほか、横位のナデ調整痕も観察できる。

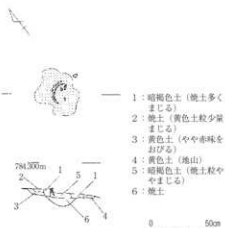
第80号住居址 (第8図)

EB-78から出土した。開鑿による削平と、耕作によるカクランのため、住居址のプランは把握できず、炉を検出したにとどまった。住居址の規模は不明である。

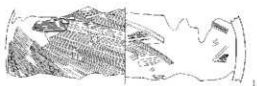
遺物 (第9図2・3)

2は体部の破片である。外面に縦位のハケ調整の痕跡が観察できる。残存する体部の下部に最大径がある形態から、甕の可能性はある。

3は甕の口縁部の破片である。上部に9条1単位と考えられるクシ描波状文、その下部に同一工具による横位のクシ描短線文が深く施文されている。内面には板状工具による斜位のナデ調整痕が確認できる。



第8図 第80号住居址遺構平面図



第9図 第72・80号住居址出土遺物

### (3) 平安時代

#### 第69号住居址 (第10図)

D S-84より出土した。1辺約4.2mの平面方形と考えられる。床面のほぼ全面に硬化面が検出できたが、北部隅にカクランがおよび、北部壁と東部壁は明確に壁を検出することができなかったため、南壁隅の周溝の屈曲部から壁を推定した。

カマドは検出できなかったことから、カクランを受けた地点に存在していた可能性がある。

また、この住居址の南東部にも硬化面が出土し、南西部に若干の段差が検出されていることから、この地点にも住居址の存在が想定できたが、明確に検出できなかった。土層断面で推察すると、第69号住居址の覆土中には黄色小粒の混入した若干黒味の強い暗褐色系の土で占められているのに対して、それより南東部では、黄色土の多く混入した暗褐色系の土であった。このことから、以前にこの地点に住居址が存在していた可能性がある。なお、硬化面から想定できる遺構のプランは4.3×4mの方形であった。

住居址覆土中および床付近からは多数の礫が出土したが、遺物はほとんど出土しておらず、鉄製品と石器が図示できたにすぎない。また、床面中央部付近には、被熱により赤色化している部分も検出された。

床面にはピットが検出されているが、この住居址に伴うものか明確にはできなかった。

#### 遺 物 (第11図)

この住居址からは図化できるような土器類は出土していない。

1は鉄鎌である。茎部で折損しているが同一個体と考えられる。2は棒状の形状を呈する鉄である。床面付近から出土した。

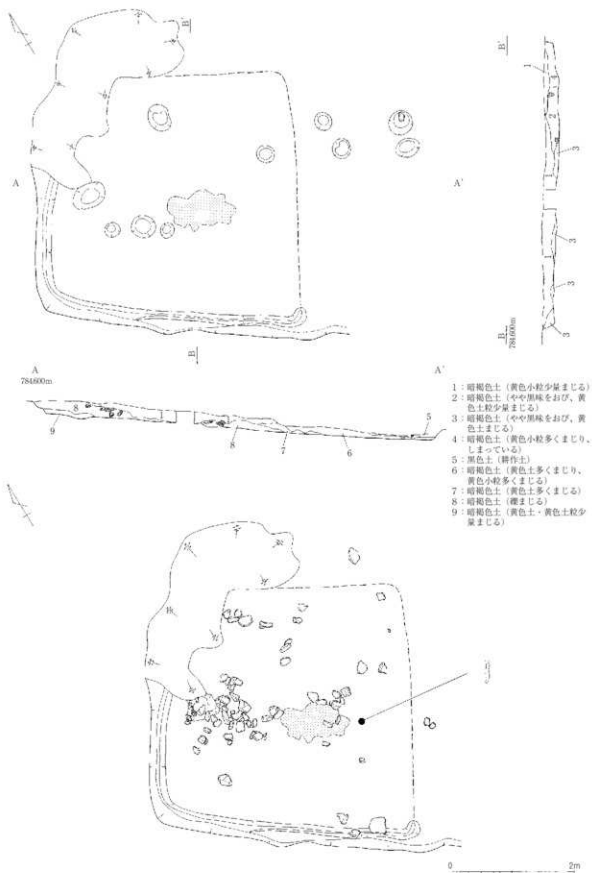
3・4は菰手石と考えられる。3は一部欠損している。5は磨石である。両面ともに使用されており、磨かれたようになめらかになっていた。縁辺部はあれたような磨り面が確認される。表面の一部と裏面にスガが付着している。なお、覆土中の出土のため、混入品の可能性もある。6は床面付近から出土した。大型の礫の一部である。表面はなめらかで、光沢があることから、台石として使用されていた可能性が高い。

#### 第70号住居址 (第12図、第13図)

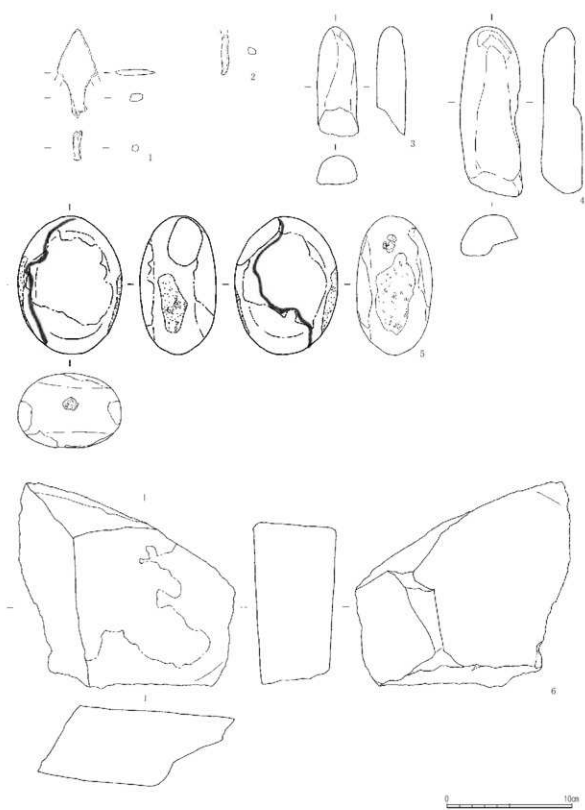
E I-81から出土した。4.5×4mの若干長方形を呈する平面プランである。壁高は深い所で約50cmを測る。覆土は暗褐色系で、黄色小粒が混入していた。南東壁が失われてしまっていたが、周溝はカマド右から北東壁に巡らされており、東溝では幅が広がっていた。床面からピットが2ヶ所出土したが、浅いため、支柱穴とは考えられない。また、硬化面は確認できなかった。

カマドは北西壁中央付近に設置され、比較的構造をとどめていた。両袖石ともに、床面を掘り込んで設置し、その外側を暗黄色系の土で固定して白色粘土を貼り付けている様子が観察された。また、焚口部には細長い石が横位に設置されていた。この石の上面に粘土が検出されていることから、石の上に粘土を貼って盛り上げ、住居床面との境界としていたと考えられる。燃焼部は被熱によって深くまで地山が赤色化しており、奥壁から住居址外に向かって掘り込みが確認され、焼土粒も検出されていたことから、煙道が存在していたと考えられる。なお、カマド右側から50×40cmの扁平な三角形の礫が出土しているが、その下部に焼土や炭を多く混入した覆土を持つ深さ約10cm程度の浅い土坑が検出されていることから、住居址の廃絶時にカマド脇の土坑上に天井石を抜き取って廃棄していった可能性がある。

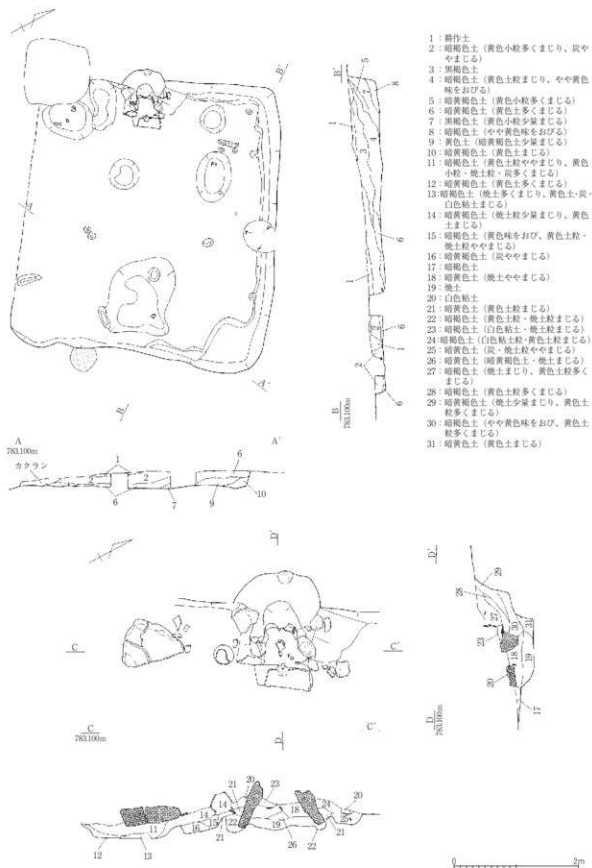
遺物はカマド付近を中心に出土しており、カマド左脇には小型甕が伏せられるようにして底部を欠損した状



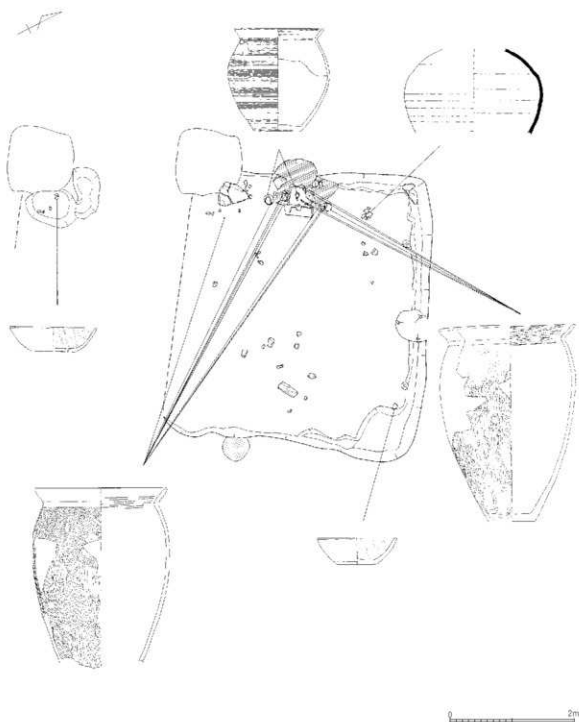
第10図 第69号住居址遺構平面図・遺物出土状況図



第11图 第69号住居址出土遺物

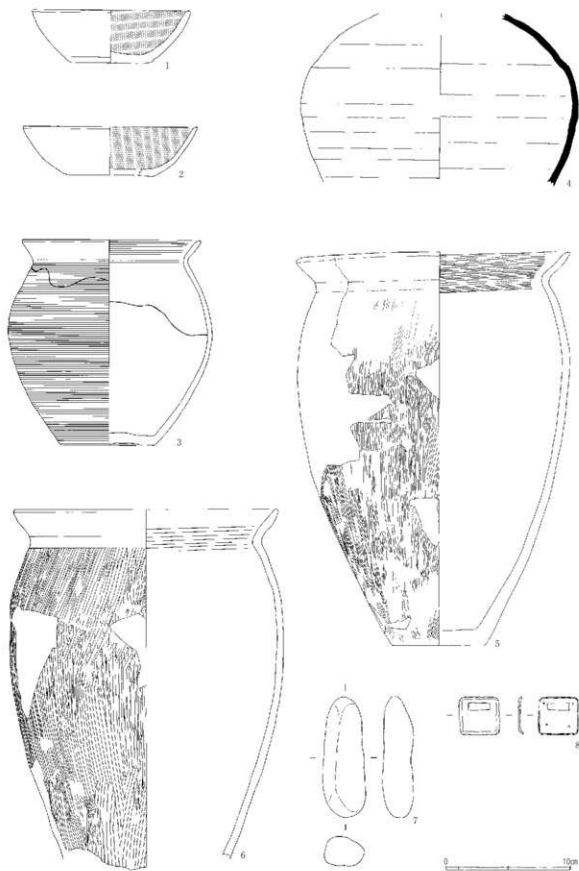


第12図 第70号住居址遺構平面図 (カムド: S-1/30)



第13图 第70号住居址遺物出土狀況图

第IV章 遺構と遺物



第14图 第70号住居址出土遺物

態で出土し、底部は燃焼部から出土している。また、カマド袖周辺や、燃焼部からは長胴甕が出土した。

その他、北部壁隅付近から須恵器甕の体部破片が出土し、東部床面には内黒土器の破片の出土もみられた。

また、カマド脇の土坑からは内黒土器の破片が出土している。

その他にも覆土中ではあったが、青銅製の帯金具（巡方）も出土している。

#### 遺物（第14図）

1・2は内黒土器である。いずれも破片での出土のため、器形を復元している。1の口径は12.6cmで、器高4.2cmである。2は口径14cm、器高4cmである。なお、1は床面から、2は西隅の灰捨て土坑内から出土した。

3は小型甕である。ほぼ完形に復元できた。球形状の体部外面には丁寧なカキ目が施され、器壁も比較的薄く仕上げられている。なお、体部の内外面にススの付着がみられる。

4は須恵器甕の破片である。小片であったため器形を復元している。肩に自然釉の付着がみられる明灰色を呈した焼成の良好な土器である。

5・6は長胴甕である。いずれも破片からの器形復元である。5は外面全面に浅い縦位のハケ目調整が行われている。体部上部では、ヨコナデ調整と考えられるナデによってハケ目が消えており、その後上半部にヘラ状工具によると考えられる横位の極浅い沈線が数本引かれている。直線気味に立ち上がる口縁部の内面には、目の細かいハケ目が密に施されている。6は外面に縦位の明瞭なハケ目がみられ、頸部から口縁部はヨコナデ整形が行われており、頸部のハケ目が直線的にナデ消されている。また、若干内湾しながら直線的に立ち上がる口縁部下半部には、目の粗い横位のハケ目が見られ、上半部は内湾気味に整形するためにナデ調整が行われている。

8は青銅製の帯金具（巡方）である。

7は菰手石と考えられる。

#### 第71号住居址（第15図、第16図）

この住居址はD0-90付近より出土した。遺構の存在が疑われたため、地形に沿って東西方向に何本かのサブトレンチを開坑したところ、底面から硬化面を検出したため、住居址の存在が確認できた。しかし、掘り広げていくと、壁面が確認できず、全面を掘り上げてしまい、結果的に残された土層観察畦及び床面の段差によって、2基の住居址の存在と、その規模を推定せざるをえなかった。

土層断面の観察から、南部の住居址が北部の住居址を掘り込んでいる様子が観察でき、この住居址を第71号（南）住居址、掘り込まれた住居址を第71号（北）住居址とした。

第71号（北）住居址は南北方向を第71号（南）住居址に切られ、東部に削平を受けていることから、規模を明確にすることはできなかった。残存している床面には硬化面が確認できる。なお、住居址の主軸は、第71号住居址より若干西方向に振れていることが、西部の壁の検出状況から推定できる。

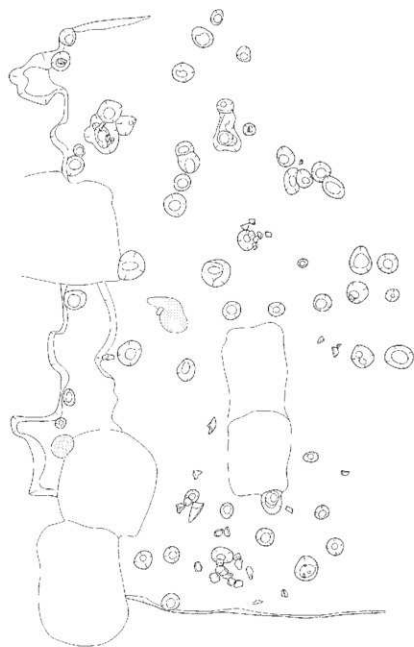
第71号（北）住居址は南北約4.9mを測り、東西の規模については、東部が削平を受けていたため明確にはできなかった。検出された床面全体に硬化面が確認できた。なお、この住居址床面からは第72号住居址の埋裏如が出土した。

この住居址付近には、ピットも多数出土したが、中世の堅穴建物址も重複していることから、当該期の柱穴も含まれていると考えられ、住居址に伴うと考えられる柱穴の特定が困難であった。

この住居址からは図化できる遺物の出土はなかった。

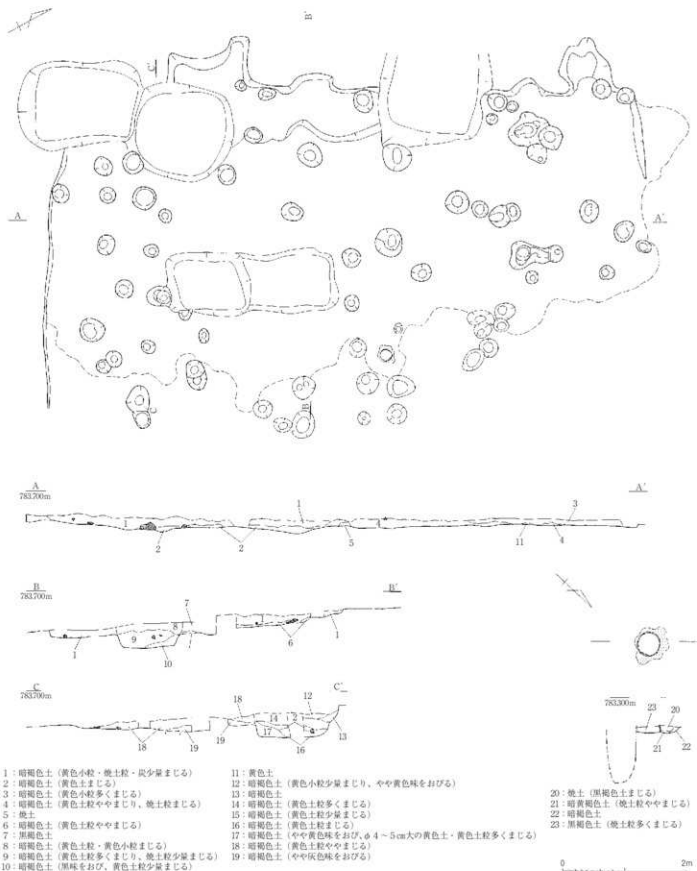


A



0 2m

第15図 第71・72号住居址遺物出土状況図



第16図 第71・72号住居址遺構平面図 (埋藏甲：S=1/30)



## 第73号・第79号住居址（第17図、第18図）

E B-93から出土した。住居址中央部に大きなカクランがおよび、破壊が激しい。第73号住居址は、第79号住居址の下層から出土している。南北方向の土層観察では、第79号住居址が第73号住居址の廃絶後に造られていると考えられたが、明確にすることが困難であった。

規模は推定で2.5×2.9m、深さは約20cmで、周溝が北壁半分から西壁、および南壁の一部に見られる。この周溝は途中で西壁から一部屈曲して検出されていることから、3.5m四方の住居址からの拡張が行われている可能性もある。土層は、北部壁際で焼土小粒や黄色小粒、炭の混入した暗褐色系の土が観察されたように、全体的に黄色小粒や、炭の混入がめだつ覆土であった。

床面の調査ではビットが多数検出されたものの、主柱穴を特定することができなかった。また、カクランによって破壊されてしまったのか、東隅に被熱地点が検出され、隅に、焼土を伴った覆土の観察された土坑も出土したものの、カマドは検出することができなかった。

この住居址の床面からは鉄製品が出土（第18図）しており、覆土中からも出土している。

第79号住居址は、推定規模が約2.2×2mの平面若干長方形を呈し、深さは約20cmを測る。覆土は黄色小粒の若干購入した暗褐色系の土であった。カマドは北壁の中央部付近に存在している。カマドの右脇には土坑が出土し、下層には焼土が多く混入した暗褐色系の土が出土している。

柱穴は北側の2ヶ所（P.1、P.2）が検出され、第73号住居址内の1ヶ所（P.3）も想定できそうである。なお、もう1ヶ所についてはカクランによって破壊されている可能性が高い。

なお、これら2基の住居址の調査中には、3ヶ所から焼土が検出されている。

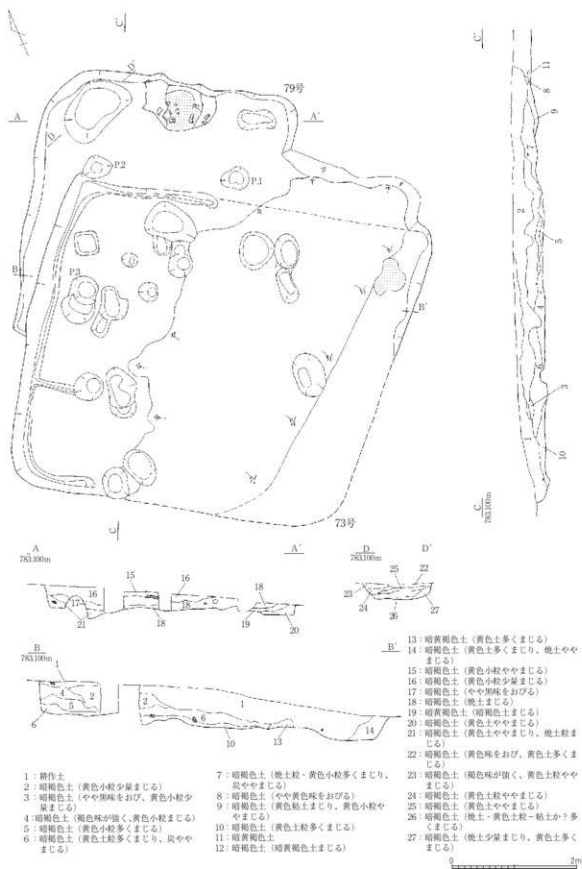
## 遺物（第21図1～16）

これらの遺物はすべて第73号住居址からの出土で、そのほか図示できない小片も出土している。1は土師器破片である。口径8.7cm、器高1.4cmと小型化が進んでいる。2～4は灰軸陶器碗である。いずれも破片からの復元である。2は口径13cm、器高2.8cmと浅めの碗である。軸葉は漬け掛けで、内外面共にほぼ全面に渡って施軸されている。特に外面上部と内面下半部に厚く軸葉が掛けられているが、内面は焼成が不十分であったのか、きれいに溶融していない。口縁端部は若干玉縁状を呈している。3は体部の破片である。器面全体に軸葉が薄く掛けられ、口径が大きく器形がずんぐりしていることから深碗の可能性もある。内面の口縁端部にはヘラ状工具によって沈線が引かれている。4は口径15.6cm、器高4.6cmである。外面の上半部と内面に軸葉が漬け掛けによって薄く掛けられている。内面には重ね焼きの痕跡を留め、高台は三日月高台である。5は須恵器である。壺の口縁部破片である。

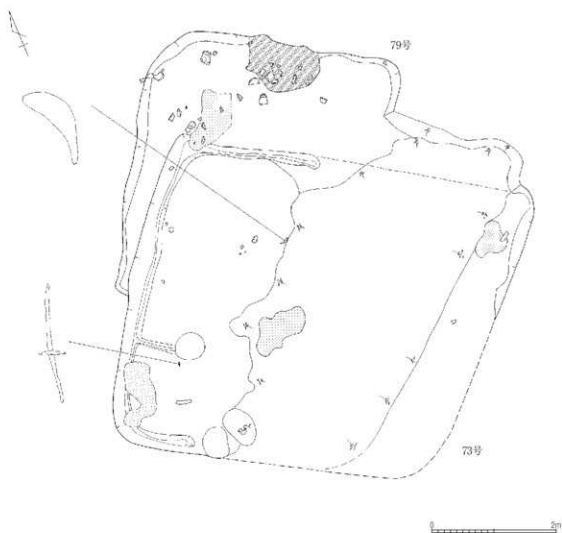
6・7は菰手石と考えられる。7は砂岩で、脆弱である。

8～15は鉄製品である。8・9は床面からの出土で、他は覆土中からの出土であった。8は紡錘車である。軸棒が歪んでいるが、上端の折り返しまで残存している。9は鎌である。幅広い身を持つ形態を呈しているが、着柄部の折り返しは欠損している。10は火打金である。両端部が若干反り上がるような形態であり、上端部が欠損している。また、刃部上部に穿孔が2ヶ所見られる。11は端部を二股にしており、何かに挟む様に取り付けて使用していた可能性があるが、用途は不明である。12は鈴状の形態を有した鉄製品である。紐状の突起部分には穴が見られず、用途は不明である。13は板状の鉄器で、上部をやや折り曲げている。また下部には1ヶ所穿孔が見られる。なお、遺存の状態が良好なことから、時代的に新しい可能性もある。14は板状の鉄製品、15は棒状の鉄製品である。

16はガラス製の小玉である。覆土中から出土した。住居址に伴うかは疑問が残る。



第17図 第73・79号住居址遺構平面図



第18図 第73・79号住居址出土状況図

#### 第74号住居址（第19図、第20図）

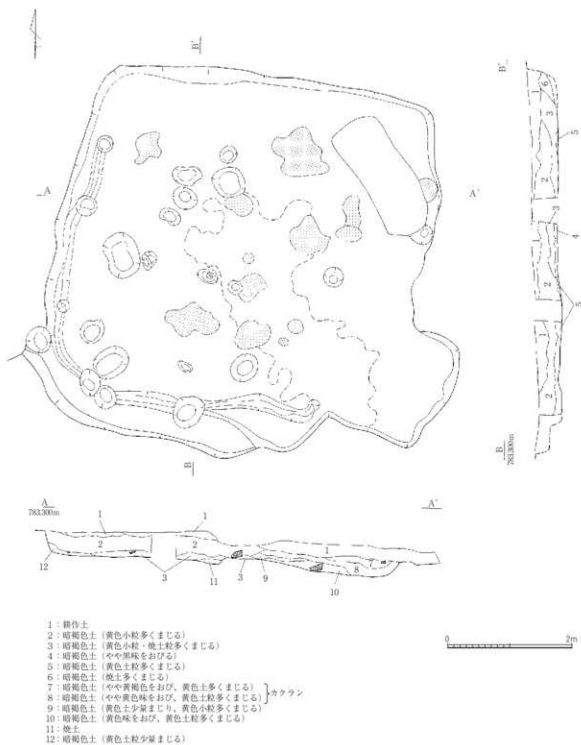
この住居址は第75号住居址と第77号住居址と重複してDW-92から出土している。約2.8mの平面方形で、深さは約20cmを測る。東部壁は耕作による破壊で壁を失っており、南部壁は検出に失敗して壁を掘り抜いてしまっている。覆土は黄色小粒を多く混入した暗褐色系の土が主体で、下層では焼土が多く混入していた。

周溝は西部と南部から小ピットを伴って出土した。また、東隅には第13号竪穴建物址が掘り込まれている。床面からはピットが多数検出されたが、柱穴を明確にすることができなかった。硬化面は床中央部付近から南東部の一部をのぞいて確認でき、小規模な被熱箇所が床面に多数検出されたが、カマドは出土しなかった。しかし、住居東部壁付近から検出された被熱箇所にかマドが存在した可能性が高い。

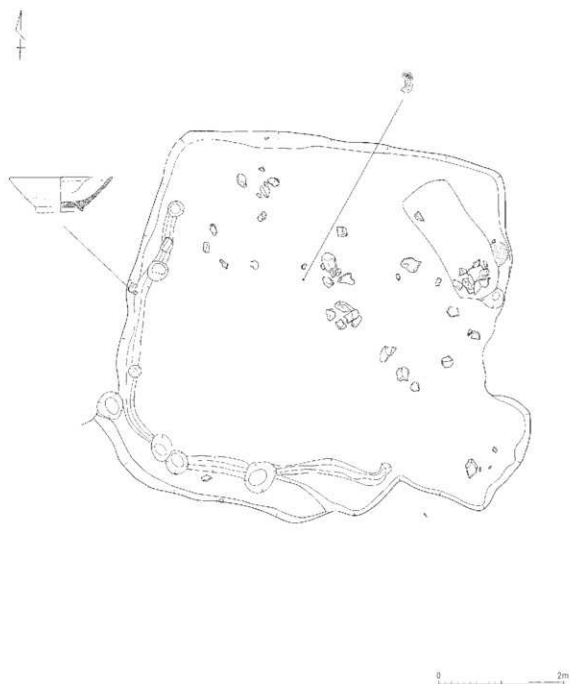
なお、床面付近では、勾玉が床直上で1点出土しているほかは、西部壁際に灰軸陶器碗が1点出土したのみである。

#### 遺物（第21図17～24）

17は須恵器杯蓋のつまみである。擬宝珠状の形態をしていた上部を磨いて平坦にしている。また蓋との接合部分についても平坦に切り取られている。意図的な切り離しではあるが、用途は不明である。

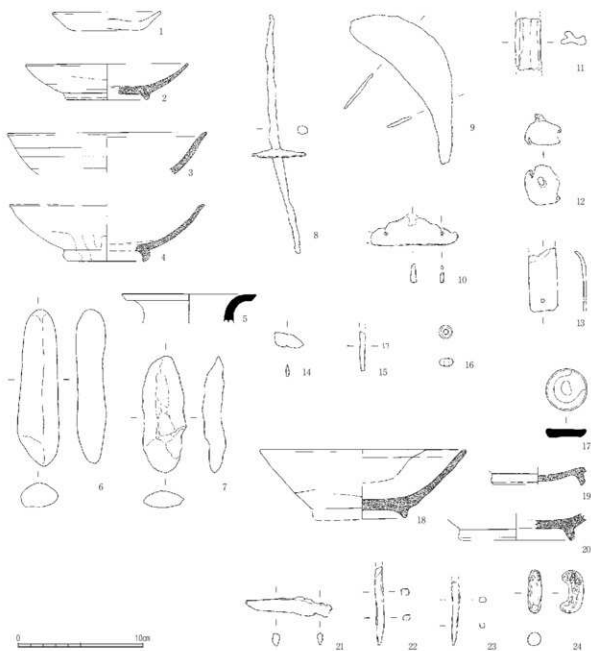


第19図 第74号住居址遺構平面図



第20图 第74号住居址遺物出土状況図



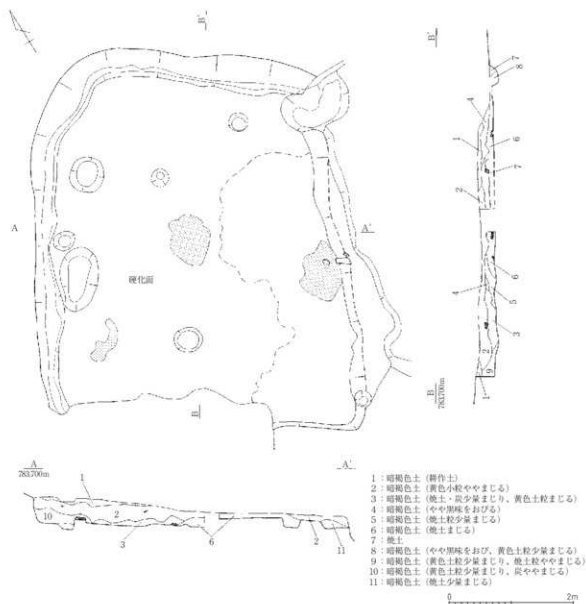


第21図 第73・74号住居址出土遺物（1～16：73住、17～24：74住）

18～20は灰軸陶器碗である。18は床面からの出土で、高台が一部失われている。口径16.8cm、器高5.7cmである。軸葉は掛けられておらず、器面もあれていて高台は貧弱で粗雑な付け方である。全体にススの付着が見られる。19・20は底部の破片である。床面付近からの出土である。見込み部の一部がなめらかになっており、転用碗の可能性はある。

22・23は棒状の鉄製品である。下端部がとがっているが、用途は不明である。21は刀身の刀身と考えられる。柄部が欠損している。

24は勾玉である。「コ」字形に屈曲しており、瑪瑙製と考えられる。整形時の磨いた痕跡を明瞭に留めており、古墳時代後期の遺物と考えられる。

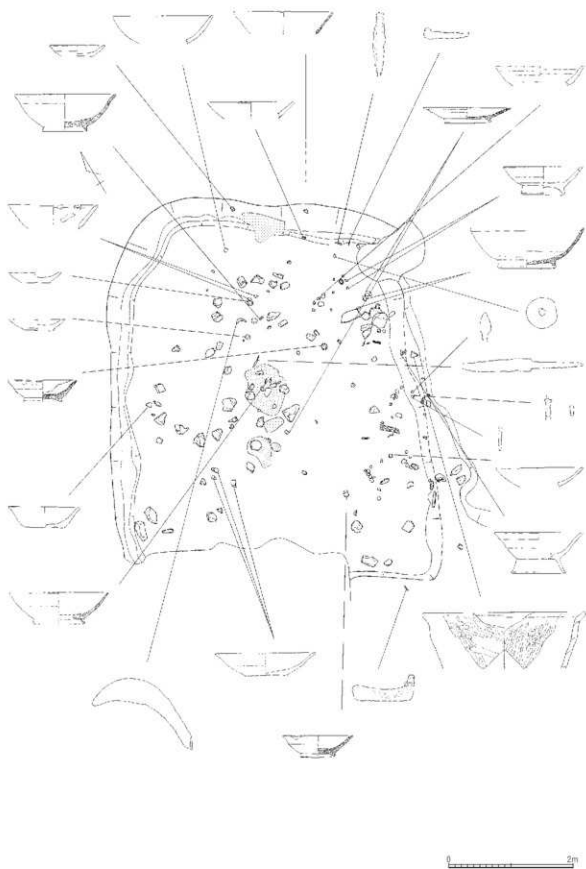


第22図 第75号住居址遺構平面図

## 第75号住居址 (第22図、第23図)

第74号住居で述べた通り、複数の住居址と重複してDW-90から出土している。この住居址は南東部の検出に失敗し、壁を一部破壊してしまった可能性がある。プランは5.8×5m、深さ約30cmの平面長方形と考えられる。この住居址は床面付近で大量の遺物 (第23図) が出土した。周溝は北東壁と西壁の2辺で検出され、床の3ヶ所に被熱により赤色化した地点が検出された。カマドは検出することができなかったものの、南東壁付近の被熱地点に存在した可能性が考えられる。なお、硬化面は北部の2/3ほどであった。

下層部の覆土には焼土や炭の多く混入した層があり、そのうち2ヶ所は焼土であった。前述の通り多量の遺物が出土していることも考え合わせると、火災住居である可能性が高い。



第23図 第75号住居址遺物出土状況図

柱穴については、この住居址に伴うと考えられるピットを特定できなかったため、明らかにすることはできなかった。

#### 遺 物 (第24図、第25図)

1～13は土師器である。1～5は体部の破片である。1・2・4は口径14cmで、1・2は比較的浅い器形と考えられ、4は器面に横位のナデ調整痕を残している。3は口径14.4cmを測り、内面の一部にススの付着が見られる。5は口径16cmを測る。

6は坏である。口径16cm、器高3.6cmを測る。図では表現しきれないものの、大きく歪んでおり、内外面ともに薄くススが付着している。7～11は小型の坏である。口径は、7が8.2cm、8・9が9cmで、10は10cmであった。器高は7～10すべて2cm程度である。この内7・8は完形での出土であり、9は破片での出土ではあるが、ほぼ器形に復元できた。11は若干大型の坏で11.6cm、器高3.3cmである。時期的にはやや古い可能性もある。

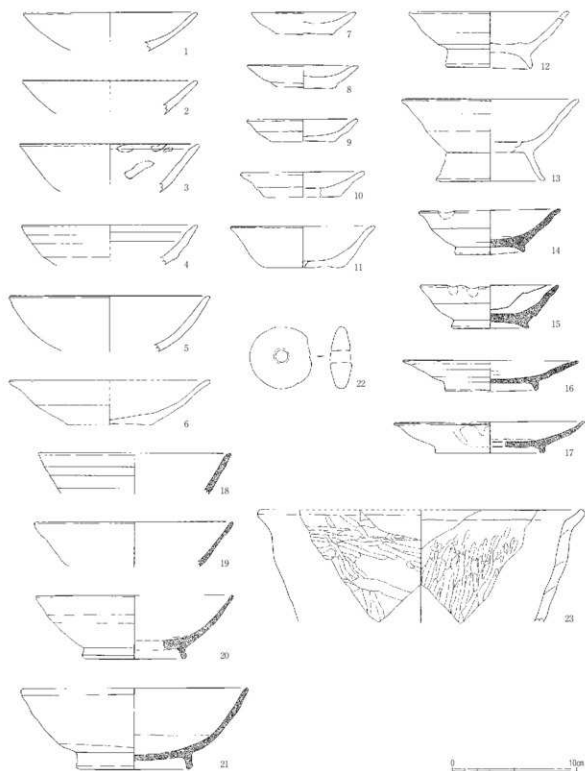
12は碗である。体部のほとんどを欠損している。推定で口径13cm、器高4.5cmを測る。13は盤である。1/3程度残存しているにすぎない。口径は推定で14.2cmを測り、器高は6.5cmである。

14～21は灰釉陶器である。14・15は小型の碗である。口径は11cm程度であり、器高は3.4cmである。14の口縁部には4ヶ所輪花が施され、内面の3/4程度と、外面の口縁部上部の一部に自然釉とも考えられる釉薬がみられる。なお、高台の内面にはススが付着し、見込部には重ね焼きの痕跡が観察できる。また、15は一部が欠損しているのみである。輪花が4ヶ所に施されており、内面の一部と外面のほとんどの部分にススの付着が見られる。特に外面はタール状に厚く付着している。釉薬は自然釉と考えられる。また外面体部下には、焼成時に生じたと考えられる亀裂がある。16は図上では明瞭な線を表現しきれなかったものの、段皿である。外面は口縁部端部付近に薄い釉薬が掛けられ、内面は見込部付近まで、3/4ほどの範囲に自然釉状の釉薬がみられる。口径14cm、器高2.5cmを測る。17は皿の小片である。口縁端部が外に折り返されている器形で、外面には高台まで釉薬が薄いながらも掛けられ、一部にはタレがみられる。内面は見込部まで厚く施釉されている。なお、見込部はなめらかであり、若干光沢がある部分も存在していることから、転用製の可能性もある。この皿は、口径15.4cm、器高2.4cmを測る。

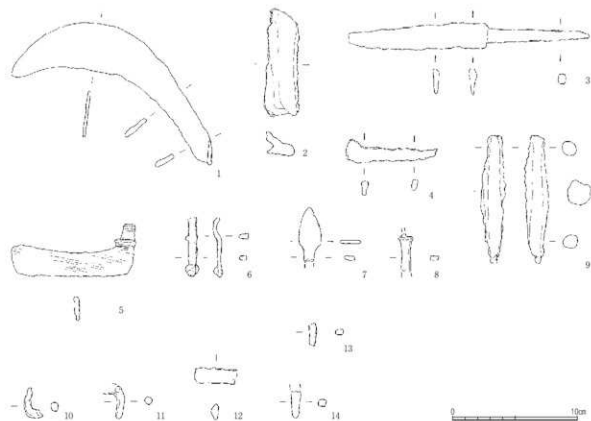
18～21は碗である。いずれも破片である。18は還元焰焼成ができておらず、赤褐色を呈した破片である。施釉の痕跡はなく、1ヶ所に輪花がみられる。19は釉薬が掛けられていない小片である。20は口径15.8cm、器高5cmを測る約1/2個体の破片である。内外面共に体部上半部に薄く釉薬が漬け掛けされている。なお、内面は自然灰戻と考えられる釉薬も体部下半部にみられる。また、見込部には重ね焼きの痕跡が残されている。21は深碗の破片である。体部は1/4ほどしか残存していない。漬け掛け施釉であるが薄い。また、見込部には焼成時に歪んで発生したと考えられる大きな亀裂がある。なお、この碗は第361号土坑および第78号住居址から出土した破片と接合している。

22は土製の紡錘車の弾み車である。混入品の可能性が高い。23は鉢の形態をした土器片である。外面はハケ状工具を使用しての調整の後に、横位から縦位のミガキ調整を行い、内面は横位のナデ調整の後に、縦位のミガキ調整が施されている。なお、この土器は壁の外側から出土した可能性があり、住居址に伴わない可能性もある。

第25図は鉄製品である。1は鎌である。完形で出土している。身の幅は狭いが刃部は比較的長い。2は鋤先の耳部と考えられる。3・4は刀子である。3は切先が欠損しており、4は刃部がすべて失われている。5は麻引金である。把手部分が一部欠損しているが、残存している把手部分には木質部が一部錆着している。7は



第24図 第75号住居址出土遺物



第25図 第75号住居址出土遺物

鉄製の刃部、8は基部である。6・9・10~14は用途不明な鉄製品である。6は混入品の可能性が高い。なお、10・11は第75号住居址の排土内から採集した遺物である。

#### 第77号住居址（第26図、第27図）

この住居址も、第74号・第75号住居址と重複してDX-88から出土した。第75号住居址との切り合いによって、北東半部は失われてしまっている。覆土には、黄色小粒や焼土粒が上層から混入していた。プランは1辺が2.5mで、深さが約35cmであった。周溝が北壁の一部から出土した。硬化面は一部に確認できるだけであり、この付近から被熱による赤色化した床が検出されている。床面からはビットが不規則に出土したが、主柱穴を特定することはできなかった。

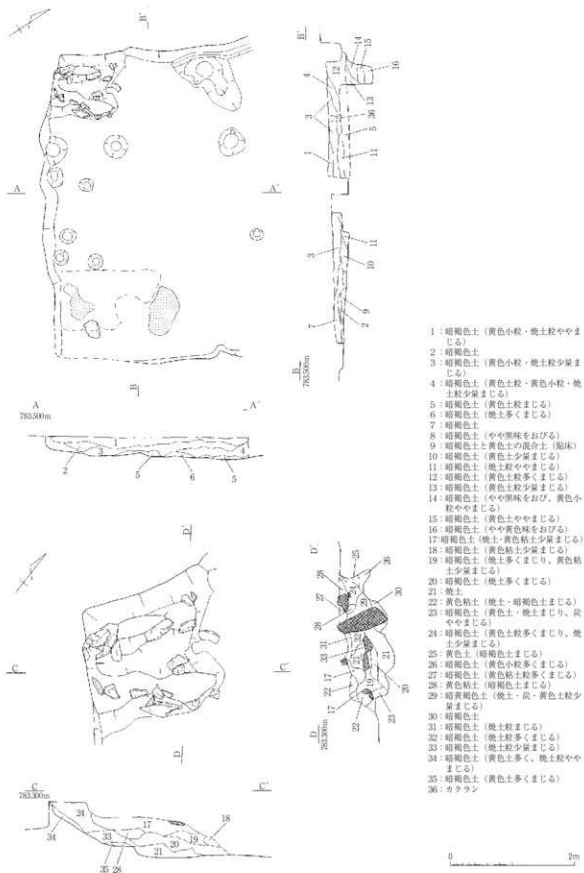
カマドは西部隅から検出された。両袖の袖石が残存し、その外面は黄色系の粘質土で覆われていたと推測される。燃焼部の覆土中にも焼土が多く混入しており、下部にも被熱による赤色化した部分が厚く見られた。カマドの壁外側に向かって、焼土を混入した土が断面観察によって確認されており、煙道が存在が想定できた。

なお、床面付近からは灰釉陶器碗と土師器碗の底部破片、羽釜の破片が出土している（第27図）。

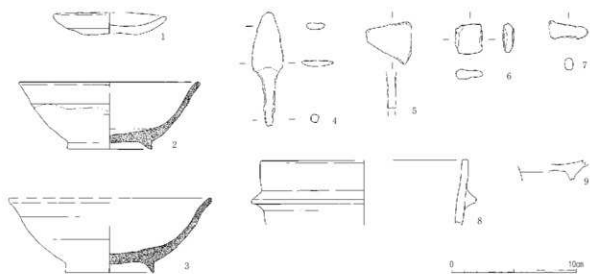
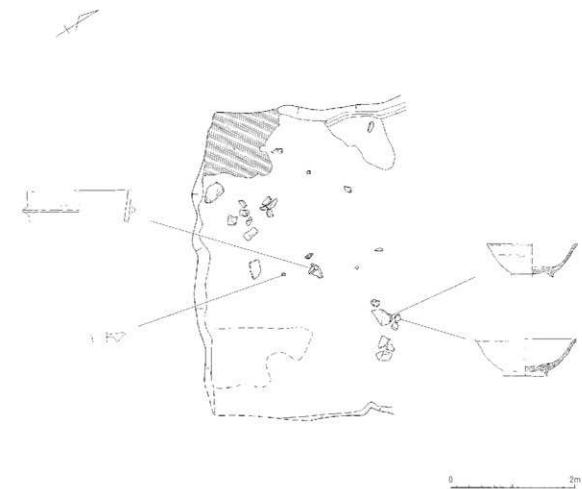
#### 遺物（第27図）

1は土師器の坏である。破片で出土し、一部の破片は第75号住居址から出土している。非常に小型化が進んでおり、口径9cm、器高1.8cmである。

2・3は灰釉陶器碗である。2は外面の上半部と、内面の体部に薄い釉薬が掛けられており、見込部には重ね焼き時の高台痕が残されている。なお、見込部および高台内が若干黒味を帯びており、見込部の一部には



第26図 第77号住居址遺構平面図 (カマド：S-1/30)



第27図 第77号住居址遺物出土状況図及び出土遺物



磨ったような痕跡も確認できる事から、転用製の可能性がある。3は口径16.2cm、器高6cmである。底部は当該住居址の出土であるが、体部は第75号住居址からの出土である。軸葉は外面体部上部に痕跡程度に施され、内面には、それよりやや厚めに体部全体に施軸されている。なお、見込部分に高台を重ねて焼成した痕跡および剥離痕をとどめ、見込部は一部剥離している。

8は羽釜である。小片からの復元である。内面に薄くススが付着している。9は土師器椀の底部である。床面から出土している。高台は下部が欠損しており、体部は打ち欠いたかのように破損している。

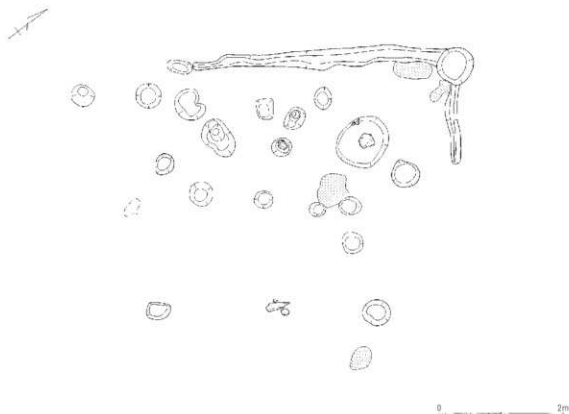
4～7は鉄製品である。4は鉄鏃である。茎部が欠損している。5・6は用途不明の鉄片である。铸铁製品の一部の可能性もある。7は棒状の鉄製品である。

#### 第81号住居址（第28図）

E F-88付近から出土した。この住居址周辺は床面付近まで耕作が及んでおり、壁を失ってしまっていた。住居址の規模は残存する周溝から推定すると、1辺が6m程度であった可能性がある。床面には硬化部も検出できず、カマドの位置も不明である。また、ピットも多数出土したが、支柱穴を特定することができなかった。なお、北隅と、床面北部に出土した土坑は、この住居址に伴うと考えられるが、遺物は出土せず、床面の土坑から礫が出土したのみであった。

床面の4ヶ所には被熱による赤色化した地点が検出されている。

この住居址からは遺物の出土はなかった。



第28図 第81号住居址遺構平面図

## 2. 土 坑

### (1) 土坑と遺物

#### 第331号土坑（第30図、第37図）

E H-86から出土している。直径約1mの平面隅丸方形で深さは約40cmであった。覆土は黄色小粒を含む暗褐色系の土であった。この土坑の下層からは礫と共に土器片が出土した。

#### 遺 物（第45図1～12、第51図3）

この土坑からは縄文時代中期初頭の土器片が出土している。1は口縁部上部部に縄文を施文し、半截竹管状工具を使用しての半肉隆線の上に刺突文を施文している。その下部には縦位の平行沈線が施文されている。外面にはススが付着している。2は体部中部の破片である。平行沈線によって「Y」字状に区画された中に縄文を充填している。なお、下部破断面にススの付着がみられる。3は外面の下部に沈線が引かれている。内面にススの付着がみられる。4・6は縄文の施文された土器である。5は上部に沈線が見られる。7～10は同じ系統の土器と考えられる。口唇部が外に屈曲し、その下部に幅の広い押し文が2条丁寧に施文されている。口縁は振幅の大きな波状口縁と推定され、波頂部下部では押し文が環状のモチーフを描いている。

11は器壁を厚くした上に、ヘラ状工具によって交互に刻みを加えている。12は底部の破片である。通常の土器と比較して薄手な作りである。斜位に引かれた2本の平行沈線の間を、ヘラ状工具によって交互に刺突している。この施文方法は11と近似しており、同系統の土器の可能性もある。また、5・7～12の土器の色調は淡褐色で、砂粒を含まない、きめの細かい胎土であるが、焼成はあまい。

第51図3は打製石斧である。撥型を呈している。

#### 第334号土坑（第30図、第37図）

E B-82付近から出土している。直径約1mの平面円形であり、深さは約35cmであった。覆土は黄色小粒の混入した、暗褐色系の土であった。この土坑の底部付近からは少量の礫と土器片が出土した。

#### 遺 物（第45図17～21）

17・18は平行沈線を密に施文した土器である。口縁は振幅の大きな波状口縁を呈し、波頂部からは数条の平行沈線を垂下させている。体部の平行沈線が弧状に引かれていることから、レンズ状文が施文されていると考えられる。19・20は縄文が施文された土器片である。21は有孔土器の破片と考えられる。なお、17・18の外面にはススの付着が観察される。

#### 第335号土坑（第31図、第37図）

D X-80から出土している。長径約1.1m、短径約1mの平面楕円形を呈し、深さは約20cmを測る。覆土は黄色味を帯びた暗褐色系の土であり、底部付近から同一個体と考えられる土器片や、石器が出土した。

#### 遺 物（第45図22～27、第49図16、第51図5～7）

22は破片下部に斜位の隆帯を貼付したのち、あらい平行沈線を引いた土器である。23～27は縄文を施文した土器である。24と25は口縁部の破片である。口縁部上部にはヘラ状工具によるキザミが施されている。施文状況から考えて同一個体と考えられる。23の破片上部には縦位の平行沈線が施文されている。26・27は同一個体である。口縁部に2条の押し文を引き、その下部に結節縄文が施文され、底部にいたっている。なお、24～

27の外面にはススが附着している。

第49図16は黒曜石の剥片である。一部に小剥離痕がみられる。

第51図5と6は打製石斧である。5は短冊形であり6は撥形である。また、覆土中から磨石（7）も出土している。表面と背面の一部にスリの痕跡を留め、下部と、縁辺部および背面に打撃痕がみられる。

#### 第338号土坑（第31図、第37図）

D V-79から出土している。直径約80cmの平面円形で、深さ約20cmを測る。この土坑の断面形態は碗形を呈している。覆土は暗褐色系の土で占められ、上層では黄色小粒の混入も見られた。底部では、偏平な礫が西部に出土し、東壁際で土器片が1点出土した。

#### 遺物（第48図17・18）

17は、数条1単位のクシ歯状工具を使用して、口縁部から体部に縦位の条線を施文している。なお、体部外面の破片中央部付近を中心に、ススの附着がみられる。18は、破片上部に幅の狭い板状の工具によって横位のナデ状の調整を行い、下部はクシ状工具による縦位もしくは斜位の条痕文が施文されている。胎土には砂粒の混入もなく、堅緻な土器である。なお、外面の条痕文の施文部分にはススが附着している。

#### 第341号土坑（第31図、第37図）

D J-86から出土した。直径約1.3mの平面円形で、深さ約30cmを測る。覆土上層および西壁外に焼土が検出されており、暗褐色系の覆土も全体的に炭や焼土粒の混入が見られた。

#### 遺物（第48図19～27、第50図1・2）

19は土坑底部付近で出土した土器片である。数条1単位の幅のある工具によって、横位に条痕文を施文している。同様な工具による施文は20・22～24に見られる。21・23・27は横位ではなく綾杉状の施文となっている。22はヘラ状工具による横位の条線が引かれ、25には浅い縦位の条痕文が見られる。なお、22・26の外面および20・21・25・27の内外面、23の内面の一部にススの附着が見られる。

第50図1・2は黒曜石の石核と考えられる。

#### 第344号土坑（第32図、第38図）

D V-81付近から出土した。直径約0.8mの平面円形で、深さは約20cmであった。この土坑の上層には礫が集中して出土し、礫の間からは土器片が出土している。覆土は黄色小粒や、黄色土の混入した暗褐色系の土であった。

#### 遺物（第46図3）

この土坑からは1点の図化可能な遺物が出土している。半截竹管状工具を使用しての平行沈線文を、縦位の後斜位に施文している。

#### 第345号土坑（第38図）

E L-72から出土した。長径1.7m、短径5.4mの平面長方形で、深さは約50cmであった。土坑中央部には、直径約30cm、深さ約10cmのビットが検出されている。出土形態から落とし穴と考えられ、神谷所遺跡での一連の調査中、最も低位での出土例となった。なお、遺物は出土していない。

**第346号土坑（第32図、第38図）**

E H-80から出土している。直径約1.2mの平面円形で、深さは約16～10cmを測る。この土坑は南東部が浅く、土層観察では、斜面上部から下部に流れ込んだ土砂の堆積であることが観察できる。この土坑の底部付近からは土器片が出土している。

**遺 物（第46図4）**

この土器が唯一出土している。体部下半部の破片であり、無文である。

**第354号土坑（第32図、第39図）**

D V-83から出土している。直径約1.1mの平面円形で、深さは約20cmを測る。覆土は暗褐色系で、下層では若干黄色味を帯びていた。この土坑の底部付近からは小片が数点出土した。

**遺 物（第49図1～8・17）**

この土坑からは胎土に繊維の混入が見られる土器が出土した。1・2・5は口縁部の破片である。1の破片上部には接合痕がみられる。4・7の外面にはナデによる縦位の調整痕が残されている。

17は黒曜石である。石蕨の未製品の可能性がある。

**第360号土坑（第32図、第39図）**

E C-90から出土している。直径約90cm、深さ約10cmの平面隅丸方形と考えられるが、第31号集石・第10号堅穴建物址およびピット等と重複しているため、プランは明確にできない。

**遺 物（第46図7・8）**

2点出土している。いずれも浅鉢の破片である。7は口縁部である。波状を呈し、内面には押引文、外面には縦位の沈線が施文されている。8は体部の破片である。外面にはやはり縦位の沈線が施されている。この2点に接合関係はないものの、同一個体の可能性がある。

**第361号土坑（第33図、第39図）**

E B-93から出土した。長径約1.5m、短径約1.2mの平面楕円形のプランであり、深さは約30cmを測る。この土坑の覆土は上層に黒褐色土がのり、その下層に黄色土の混入した暗褐色系の土が堆積している。底部付近からは、平安時代の遺物が出土し、第75号住居址出土破片と接合している。出土位置から考えて、第73号住居址に伴う土坑の可能性が高い。

**遺 物（第24図21、第50図3）**

第24図21が、土坑底部付近から出土している。また、この土器の他にも図化していないが、土師器小型瓶の破片も出土している。

**第365号土坑（第33図、第40図）**

D R-95から出土している。直径約1m、深さ約25cmの平面不整形円形である。この土坑は南部を掘りすぎた。覆土中層に黒褐色系の土をはさんで、上下には黄色土や小粒の混入した暗褐色系の土が堆積している。この土坑の南東壁には礫や土器片が出土した。

**遺 物（第46図9・10、第51図8）**

第46図9には、半截竹管状工具による横位の押引文が、押引隆帯下部に施文されている。

第51図8は凹石である。下半部が欠損しているが、礫の中央部に窪みが見られる。なお、縁辺にススの付着がみられる。

#### 第369号土坑（第33図、第40図）

D X-96から出土した。直径約1.2m、深さ約60cmの平面不整形である。この土坑の上層には第25号集石が存在し、集石の調査後に土坑の存在を確認した。覆土内からは多量の礫が出土し、下層からも小礫が出土した。またこれらの礫に混じって、土器片も出土している。

#### 遺物（第46図11～34、第50図4～7、第52図1）

この土坑からは縄文を地紋にもつ土器が多く出土している。中でも器壁が薄く、貼り付けた粘土紐より細めの半載竹管状工具による押し文を施文した土器（第46図12～14）や内面に縄文を施文（15・16）した土器片は外來系の可能性が高い。なお、これらの土器片のうち、15以外は内面（12～14）、口縁部（16）、破片上部外面（12）にススが付着している。

そのほか、19は幅の広い隆帯を貼り付し、その脇に細めの隆帯を貼り付けて押し文を施文している。焼成がうまく、文様の残りがよくない。21は薄い隆帯を貼り付け、その上をヘラ状工具によって縦位の細いキザミを施している。

24は縄文を地紋とした体部の破片で、上部に半載竹管状工具によって隆帯をなぞり、貼り付けている。内面には粗雑な横位のミガキ調整がみられる。

34は下半部である。半載竹管状工具による縦位の平行沈線文を施した後に、横位の直線または山形に結節文を施文している。外面にはススが付着している。

その他、外面にススの付着が認められるもの（17・23・28・29・31）や両面に付着しているもの（26）内面に見られるもの（30）がある。

また、11は平行沈線文を器面に充填している。

なお、28・29と、31～33はそれぞれ同一個体である。

第50図4・6・7は黒曜石の石核である。5は石鏃の欠損品で、脚部が欠けている。

第52図1は磨石である。大きな亀裂が入っている。表面はあらく、スリ痕を明確にできないが、表面、背面、側面に打撃痕が確認できる。また、上・下部には塊打状の使用痕が残されている。

#### 第373号土坑（第34図、第41図）

E E-90から出土した。直径約1.2m、深さ約35cmの平面不整形である。覆土上層には焼土が多く混入し、下層では黄色土粒が多く混入していた。なお、土坑底部付近からは礫と土器片が出土した。

#### 遺物（第47図1～8）

1は土坑底部付近から出土した土器片である。口縁部は波頂部が欠損しているものの、口唇部を若干内側に折り返して、波状口縁としている。破片の中央部で2本の横位の沈線による文様帯の区画を行い、その文様帯内を横位のあらい羽状沈線文で充填している。内面および外面の無文部にはミガキ調整が施されている。また、3・5も同様な文様構成と考えられ、外・内面共にミガキ調整を行っている。

8は縄文を斜位の短い単位で施した後に、ヘラ状工具による縦位の浅い沈線文が引かれている。沈線文は直線のほか、波状を呈する施文もみられる。なお、外面上部にはススが付着している。

6・7は土製円盤である。いずれも1/2個体である。

## 第374号土坑（第34図、第41図）

D V-96から出土した。長径4.2m、短径3.8m、深さ約25cmの平面不整形である。覆土はや黄色味を帯びた暗褐色系の土が中心であった。この土坑の中層付近から石器が出土している。

## 遺 物（第47図9・10）

この土坑からは土器が2点図化できた。9は浅鉢の破片である。内面に押引文が4段施文されている。10も浅鉢と考えられる。内外面とも無文である。

## 第375号土坑（第34図、第41図）

D U-96から出土した。長径約1.6m、短径約1.3m、深さ約20cmの平面楕円形を呈する。断面形態は皿状で、覆土は黒褐色系の土が主体をしめていた。また、土坑南部には礫が集中して出土していた。

## 第381号土坑（第34図、第41図）

D X-92から出土した。直径約3m、深さ約25cmの平面円形の土坑である。覆土上層では焼土や炭が混入していた。検出状況から小堅穴の可能性が高い。

## 遺 物（第47図12～17）

12～15は鉢の破片である。12は口唇部に押圧が加えられ振幅の小さい波状口縁としている。13・15は無文である。13の下部には補修孔がみられる。14は2単位の突起を4ヶ所に持つ形態と考えられる。

17は口縁部上部の破片で、波状口縁に沿って隆帯を貼り付け、その上部にキザミを施している。

## 第382号土坑（第35図、第41図）

D W-93から出土した。長径約1.9m、短径約1.8mの平面やや歪んだ円形で、深さは約10cmを測る。覆土は黄色土を混入した暗褐色系の土で、上層に礫や土器片が出土している。

## 遺 物（第47図18～21）

図化に耐えられる破片は5片であった。18・20には口縁上端部に粘土紐を貼付して装飾を行っている。20には隆帯上にキザミが施されている。21には磨消縄文が見られる。

## 第391号土坑（第35図、第42図）

D L-92から出土した。長径約1.8m、短径約1.6mの平面若干楕円形で、深さは約7cmと浅く、断面皿状を呈していた。覆土は黄色小粒が混入した黒褐色系の土であった。この土坑の上層には、土器片が2点出土している。

## 遺 物（第47図27・28）

27は覆土中からの出土である。外面および口唇部に竹管状工具による刺突文が見られる。28は出土地点を記録した土器である。半截竹管状工具による縦位の平行沈線文を施文した後、横位の平行沈線文で文様帯を区画している。なお、頸部には半截竹管状工具の背を使用しての交互刺突文や、瘤状に粘土を貼付した上にも交互刺突を行っている。なお図化していないが、出土状況図で記録されたもう1点の土器片の内面にはススが付着していた。

第393号土坑（第35図、第42図）

DW-93から出土している。長径約1.9m、短径約1.6mの不整楕円形で、深さは約30cmを測った。覆土は黄色土粒や、小粒の混入した暗褐色系の土であった。この土坑の中層から礫が出土したが、図化に耐えられるような遺物は出土しなかった。

第396号土坑（第42図）

E D-89から出土した。直径約0.9m、深さ約30cmの平面不整円形である。覆土は黄色土や黄色土粒の混入した暗褐色系の土であった。

遺物（第49図9～12）

9は口縁部の破片である。竹管状工具で、沈線を引いている。10～12の外面には条痕文がみられ、10の内面にも施されている。

第402号土坑（第35図、第43図）

D P-87から出土した。この土坑東部には第25号堅穴建物址が重複しており、約1/2程度破壊されている。規模は残存している部分で長さ約2m、深さ約10cmを測る。なお、土坑底部北東隅から、土器が口縁部を伏せた状態で1個体出土した。

遺物（第29図、第48図1）

2点図化できた。第48図1は縄文を施文した土器片である。第29図は土坑底部から出土した土器で、一部欠損しているが、ほぼ完形に復元できた。器面全体に縄文を地紋として持ち、体部には「Y」字状の平行沈線を半截竹管状工具によって施文し、口縁部付近においては平行沈線で横位に引かれた区画の中を、菱形や渦巻き状の文様で充填している。口縁部上端部には1ヶ所突起が作り付けられている。

第404号土坑（第35図、第43図）

D R-90から出土した。長径約1.9m、短径約1.7mの平面楕円形で、深さ約28cmを測る。覆土中には、焼土や炭が混入していた。土坑の中層から上層にかけて土器片が出土している。

遺物（第48図6～9）

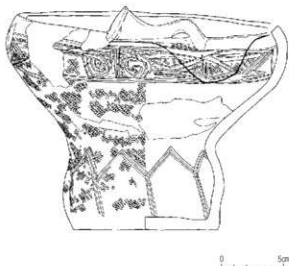
この土坑から出土し、図化できた破片はいずれも無文であった。

第408号土坑（第36図、第43図）

E A-92から出土した。長径約3.3mを測る第79号住居址と重複して出土した。この土坑の上層からは、礫とともに土器片が出土した。

遺物（第36図）

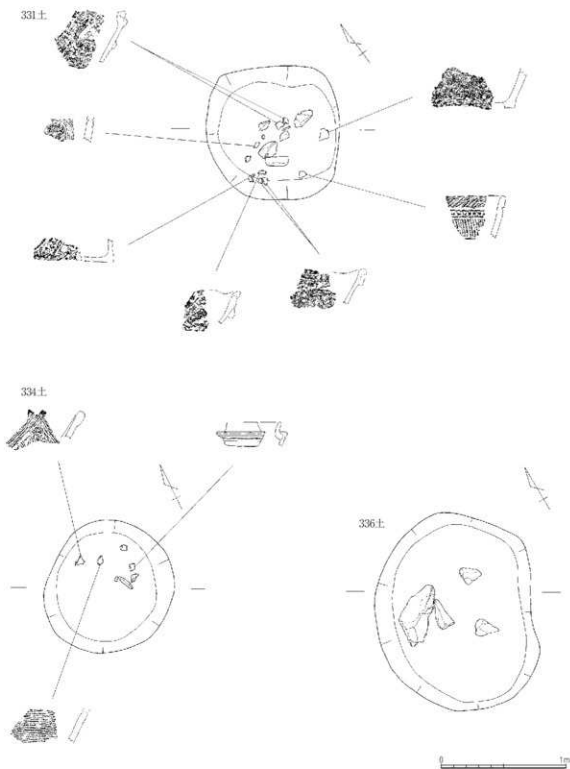
1は破片での出土である。第406号土坑から出土した土器片と接合している。口唇部に押圧による施文を行なう事によって、数単位の振幅の小さ



第29図 第402号土坑出土遺物

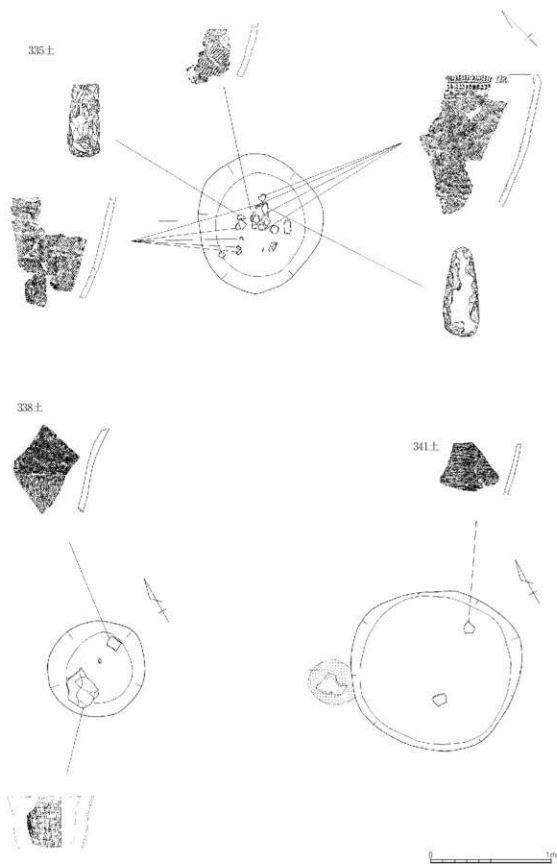
い波状口縁としている。なお、肩から口縁部にかけてススの付着がみられる。

2は口縁上部部に粘土紐を口縁部に沿って貼付し、押圧を加えている。3・4は縄文を地紋に持つ土器である。8は時代的に若干古いと考えられることから、混入品と思われる。5～7は土製円盤である。

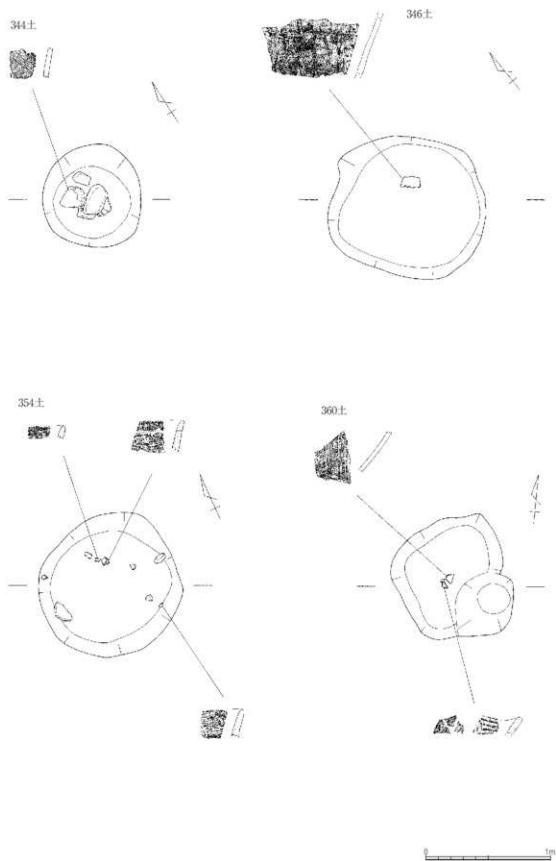


第30図 土坑遺物出土状況図(1) (331土・334土・336土)

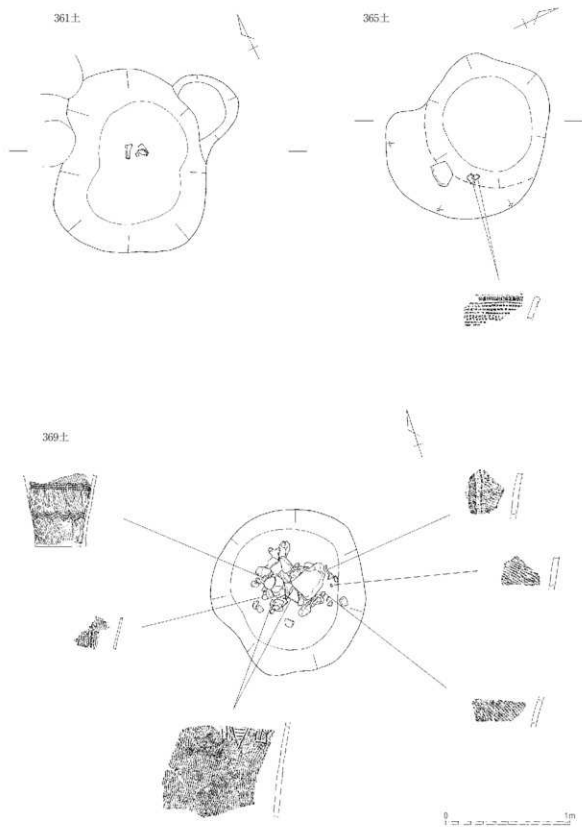




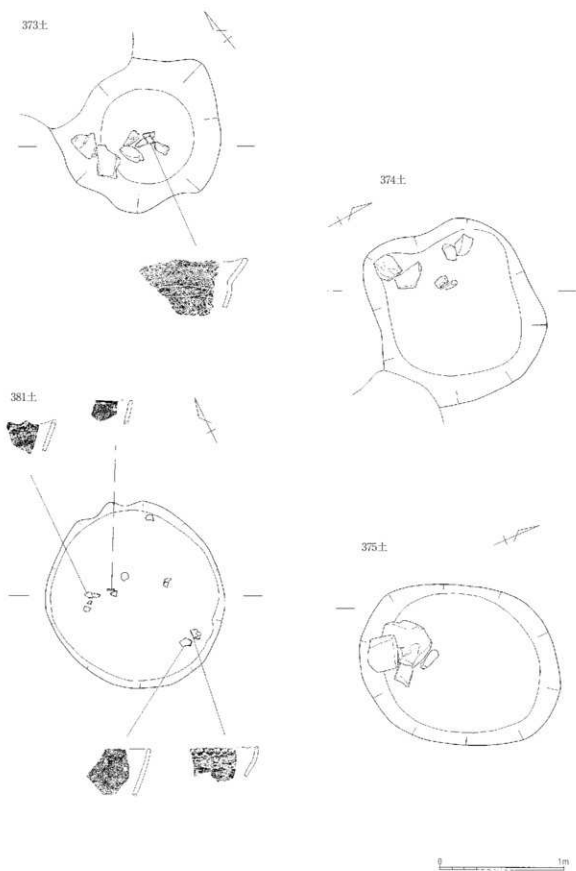
第31图 土坑遺物出土状況图(2)(335土・338土・341土)



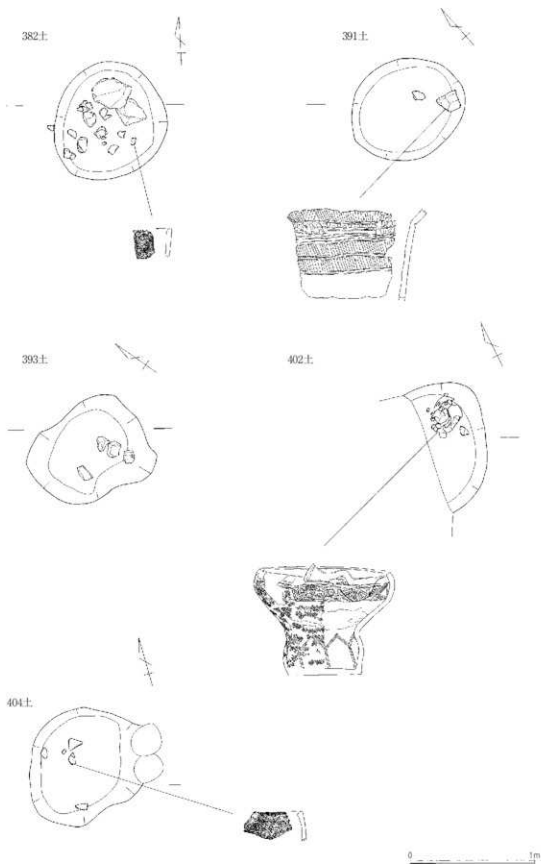
第32図 土坑遺物出土状況図(3) (344土・346土・354土・360土)



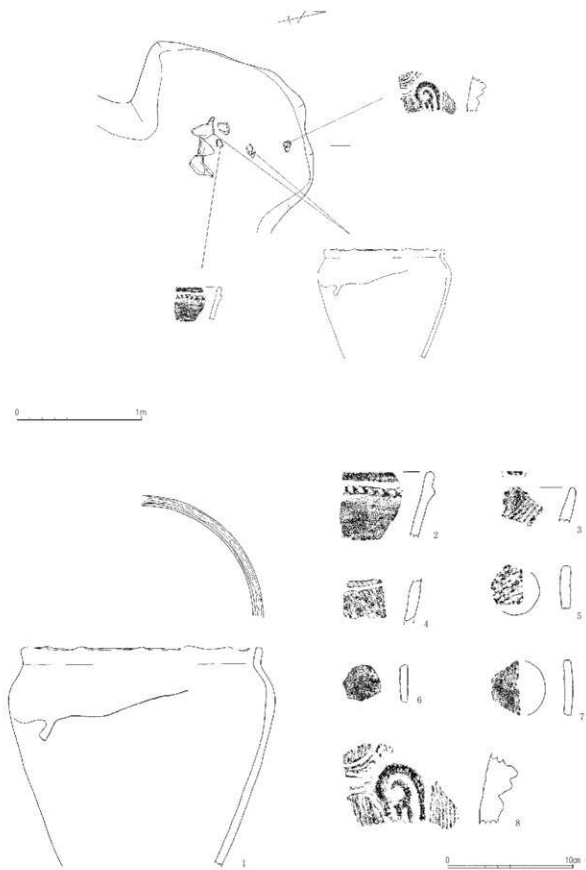
第33図 土坑遺物出土状況図(4) (361土・365土・369土)



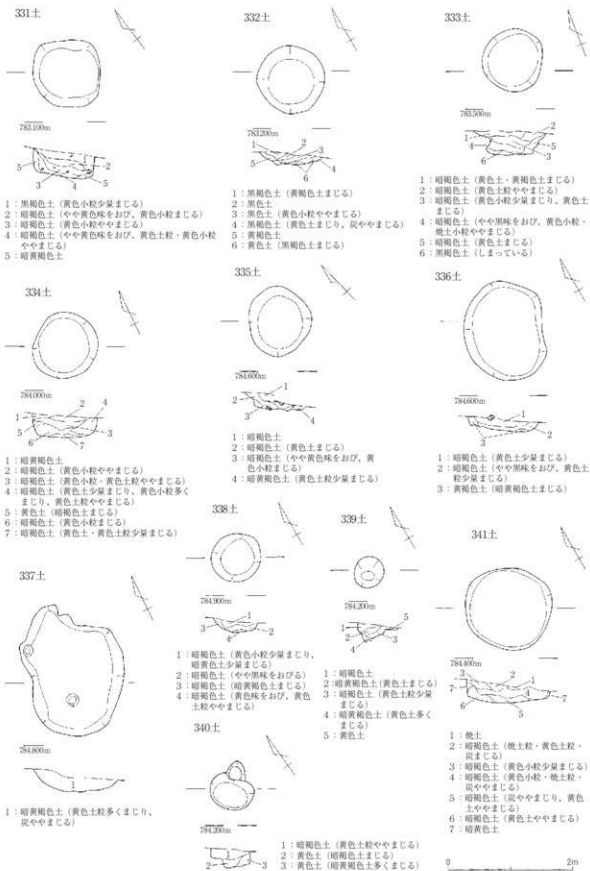
第34图 土坑遺物出土狀況圖(5)(373土・374土・375土・381土)



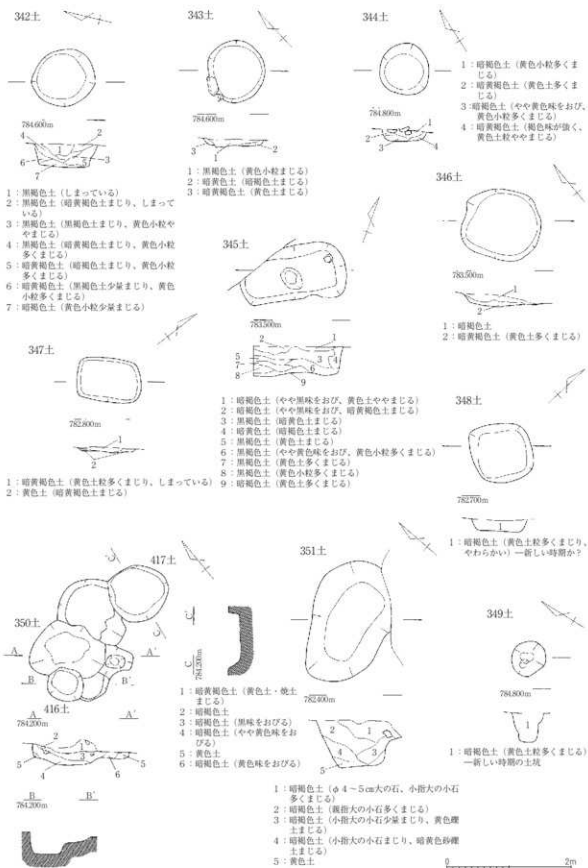
第35図 土坑遺物出土状況図(6) (382土・391土・393土・402土・404土)



第36図 第408号土坑遺物出土状況図及び出土遺物



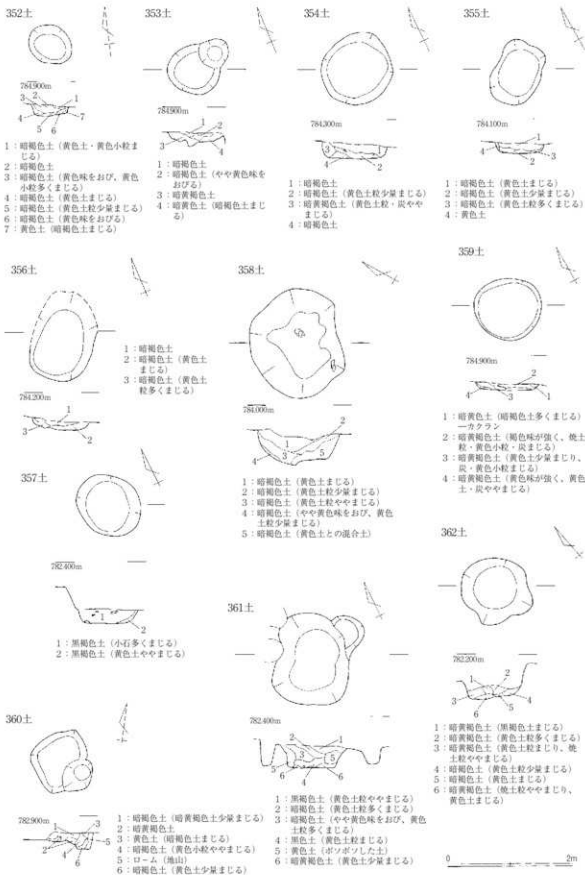
第37図 土坑遺構平面図(1) (331土~341土)



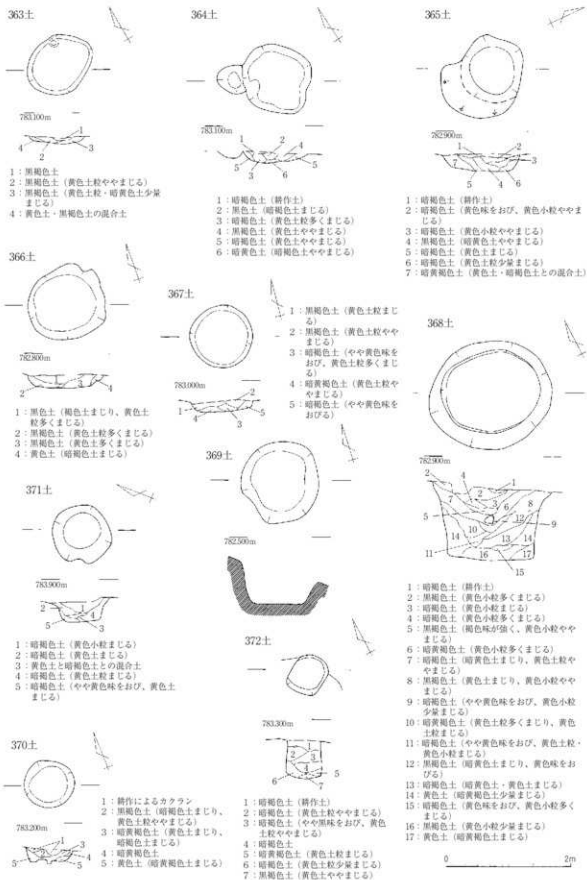
第38図 土坑遺構平面図 (2) (342土~351土・416土・417土)



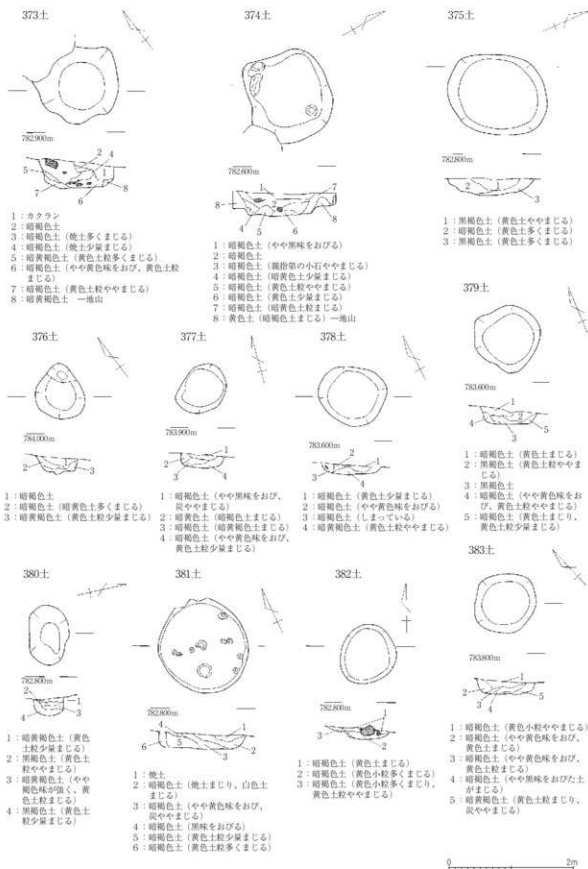
第IV章 遺構と遺物



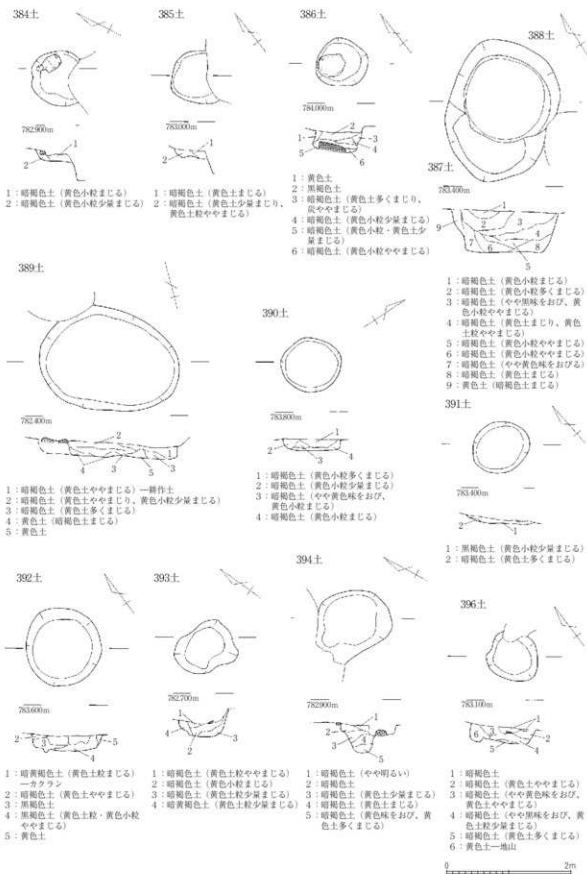
第39図 土坑遺構平面図 (3) (352土~362土)



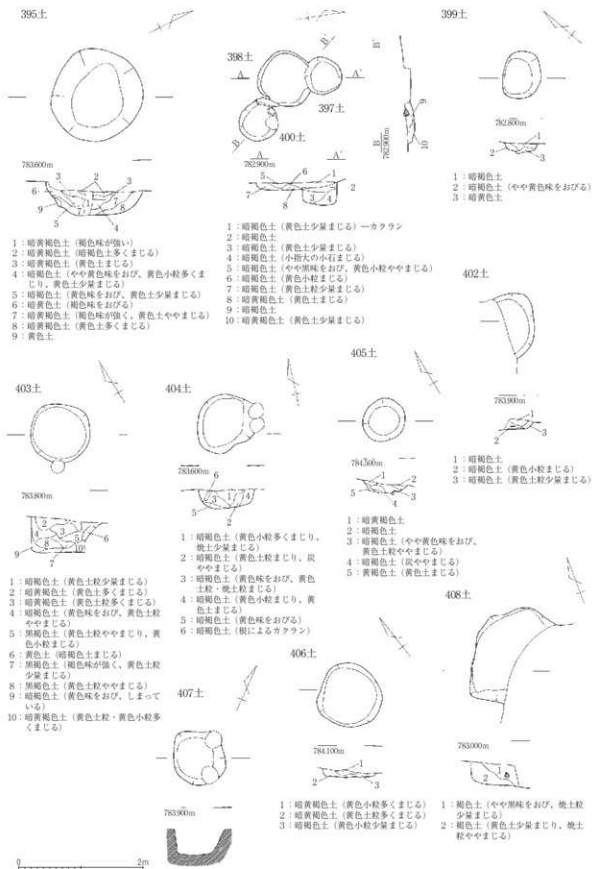
第40図 土坑遺構平面図(4) (363土~372土)



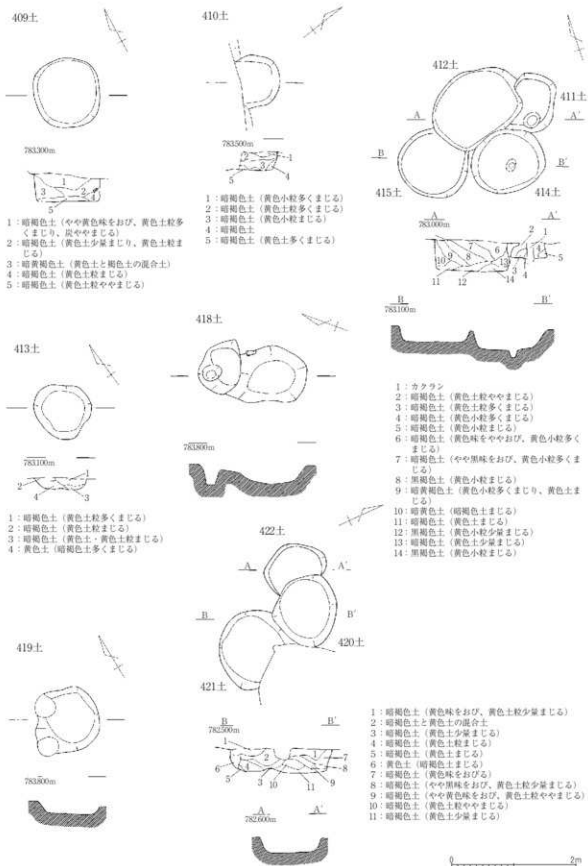
第41図 土坑遺構平面図(5) (373土~383土)



第42図 土坑遺構平面図(6) (384土~394土・396土)



第43図 土坑遺構平面図 (7) (395土・397土~400土・402土~408土)

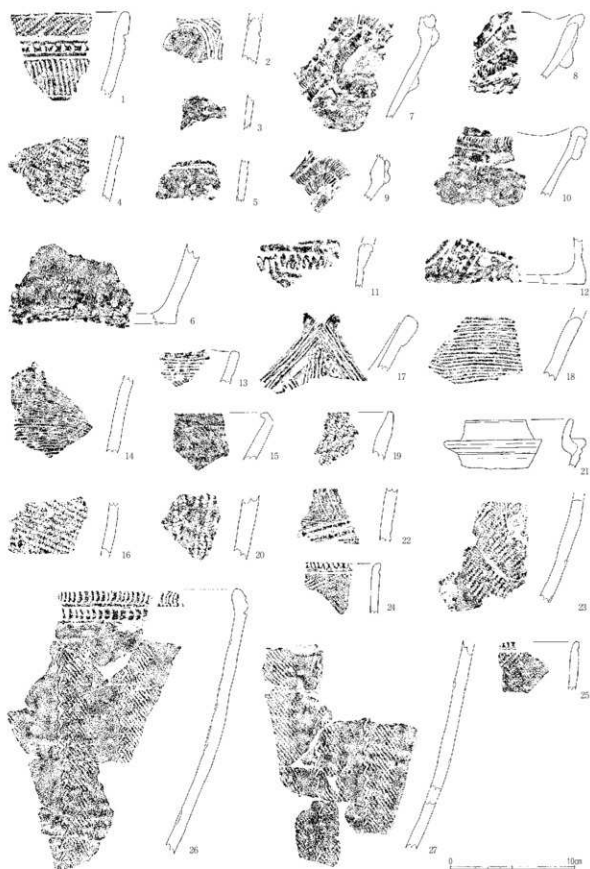


第44図 土坑遺構平面図(8) (409土~415土・418土~422土)

## 第IV章 遺構と遺物

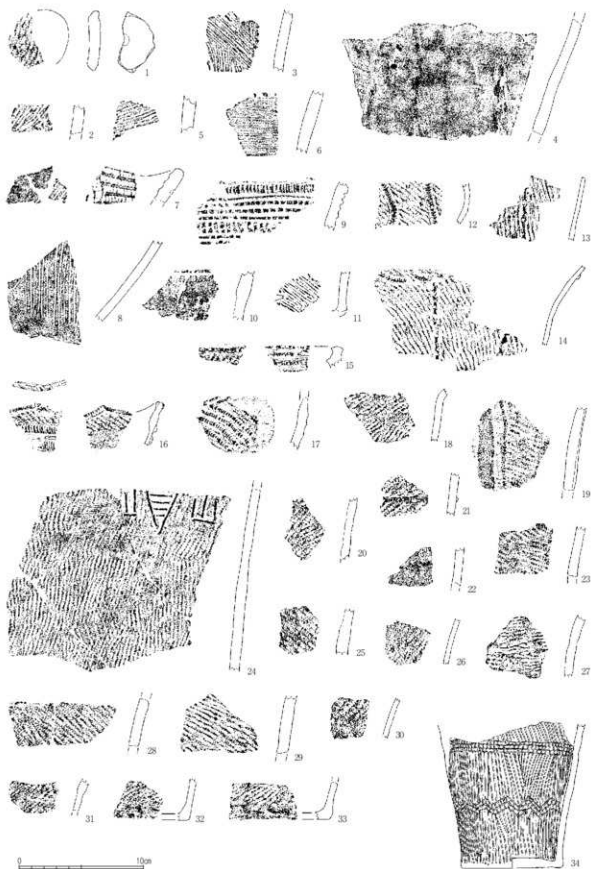
神谷所遺跡第3次調査土坑一覧表

番号	出土位置	規模			深さ	ピット		検出遺物		所見	備考
		上層 長径   短径   形状	下層 長径   短径   形状	直径		深さ	検出面	底面			
331	E1-26	1.07   1.07	0.96   0.80	0.36	-	-	-	-	-	隅方彫	
332	E1-26	1.08	0.84	0.16	-	-	-	-	-	円形	
333	E1-25	0.98	0.80	0.32	-	-	-	-	-	円形	
334	E1-25	1.03	0.85	0.31	-	-	-	-	-	円形	
335	D1-80	1.06	0.79	0.15	-	-	-	-	-	円形	
336	D1-81	1.31   1.24	1.30   1.03	0.14	-	-	-	-	-	不整楕円形	
337	D1-81	0.1	1.38   1.36	1.18   0.18	-	-	-	-	-	不整方形	
338	D1-79	0.79	0.58	-	-	-	-	-	-	円形	
339	D1-88	0.50	0.32   0.30	0.30	-	-	-	-	-	楕円形	
340	D1-88	0.70	0.56   0.37	0.30	-	-	-	-	-	円形	柱穴と重複
341	D1-86	1.39	1.21	0.22	-	-	-	-	-	円形	柱穴と重複
342	D1-25	0.95	0.76	0.32	-	-	-	-	-	円形	
343	D1-25	0.95	0.82	0.08	-	-	-	-	-	円形	
344	D1-82	0.82	0.68	0.15	-	-	-	-	-	楕円形	
345	E1-22	1.63   0.87	1.46   0.69	0.59	0.38	0.11	-	-	-	楕円形	落し穴
346	E1-20	1.20	1.02	0.12	-	-	-	-	-	円形	
347	E1-22	1.02   0.74	0.91   0.58	0.05	-	-	-	-	-	長方形	
348	E1-23	0.96   0.95	0.78   0.70	0.19	-	-	-	-	-	隅方彫	
349	E1-22	0.84	0.71	0.08	0.48	-	-	-	-	円形	
350	E1-20	1.18	0.72   0.47	0.27	-	-	-	-	-	不整円形	416土と重複
351	F1-68	2.02   1.28	1.32   0.65	0.62	-	-	-	-	-	楕円形	
352	D1-79	0.73	0.61	0.49	0.17	-	-	-	-	楕円形	楕円形
353	D1-80	0.82	0.60	0.14	-	-	-	-	-	楕円形	
354	D1-82	1.06	0.91	0.21	-	-	-	-	-	円形	
355	D1-84	1.03   0.74	0.74   0.59	0.17	-	-	-	-	-	不整楕円形	
356	E1-22	1.45   0.98	1.06   0.72	0.13	-	-	-	-	-	楕円形	
357	F1-68	1.10   0.91	0.82   0.69	0.29	-	-	-	-	-	楕円形	
358	D1-86	1.25   1.41	1.07   0.70	0.41	0.15	0.13	-	-	-	不整楕円形	
359	D1-78	1.04	0.93	0.49	-	-	-	-	-	円形	
360	E1-20	0.90	0.70	0.10	-	-	-	-	-	隅方彫	
361	E1-23	1.47   1.15	1.00   0.68	0.39	-	-	-	-	-	楕円形	31集石、柱穴と重複
362	E1-21	1.18   0.71	1.01	0.30	-	-	-	-	-	不整円形	円形
363	D1-43	1.02   0.92	0.89   0.78	0.10	-	-	-	-	-	楕円形	
364	D1-24	1.07	0.87   0.82	0.17	-	-	-	-	-	隅方彫	柱穴と重複
365	D1-25	1.00	0.73	0.21	-	-	-	-	-	円形	
366	D1-25	1.12	0.97	0.25	-	-	-	-	-	円形	
367	D1-24	1.01	0.86	0.16	-	-	-	-	-	円形	
368	D1-26	1.84	1.39	1.13	-	-	-	-	-	円形	
369	D1-26	1.27	0.91	0.50	-	-	-	-	-	円形	
370	E1-23	0.80	0.61	0.23	-	-	-	-	-	円形	
371	D1-25	0.94	0.66	0.29	-	-	-	-	-	円形	
372	D1-22	0.62	0.55	0.52	-	-	-	-	-	円形	
373	E1-20	1.17	0.76	0.41	-	-	-	-	-	不整円形	円形
374	D1-26	1.40   1.27	1.05   0.98	0.33	-	-	-	-	-	楕円形	
375	D1-26	1.64   1.29	1.31   1.12	0.20	-	-	-	-	-	楕円形	
376	D1-24	0.78	0.57   0.46	0.23	-	-	-	-	-	円形	楕円形
377	E1-23	0.86   0.68	0.61   0.58	0.30	-	-	-	-	-	楕円形	不整円形
378	E1-28	0.82	0.76	0.16	-	-	-	-	-	楕円形	
379	E1-24	1.06	0.82	0.24	-	-	-	-	-	不整円形	円形
380	D1-22	0.96   0.64	0.40   0.29	0.24	-	-	-	-	-	楕円形	
381	D1-22	1.45	1.36	0.24	-	-	-	-	-	円形	
382	D1-23	0.92	0.67	0.13	-	-	-	-	-	楕円形	
383	E1-26	1.00	0.75	0.30	-	-	-	-	-	円形	
384	E1-20	0.90	0.68	0.17	-	-	-	-	-	円形	
385	E1-29	0.86	0.70	0.16	-	-	-	-	-	円形	
386	D1-26	0.81	0.67	0.36	-	-	-	-	-	楕円形	
387	D1-20	1.60	1.03	0.31	-	-	-	-	-	円形	
388	D1-20	1.74	1.54	0.63	-	-	-	-	-	円形	
389	D1-28	2.25   1.58	2.05   1.31	0.20	-	-	-	-	-	楕円形	34集石、417土と重複
390	D1-29	0.93	0.80	0.18	-	-	-	-	-	円形	421土と重複
391	D1-22	0.87	0.73	0.48	-	-	-	-	-	円形	31集石と重複
392	D1-21	1.23	0.96	0.24	-	-	-	-	-	円形	
393	D1-21	0.93   0.71	0.66   0.52	0.34	-	-	-	-	-	不整楕円形	
394	D1-26	1.02	1.00   0.70	0.43	-	-	-	-	-	不整円形	
395	D1-29	1.48	1.04   0.79	0.29	-	-	-	-	-	楕円形	
396	E1-29	0.85	0.61	0.23	-	-	-	-	-	不整円形	
397	E1-28	0.59	0.47	0.38	-	-	-	-	-	円形	
398	E1-28	0.88	0.82	0.10	-	-	-	-	-	円形	柱穴と重複
399	E1-28	0.75	0.61   0.44	0.16	-	-	-	-	-	楕円形	398土と重複
400	E1-20	0.63	0.56   0.43	0.13	-	-	-	-	-	円形	楕円形
401	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	不審
402	D1-27	1.10	0.85	0.12	-	-	-	-	-	円形	
403	D1-29	0.98	0.84	0.48	-	-	-	-	-	円形	
404	D1-29	0.97   0.84	0.87   0.63	0.28	-	-	-	-	-	不整楕円形	
405	D1-20	0.68	0.48	0.15	-	-	-	-	-	円形	
406	D1-24	1.02	0.91	0.11	-	-	-	-	-	円形	
407	D1-27	0.82	0.63	0.28	-	-	-	-	-	不整円形	
408	E1-22	1.63	1.41	0.28	-	-	-	-	-	不整円形	
409	D1-28	1.12	0.98	0.34	-	-	-	-	-	楕円形	
410	D1-22	0.76	0.67	0.24	-	-	-	-	-	楕円形	
411	D1-29	0.97	0.75	0.24	-	-	-	-	-	楕円形	
412	D1-20	1.42	1.12	0.46	-	-	-	-	-	不整楕円形	
413	D1-29	0.90	0.66	0.15	-	-	-	-	-	不整円形	
414	D1-20	1.10	0.92	0.19	-	-	-	-	-	円形	
415	D1-29	0.90	0.90	0.29	-	-	-	-	-	楕円形	底部にピットあり
416	E1-20	0.56	0.41   0.35	0.32	-	-	-	-	-	円形	楕円形
417	E1-21	0.93	0.85   0.75	0.20	-	-	-	-	-	円形	不整円形
418	D1-27	0.88	0.80   0.54	0.22	-	-	-	-	-	楕円形	
419	D1-27	1.01	0.77	0.13	-	-	-	-	-	円形	不整円形
420	D1-27	1.10	0.96   0.80	0.25	-	-	-	-	-	楕円形	
421	D1-27	1.41	1.02	0.18	-	-	-	-	-	円形	
422	D1-27	1.01	0.86	0.14	-	-	-	-	-	円形	

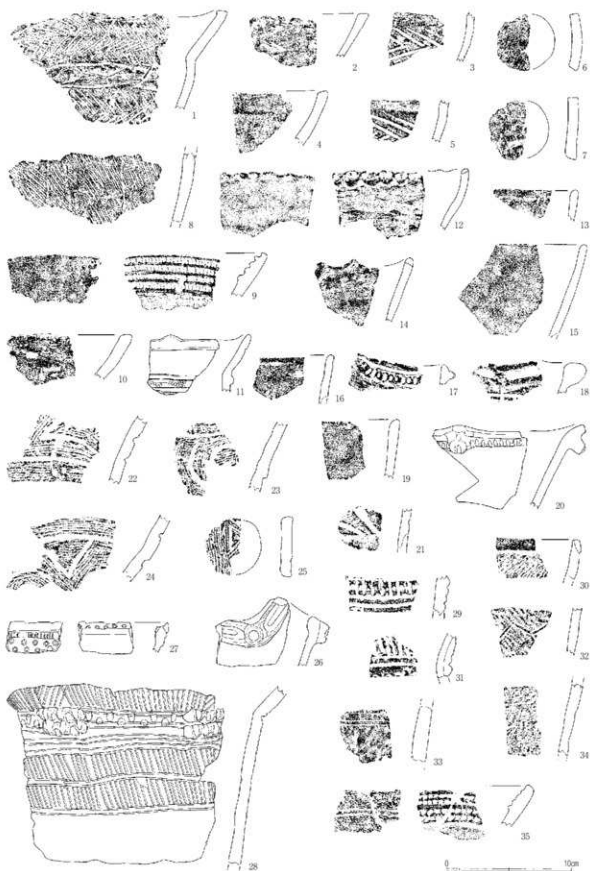


第45图 土坑出土遗物(1) (1~12: 331土, 13~16: 333土, 17~21: 334土, 22~27: 335土)





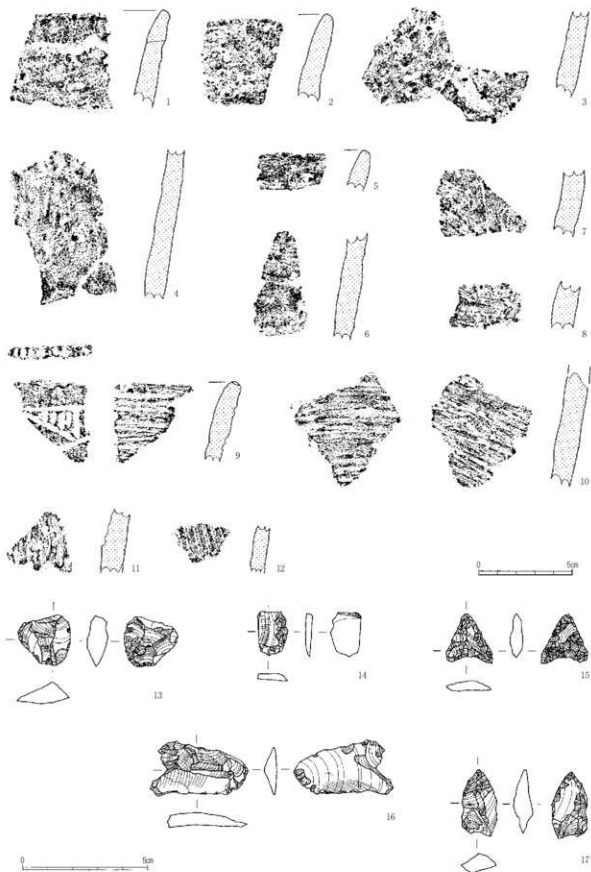
第46圖 土坑出土遺物(2) (1・2:342土, 3:344土, 4:346土, 5・6:350土, 7・8:360土, 9・10:365土, 11~34:369土)



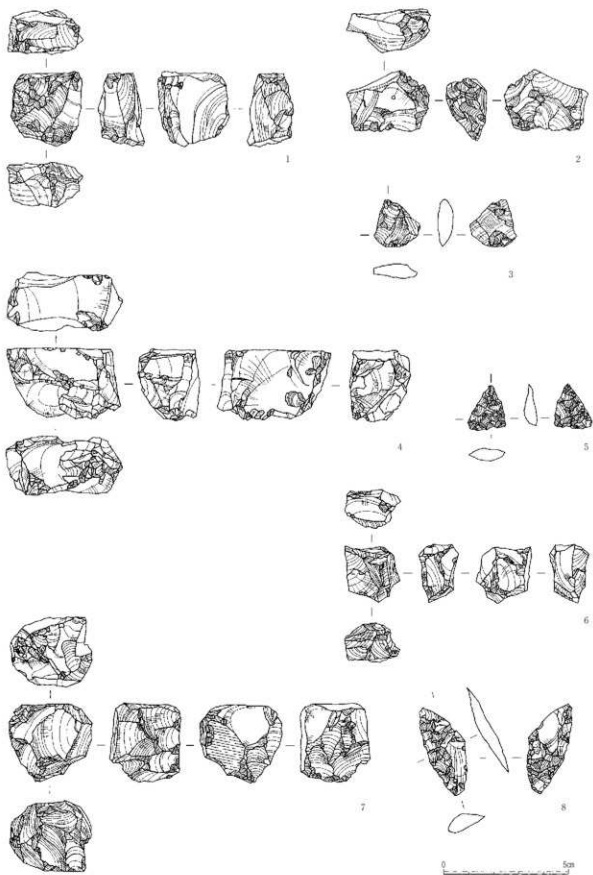
第47图 土坑出土遗物(3) (1~8:373土, 9~10:374土, 11:376土, 12~17:381土, 18~21:382土, 22~25:384土, 26:386土, 27~28:391土, 29~35:396土)



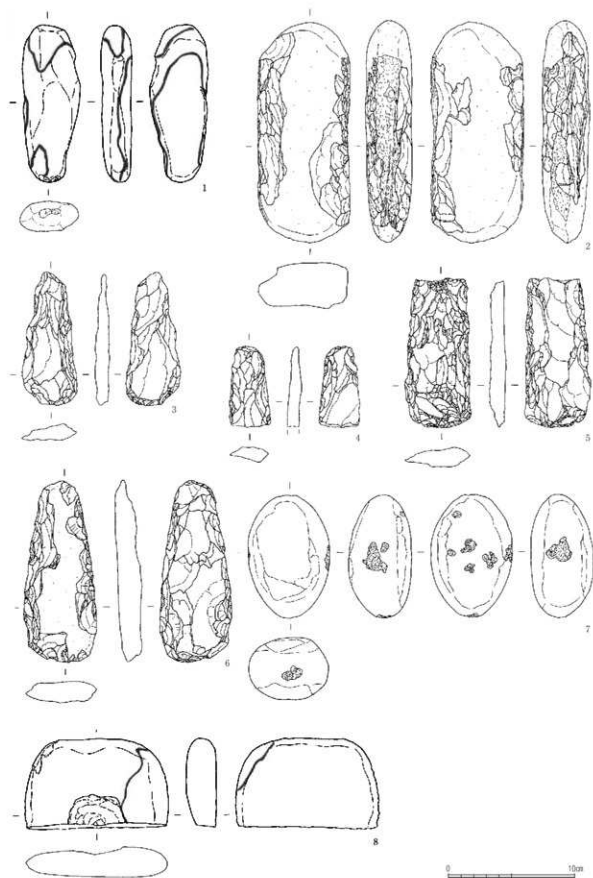
第48図 土坑出土遺物(4) (1: 402土、2・5: 403土、6~9: 404土、10~14: 407土、15・16: 415土、17・18: 338土、19~27: 341土)



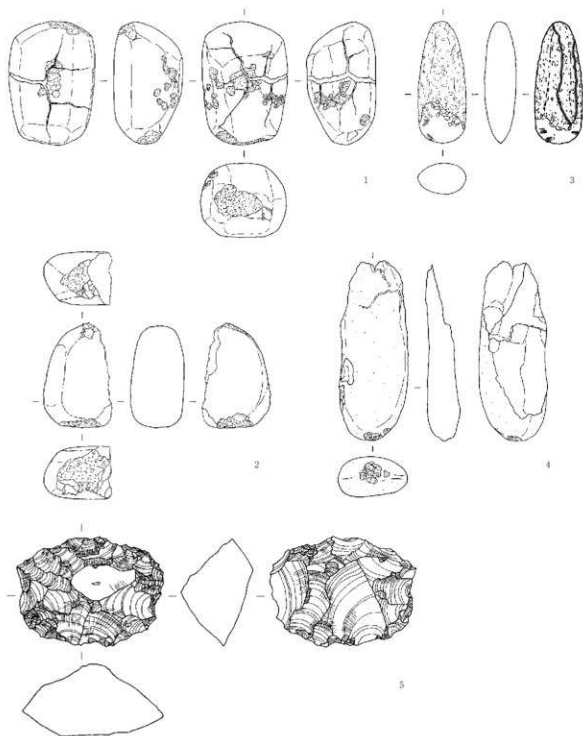
第49图 土坑出土遗物(5) (1-8:354土, 9-12:396土, 13-14:333土, 15:358土, 16:335土, 17:354土)



第50図 土坑出土遺物(6) (1・2:341土, 3:361土, 4~7:369土, 8:394土)



第51图 土坑出土遗物(7)(1·2:420土, 3:331土, 4:333土, 5-7:335土, 8:365土)



第52図 土坑出土遺物(8) (1・2 : 369土、3 : 387土、4 : 396土、5 : 339土) (5 : S = 2/3)

### 3. 集 石

#### 第23号集石 (第54図)

E D-73から出土している。1.5m×1.1mの楕円の範囲に小礫が集中して検出された。この集石は同規模の土坑を掘り、約40cmの深さにまで礫が密集して入れ込まれていた。なお、覆土は黒褐色土であった。

#### 第24号集石 (第54図)

E P-74から第23号集石と並ぶようにして出土した。覆土は黒褐色土で、遺構の規模も平面プランも第23号集石と同様で、最深で約40cmまで礫が密集して入れ込まれていた。このことから、この2遺構は関連がある可能性が高い。

#### 第25号集石 (第54図)

この集石は、第369号土坑と隣接してD X-97から出土している。直径2.5mの平面不整形な円形の範囲に、約20cmの深さで礫が集中しているが、断面観察では礫の集中は表面的であり、土坑内にはあまり入れ込まれていなかった。覆土は暗褐色系の土であった。

#### 遺 物 (第53図1)

1は覆土中から出土した。二等辺三角形の形態であるが、石錐の先端部と脚部が欠損している。

#### 第26号集石 (第54図)

E S-78から出土した。この集石の東には第27号集石が隣接して検出されている。当初は直径約0.7mの平面円形であったと考えられるが、南部は1段低く、礫も検出できなかったことから、南部は耕作によるカクランで破壊されている可能性がある。

#### 第27号集石 (第54図)

第26号集石の西部から出土した。長径約1.5m、短径約1mの楕円形に礫が分布し、深さは約20cmであった。礫は第26号集石と同様に、あまり厚く積み上げていない。第23・24号集石と比較して、礫の厚みが異なるものの、規模や平面形態が近似していることから、第26号集石も含めて、同時期の遺構の可能性が高い。

#### 第28号集石 (第55図)

D M-91から出土した。直径約1.5mの平面円形に礫が密接に検出されたが、厚みはなく、遺構検出面に平面的に石が集められていた。また、下部に掘り込みは確認できなかった。

#### 第29号集石 (第55図)

E F-81から出土した。この集石は、直径1.3mほどの穴を掘り、その土坑に50cm程度の扁平な石を敷きつめた中に拳大の礫を入れ込んでいる。敷かれた礫は底部を先に設置し、その後壁面に載せて組まれていた。入れ込まれた礫はあまり密度は濃くなかった。このような形態から、集石塚と考えられる。



第30号集石（第55図）

E J-85から出土した。直径約2mの範囲に、円形に拳大の礫がまとまっていた。これらの礫は、直径約2m、深さ約1mの断面すり鉢状に掘り込まれた土坑の底面に、約20~30cm大の扁平な石を敷き、礫を遺構検出面まで大量に入れていた。

また掘り込みの壁上部には、被熱による赤色化した地点も検出されたことから、集石炉と考えられる。

第31号集石（第56図）

E C-89付近から出土した。第360号土坑やピットと重複し、掘り込まれた結果、礫が抜き去られて破壊されている部分があった。この集石は本来直径約2.5mの円形のプランであったと推察され、下部に石の範囲より広い規模で、深さ約20cmの不整形な掘り込みが検出されている。覆土はあれており、比較的新しい時期に掘り込んだ後、礫と共に埋め戻している可能性もある。また、炭の混入も確認された。このような状況から、集石炉の可能性も捨てきれない。

第32号集石（第56図）

D U-92から出土した。第33号集石と並んで出土した。約30cmほどの大きめの石が、長辺1m、短辺0.5mにまとまって出土したような状況であった。下部に、付随する土坑等が検出されなかった。

遺物（第53図2）

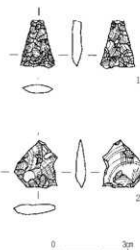
第32号集石と第33号集石付近で出土した。剥片石器である。

第33号集石（第56図）

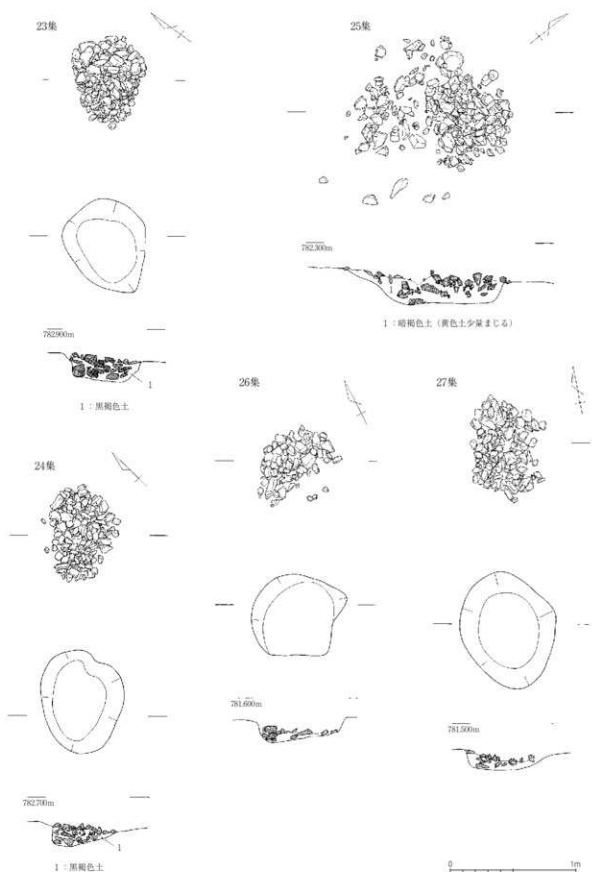
D U-93から出土した。第32号集石と隣接して出土した。直径約1mの円形に検出されており、第32号集石同様下部に掘り込みは検出されなかった。

第34号集石（第56図）

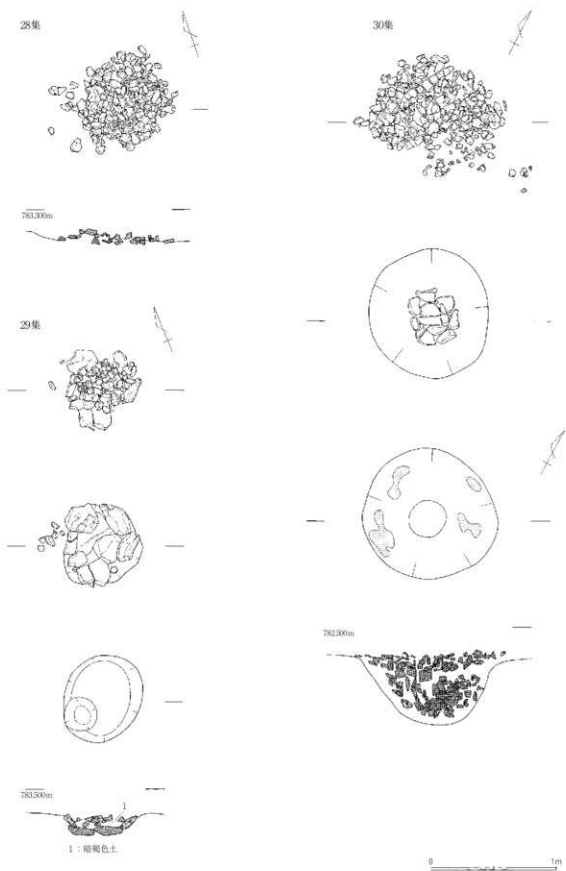
D U-91に第33号集石と隣接して出土した。直径約1mの平面円形の範囲に礫が集中しており、下部には長径約2.5m、短径約2m、深さ約80cmの平面楕円形で、断面すり鉢状を呈する土坑が掘り込まれ、その中に礫が多量に入れ込まれていた。なお、底部に礫を敷いた痕跡はなかった。



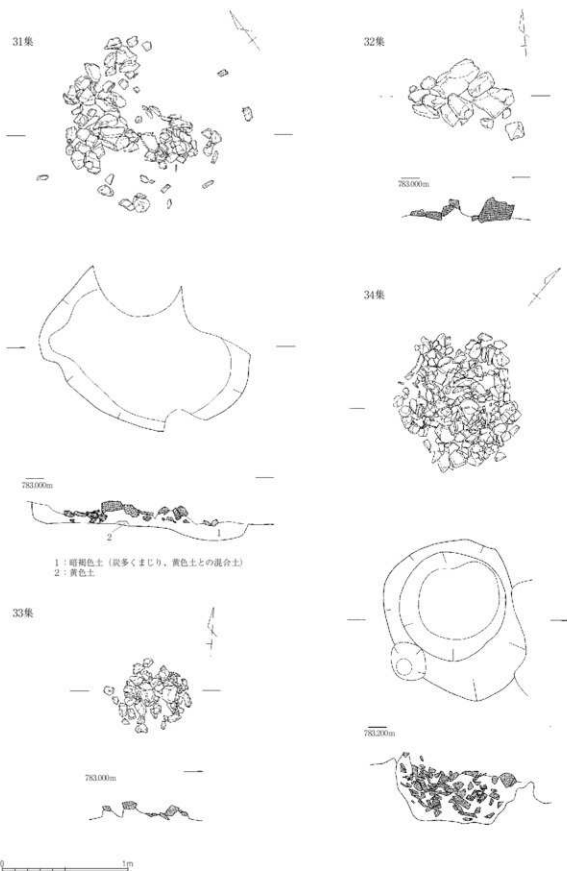
第53図 集石出土遺物



第54図 集石遺構平面図(1)



第55図 集石遺構平面図(2)



第56図 集石遺構平面図(3)

## 4. 溝 址

### 第12号溝址 (第57図)

遺構のほとんど検出されていないF N - 70付近から出土している。長さ約9m、幅は約0.6~1mであった。深さは標高の高い地点で約10cm、低い地点で約30cmであり、底部での比高差は約80cmであった。

### 第13号溝址 (第57図)

D I - 89付近から出土している。長さ約7.5m、幅約0.7~1.6mを測る。深さは標高の高い地点で約12cm、低い地点で約5cmを測り、底部の比高差は約22cmであった。なお、溝址上部には第9号竪穴建物址が重複し、その下方では礫が集中して出土した。

## 5. 竪穴建物址

### 第4号竪穴建物址 (第58図、第59図)

D R - 88から第7号竪穴建物址と重複して出土している。長軸約2m、短軸約1.3mを測る平面長方形のプランである。深さは約50cmを測り、覆土は暗褐色系の土であったが、上層には黄色土粒が、下層には黄色土が多く混入していた。

#### 遺 物 (第64図1)

この竪穴建物址からは白磁V類の口縁部破片が出土している。

### 第5号竪穴建物址 (第58図、第59図)

D O - 89から出土している。長軸2.2m、短軸1.6mで、深さ約45cmであった。覆土は上層では暗褐色系の土で占められ、上層から中層に堆積した黒色系の土を挟んで、黄色土粒を多く混入した土が堆積していた。

#### 遺 物 (第64図2・5)

2は灰釉の香炉の破片である。2次焼成を受けており、釉薬が再溶融し、ススが付着している。5は釘である。先端部が欠損し、頭部が折れ曲がって出土した。

### 第6号竪穴建物址 (第58図、第59図)

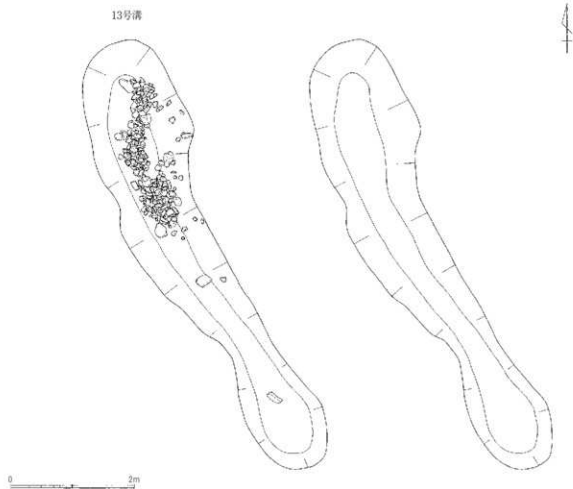
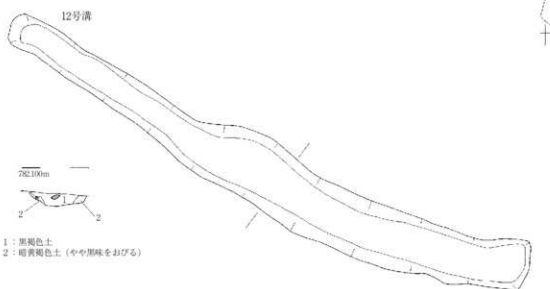
D T - 87に、第14号竪穴建物址と重複して出土した。一辺約1.2mの平面方形で深さは30cmを測る。底面からは礫が出土しているが自然流入の可能性もある。覆土は黄色小粒の混入した暗褐色系の土が主体であった。

### 第7号竪穴建物址 (第58図、第59図)

D Q - 89から出土した。一辺約1.2mの平面方形で、深さ約30cmを測る。覆土は暗褐色系の土で、黄色土粒が多く混入していた。なお、上層からは扁平な礫が出土した。

#### 遺 物 (第64図3・6)

3は龍泉窯系の青磁碗の口縁部破片である。外面に鎮連弁文がみられる。6は釘である。頭部の一部が欠損していた。



第57図 溝址遺構平面図

**第8号竪穴建物址（第59図）**

D I -93から出土した。一辺約1.2mの、若干歪んだ平面方形で、深さは10cmと浅い。覆土は黒褐色系の土であった。

**第9号竪穴建物址（第60図）**

D G -90から出土した。東部に溝址が存在し、その上部部と考えて調査を行っていたため、溝との前後関係を土層観察で把握しなければならなかった。規模は短軸約2.3mの平面長方形と考えられ、深さは約20cmを測った。覆土は暗褐色系で、黄色土が多く混入していた。

**第10号竪穴建物址（第58図、第60図）**

E B -90から出土した。長軸約1.5m、短軸約1.3mの平面長方形で、深さ約60cmを測る。覆土には中層に礫を含んだ、黄色土粒や黄色小粒が混入した暗褐色系の土を中心に堆積していた。

**第11号竪穴建物址（第60図）**

D M -87から出土した。この地点は耕作のための削平が著しく、壁は約10cm程度しか残存していなかった。規模は長軸2.8m、短軸1.3mの平面長方形で、北西部に一辺50cmほどの突出部が存在する。この突出部は黒色土や、暗黄色土、黄色土の混入した、あれた土であり、黄色土粒の混入した他の部分の覆土とは様相が異なっていたため、同時期に存在していたと考えることは難しい。なお、底面の壁周囲には周溝が長方形に検出されている。なお、北西部付近には床面に被熱部も検出された。

**第12号竪穴建物址（第60図）**

D Q -90から出土した。北部の延長線上には第13号竪穴建物址が存在するが、土層観察を行うことができなかったため、前後関係を把握することができなかった。長軸約1.2m、短軸約1.1mの平面長方形で、深さは約60cmを測る。覆土中には黄色土粒が混入していた。

**遺物（第64図7・8）**

7は铸铁製の口縁部の破片である。口唇部が肥厚した形態で、鉄鍋と考えられる。8は幅約2cmの楔状の鉄である。比較的新しい時期の遺物かもしれない。

**第13号竪穴建物址（第60図）**

第12号竪穴建物址と軸をそろえて重複して出土した。長軸約1.5mと推定され、短軸は約1mを測る、平面長方形のプランと考えられる。深さは約40cmで、中層に黄色土粒が多く混入していた。底部中央部にビットが1基検出されている。覆土中に黄色土粒が混入し、中層には焼土も検出されている。

**第14号竪穴建物址（第58図、第59図）**

D T -86の、第6号竪穴建物址の西部から出土した。一辺が約1.5mの平面方形と考えられ、壁際には周溝がほぼ全周していた。深さは約40cmを測り、覆土には全体的に黄色土粒が少量混入していた。

**遺物（第64図9）**

鉄の破片が出土した。小片のため、種類は判別できないが、铸铁の可能性が高い。

**第15号竪穴建物址（第58図、第60図）**

D T-92から出土した。長軸約1.8m、短軸約1.5mの平面長方形であるが、ピットと重複しているため、若干形態が崩れていた。この竪穴建物址の底部からは上層に礫を伴う焼土が出土した。

**遺物（第64図12・20）**

20は内耳土器の破片である。全体の1/5程度残存していたが耳部は欠損していた。なお、外面には煤が付着していた。

12は刀子の刃部破片である。

**第16号竪穴建物址（第61図）**

D W-93から出土した。長軸約2m、短軸約1.8mの平面長方形で、深さ約30cmを測る。覆土上層には焼土が混入していた。

**遺物（第64図10・11）**

10は釘である。先端部が失われている。また木質部が錆着していた。11は槍鉤の破片と思われる。刃部が欠損している。

**第17号竪穴建物址（第61図）**

E D-90から出土した。一辺1.2mの平面方形で、深さは約40cmを測る。覆土は黄色味をおびた暗褐色系の土で、下層には黄色土粒が多く混入していた。

**第18号竪穴建物址（第61図）**

E E-89から出土した。長軸1.3m、短軸1m、深さ約30cmの平面隅丸長方形を呈している。北部にピットが重複しているが、前後関係は明確にできなかった。覆土中層に黄色土を多く含む暗褐色系の土が確認されている。

**遺物（第64図13・15）**

13は形態の不明な鉄の棒である。15は薄い鉄の板である。用途は不明である。

**第19号竪穴建物址（第61図）**

E A-94から出土した。長軸約1.4m、短軸約1.1mの平面長方形を呈し、深さは約50cmを測る。覆土中層には焼土の混じった層が確認でき、下層では黄色土粒の多く混入した層が観察された。

**第20号竪穴建物址（第61図）**

D U-97から出土した。上層から礫が出土した。一辺1.4mほどの平面不整形である。下層に黄色土の多く混入した層が確認された。

**第21号竪穴建物址（第61図）**

D S-98から出土した。長軸約1.4m、短軸約1.1mの平面長方形であった。深さは約50cmを測り、底面壁際には溝溝が全周していた。覆土には黄色少粒が混入し、中層では炭がやや混入していた。



**第22・23号竪穴建物址（第61図）**

これらの竪穴建物址はDY-87から出土した。当初1基の遺構と判断していたため、一度に調査を実施してしまっ。土層観察から、第23号竪穴建物址が新しいことが判明した。この第23号竪穴建物址は一辺約1mの方形と推定され、深さ約10cmであった。

第22号竪穴建物址は長軸約2.4m、短軸約1.5mの平面長方形であったと推測される。中層から下層にかけて黄色土粒の多く混入した覆土が観察されている。

**遺物（第64図14・16）**

14は扁平な形態の鉄製品である。楔の可能性ある。16は棒状の鉄製品である。

**第25号竪穴建物址（第62図）**

DP-86から出土した。長軸約2.5m、短軸約1.7m、深さ約30cmを測る平面プラン長方形を呈する。覆土下半には黄色土粒の多く混入した層が観察された。

**遺物（第64図17）**

「L」字状に屈曲した鉄製品である。

**第26号竪穴建物址（第62図）**

DL-90から出土している。一辺約1.1mの方形を呈する。深さは約30cmを測り、覆土上層には黄色土粒の多く混入した層が検出された。

**第27号竪穴建物址（第62図）**

DI-90から出土した。長軸約1.3m、短軸約1m、深さ約30cmを測る。平面長方形を呈する。覆土中には炭が若干混入している層も存在していた。

**第28号竪穴建物址（第62図）**

DI-89から出土した。長軸約2.1m、短軸約1.1mを測り、深さは約15cmと浅い。覆土には黄色土粒が多く混入していた。

**第29号竪穴建物址（第62図）**

DX-90から出土した。調査段階で1基の遺構と把握していたが、土層観察の結果、西部では焼土の混入した覆土が主体であり、東部では暗黄色土の混入した土層がみられ、状況が異なっていたため、土層観察では明確に把握できなかったものの、2基の遺構とするのが適当と考えられる。プランは、全体としては長軸約2.7m、短軸約2.4mであるが、前述の通り、土層観察の結果をふまえると、短軸は1m前後で2分できる可能性が高い。

**第30号竪穴建物址（第62図）**

DT-89から出土した。長軸約2.9m、短軸約1.4mで、深さ約30cmを測る。平面プランは長方形であり、覆土は黄色土粒や、下層には黄色土などを混入した暗褐色系の土が観察された。

**第31号竪穴建物址（第63図）**

DK-89から出土した。調査区上部での検出であったため、削平が激しく、壁高は約10cm程度と、残存状態はあまりよくない。

この竪穴建物址は平面形態が「L」字状に屈曲しており、底面の西部には被熱箇所が検出された。また、北壁際には周溝がめぐっていた。規模はおおよその軸方向で、南北軸は約2.8m、東西軸は約2.2m、幅約1.2mであった。なお、土層観察を十分に行えなかったため、単独の遺構なのか、重複していたのかは明確にできなかった。

**第32号竪穴建物址（第63図）**

DV-97から出土した。一辺約1mの平面方形で、深さ約20cmを測る。覆土は黄色土粒を少量混入した暗褐色系の土であった。なお、上層からは扁平な細長い礫が出土している。

**第33号竪穴建物址（第63図）**

DR-97から出土した。一辺約1mの平面方形のプランであった。深さは約40cmで、底面付近に礫が出土した。この建物址は土層観察を行えなかったため、覆土の状況は不明である。

**第34号竪穴建物址（第63図）**

DP-88から出土した。一辺約1.3mの方形で、深さ約60cmを測る。覆土は中層に黄色土粒が多く混入した暗褐色系の土が観察された。

**第35号竪穴建物址（第63図）**

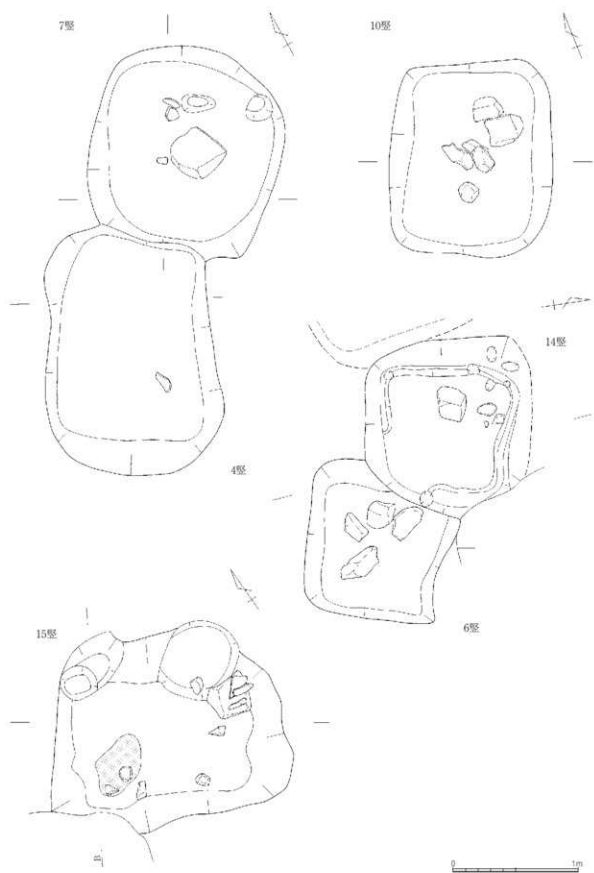
DR-96から出土した。一辺約1.2mの平面方形で、深さ約15cmを測る。この竪穴建物址は土層を観察する事ができなかった。なお、底面壁際のほとんどの地点に周溝が検出されている。

**第36号竪穴建物址（第59図）**

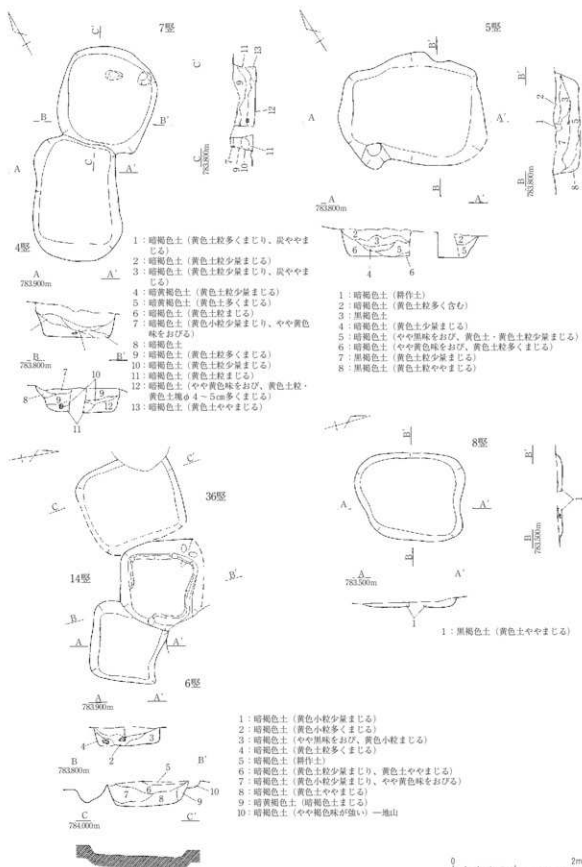
DT-86から第14号竪穴建物址と重複して検出された。検出時に失敗してしまったため、壁の一部を破壊してしまい、明確な規模を把握することができなかったが、一辺約1.5mの平面方形で、深さは約20cmであった。

**第37号竪穴建物址（第63図）**

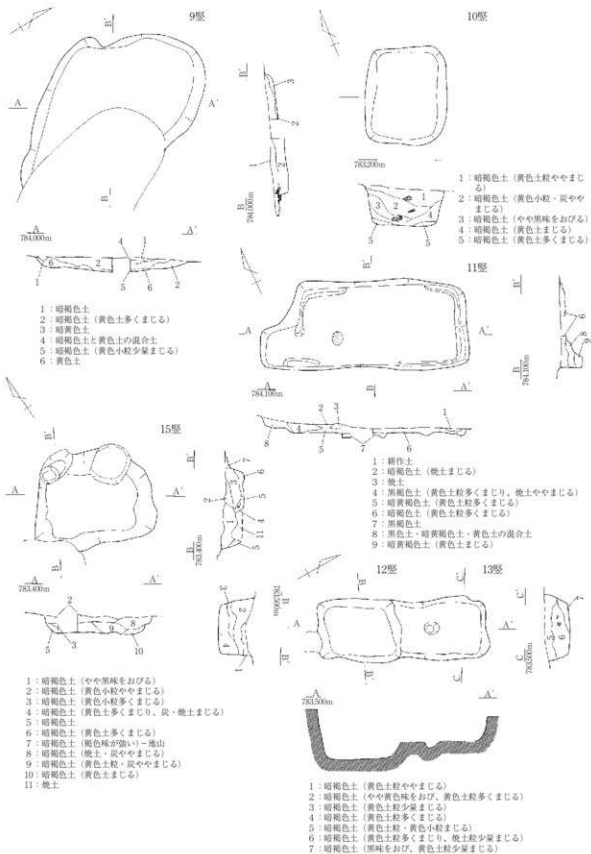
EI-81から出土した。一辺約1mの方形で、深さ約60cmを測る。なお、この竪穴建物址についても、第70号住居址の調査中に、重複に気づかず掘り上げてしまったため、遺構の検出に失敗し、土層観察することができなかった。



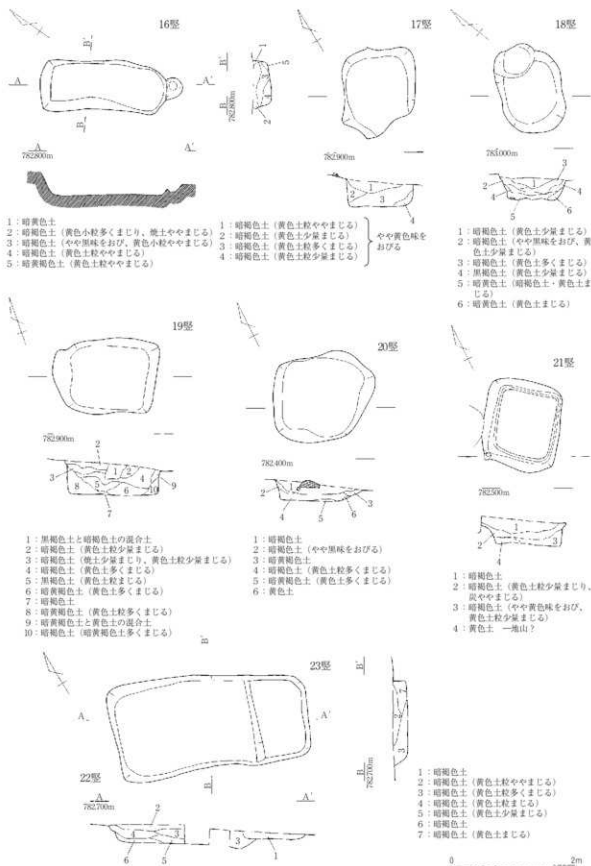
第58圖 竪穴建物址掘出土状況図



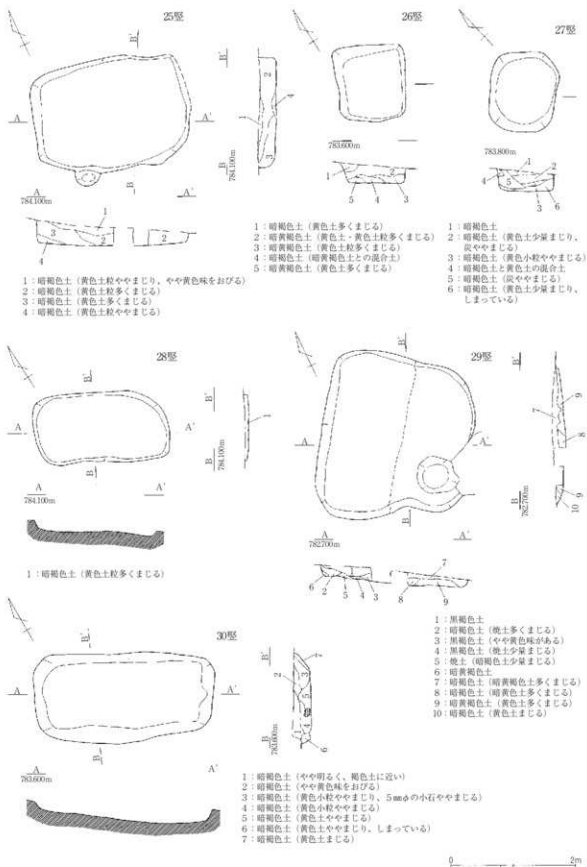
第59図 竪穴建物址遺構平面図(1)



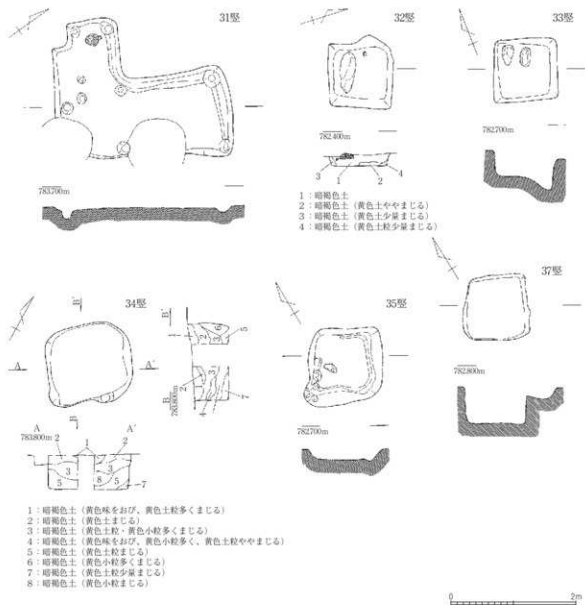
第60図 壙穴建物址遺構平面図(2)



第61図 竪穴建物址遺構平面図(3)

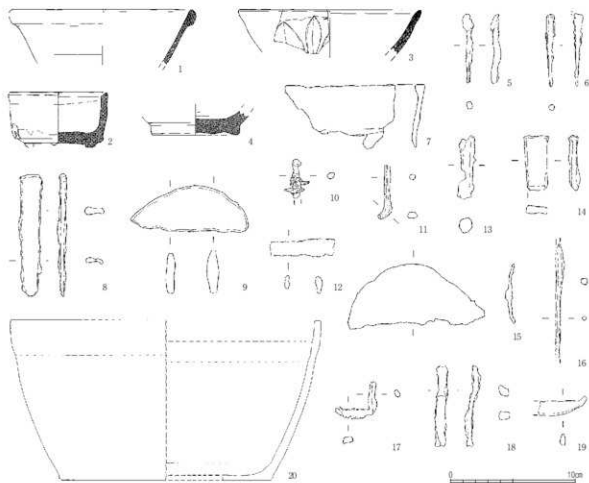


第62図 堅穴建物址遺構平面図(4)



第63図 竪穴建物址遺構平面図 (5)





第64図 堅穴建物址出土遺物 (1・4型、2・5・5型、3・6・7型、4・34型、7・8・12型、9・14型、10・11・16型、  
12・20・15型、13・15・18型、14・16・23型、17・25型、18・398土、19・348土)

## 6. 不明遺構

## 不明遺構 (第65図、第66図)

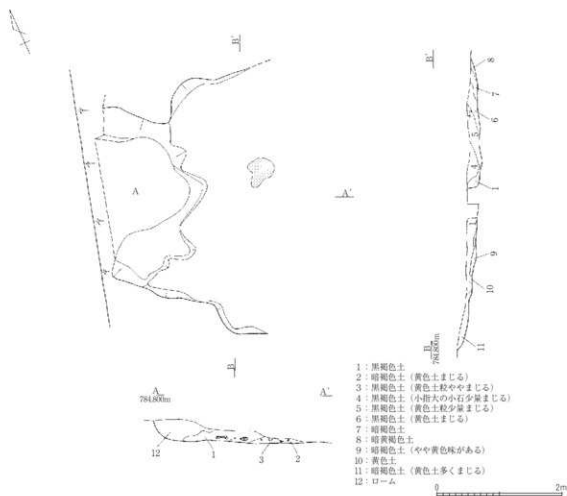
この遺構はDN-85から出土している。遺物が集中して出土していたことから、遺構の存在を把握したが、開墾や、耕作によるカクランによって遺構の遺存状況が悪く、その性格を把握することができなかった。遺構の完掘状況からみると、中央部付近の底面に被熱による赤色化地点が検出されていることから、住居址として扱ってもいいのかもしれない。覆土は、遺構中央部に黒褐色系の土が堆積し、周囲に暗褐色系の土が観察されている。

## 遺物 (第67図、第68図)

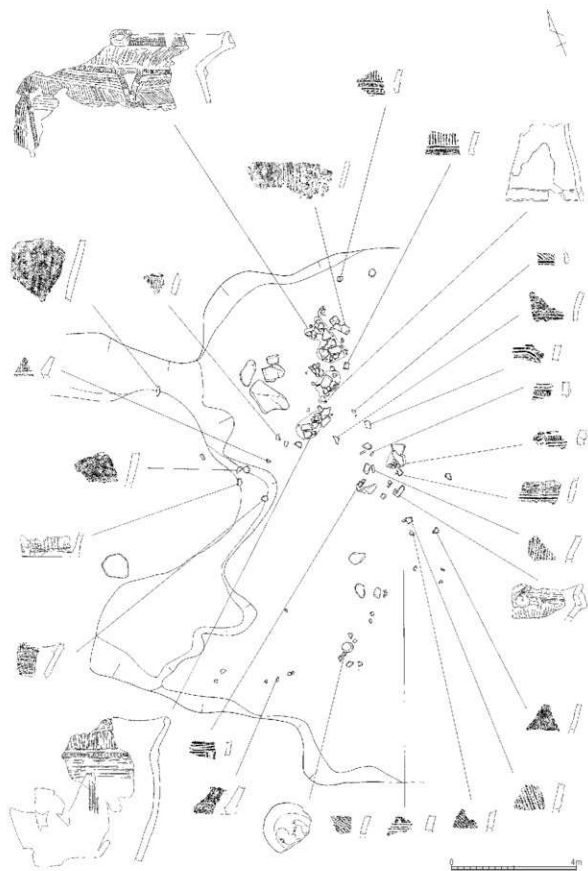
この遺構から出土した遺物は、沈線文を施文しているタイプの破片 (第67図1~23・26) が多く、一部に縄文 (第67図24) や、印刻文 (第67図25・27~29) を施文する破片がみられる。

その他、半截竹管状工具を使用して施文した土器片 (第68図2・3・5) や、東海系と考えられる土器片 (第68図4) などがみられる。

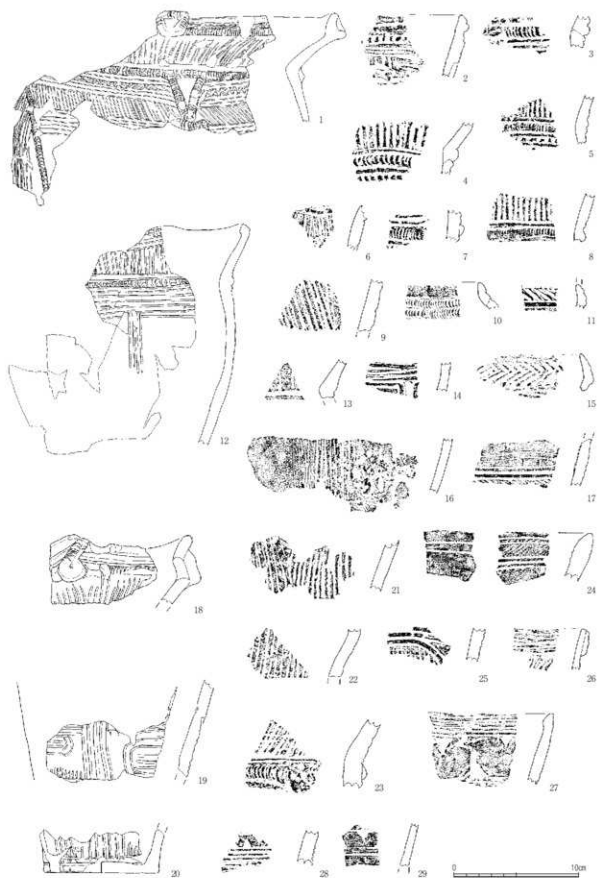
石器は短冊型の打製石斧 (第68図16・17) や、磨石 (第68図18)、埴打痕を多く留める凹石 (第68図19) 等が出土した。なお、第68図20は黒曜石の剥片石器である。



第65図 不明遺構平面図



第66圖 不明遺構遺物出土状況圖



第67图 不明遺構出土遺物(1)(1·12: S-1/6)



第68図 不明遺構出土遺物(2) (20: S-2/3)

## 7. 遺構外出土の遺物

今回の調査でも多量の遺構外出土遺物があるが、ここではその中でも、遺構として検出されなかった時期の遺物および陶磁器、石器、鉄器について掲載している。

遺構として把握できなかった時期としては縄文時代中期初頭・晩期であり、その他に小片で縄文時代早期の土器片を数片図化している。

第69図1は縄文時代早期の遺物で、沈線を施した含繊維土器である。縄ヶ島台式と考えられる。

第69図2～27は縄文時代晩期と考えられる土器である。

2・3は、外面にヘラ状工具を使用して、細い沈線を羽状に施文している土器である。2の口唇部には竹管状工具の押圧が見られ、内面には横位に1本沈線を引いている。

4はヘラ状工具により斜位の沈線をひいている。

5・6・8は口縁部に隆帯を持つ土器片である。5は縄文施文後に、棒状の隆帯を口縁部に貼り付けている。

6・8は口縁部下部の隆帯に押圧が加えられている。6は区画内の周囲に沈線がひかれ、その内部はミガキ調整が行われているのみであるが、5は区画内に横位の沈線が3条引かれている。

7も口縁部上端部付近に横位の押圧隆帯が施文されている。また、11は口縁部に沿って3条の沈線がひかれており、14は地文として縄文が施文されている。22は2条の横位沈線で区画された上下に、斜位の沈線が引かれている。

9・10は横位の沈線とキザミを施した破片である。10は口縁部上端部にも沈線がみられる。

12は磨消縄文に挟まれて宇字文が施文され、18には雲形文が施されている。16にも磨消縄文による施文が行われているが、皿状を呈する可能性もある。

19・21・23・24・26・27は沈線を施した土器片であり、23は口縁部端部に磨消縄文がみられる。

20は条痕文がみられる。

なお、7・11・14・22は後期の可能性もある。

第79図は陶磁器である。図化のできた破片は14点程であったが、他にも小片ではあるが白磁碗(口縁玉縁状)の破片や、面取り杯、鉢(片口鉢か)の破片等が出土している(巻頭図版)。

貿易陶磁器としては、まず1・4・5は淡緑色の釉薬がみられる。5は内面に劃花文が施されている。4・5は同安窯系の青磁と考えられる。7・8・10・11は龍泉窯系の青磁で、10・11は鍋連弁文の上に櫛目を縦位に施している。

美濃瀬戸系の陶磁器は若干時期がずれる可能性もある。2は鉛釉の小皿である。素地部分にススの附着がみられる。3・9は卸皿である。6は柄付片口と思われる。被熱によって釉薬が再溶融している。

第79図15～23は鉄製品である。用途のわからない製品が多い。17・21は鉄釘である。20は火打金である。23は鑄造鉄器の破片と思われる。

24は古銭で、「政和通寶」(北宋銭)で、初鑄年は1111年である。

25は弥生時代の壺の口縁部である。受け口状を呈し、外面にクシ播波状文を施文している。また、体部にはクシ播きの斜走短線文が施される。

第70図1～14は石畿である。これらの内、未成品と考えられる破片は第70図10・11・13・14である。

これらの未成品と、大きく欠損した破片を除いてみると、石畿には全体の形状が正三角形を呈する物と、二等辺三角形を呈する2種類がある。

正三角形を呈する石鏃は、基部の挟りか弧状を呈する（第70図5・6）種類が存在する。

二等辺三角形を呈する石鏃については、基部の挟りが逆V字状（第70図1・2）、弧状（第70図4・7）、基部中央部に丸い挟りを入れた（第70図3）3種類の石鏃がみられる。

その他、有茎鏃として凹基有茎鏃（第70図8）や平基有茎鏃（第70図15）も出土している。

第71図5・6は石錐である。大な摘まみを持ち、刃部の短い（6）もの、破片を利用していると考えられる（5）ものなどがある。

第70図16～24、第71図1～3は石匙である。摘まみを明確に作っている（第70図20・22・24、第71図1・2）ものや、三角形の形態（第70図17・18）のものがみられる。

このほかに、楔型石器（第71図13～20、第72図1・2）や、剥片を使用した石器（第72図3～22、第73図、第74図1～4）、石核（第74図5～8、第75図、第76図）等が出土している。

なお、第74図10は赤色チャート製の剥片石器である。

第77図1～4は打製石斧である。1は掬型である。第77図2・3・4は短冊型である。

第77図6は乳棒状磨製石器である。

第77図8、第78図1～5は磨石である。偏平な円盤状の形態（第78図2～5）と、偏平な楕円状の形態（第77図8、第78図1）がある。

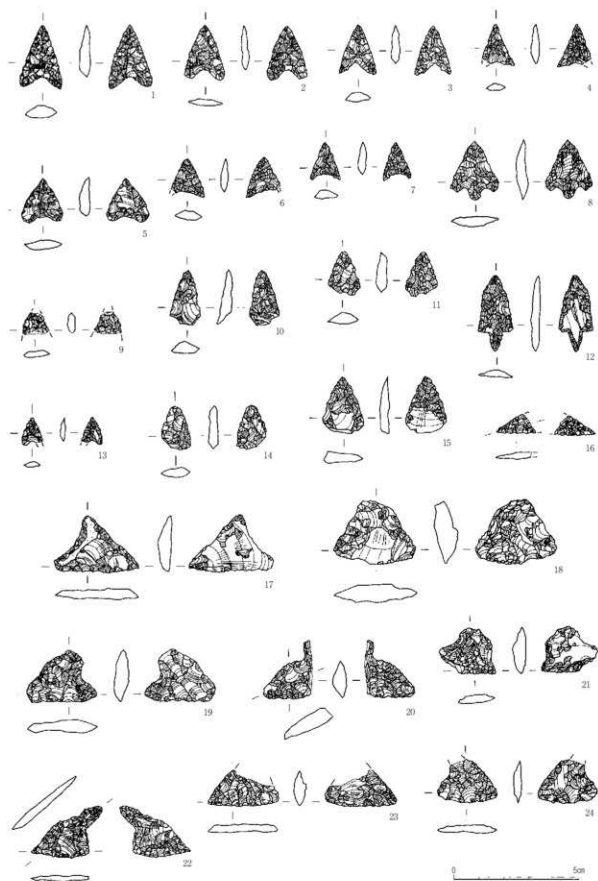
第77図9は凹石である。表面・背面共に使用痕をとどめている。

第78図6～8は砥石である。6・7は平安時代の砥石と考えられる。8は自然礫を使用しており、筋状の研磨痕を多数みることができる。

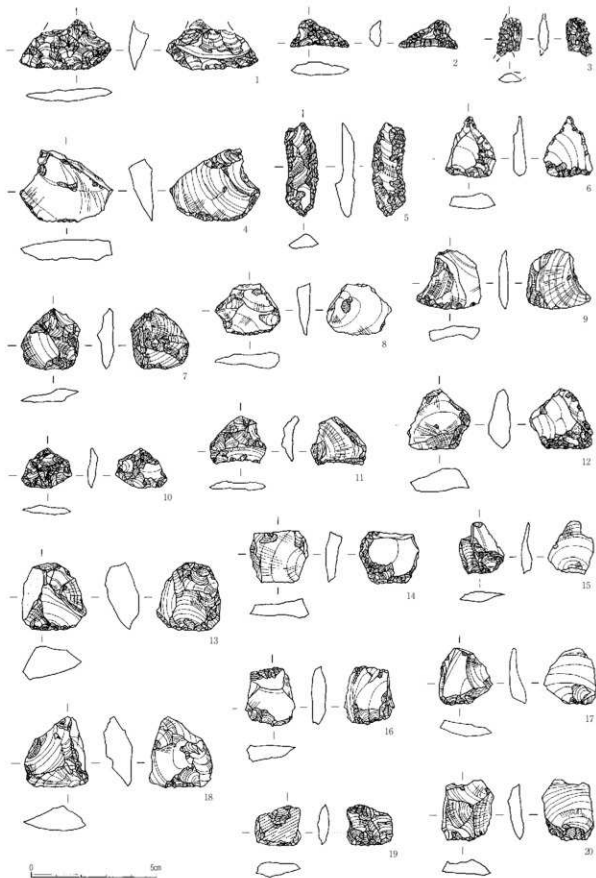


第69図 遺構外出土遺物(1)

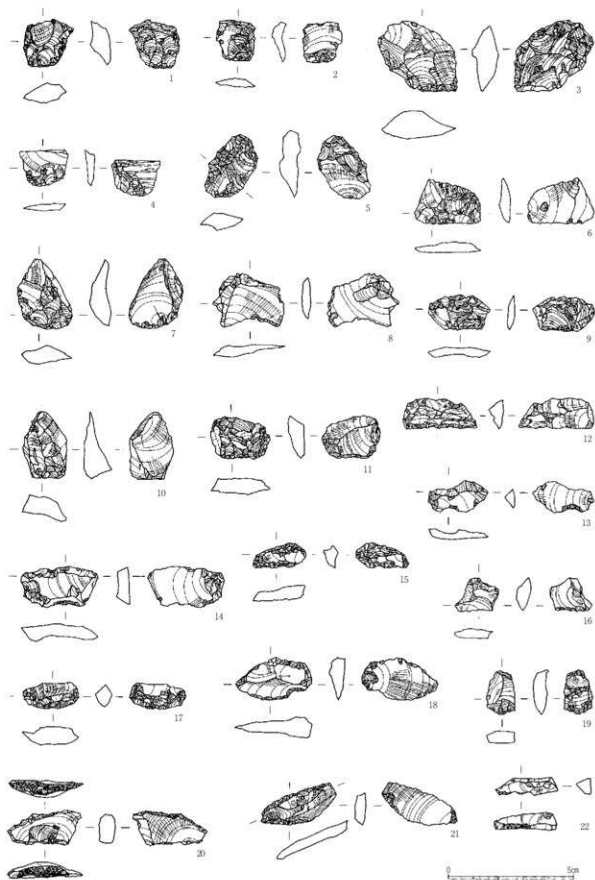




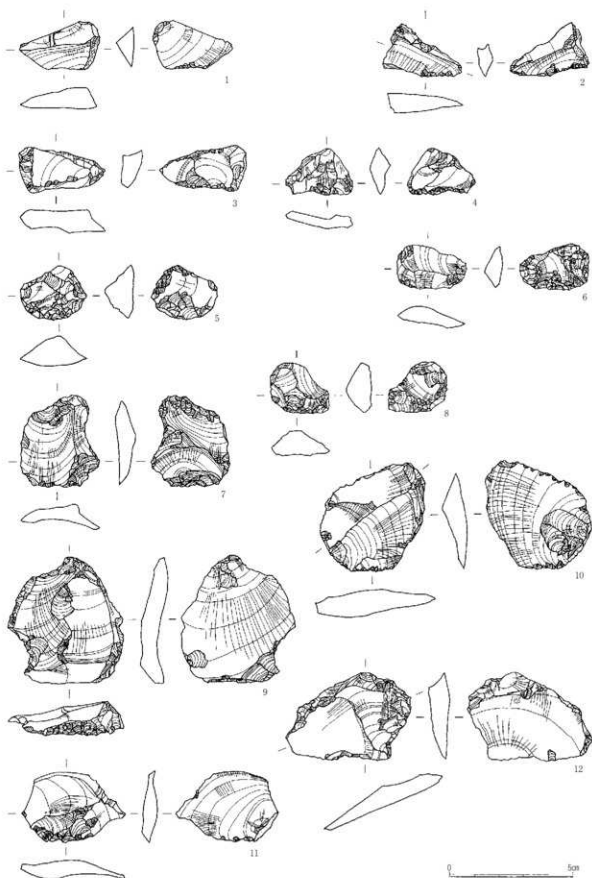
第70図 遺構外出土遺物(2)



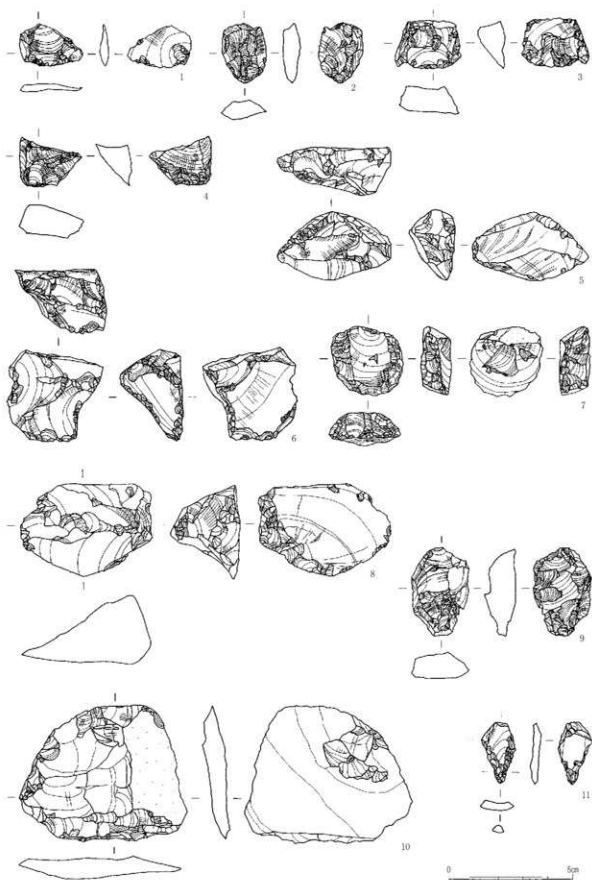
第71図 遺構外出土遺物(3)



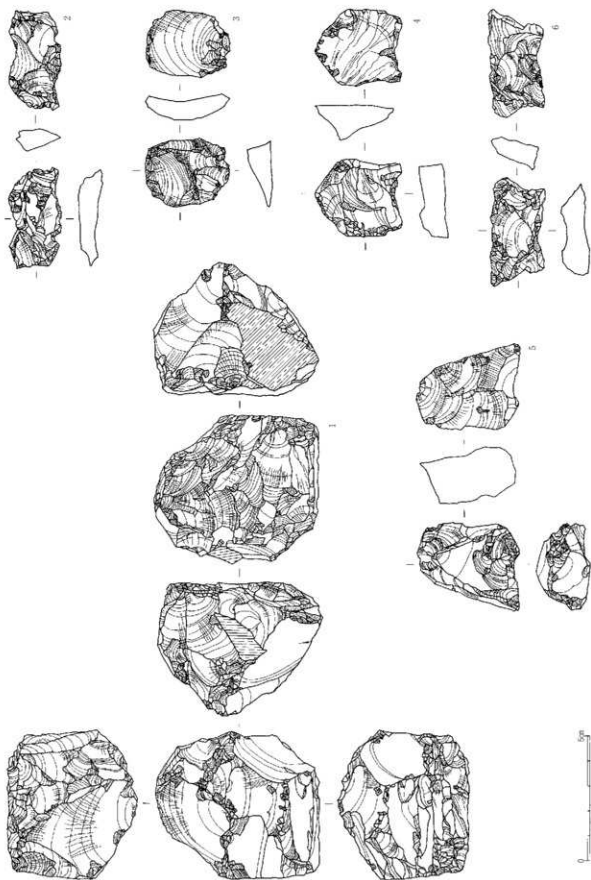
第72図 遺構外出土遺物(4)



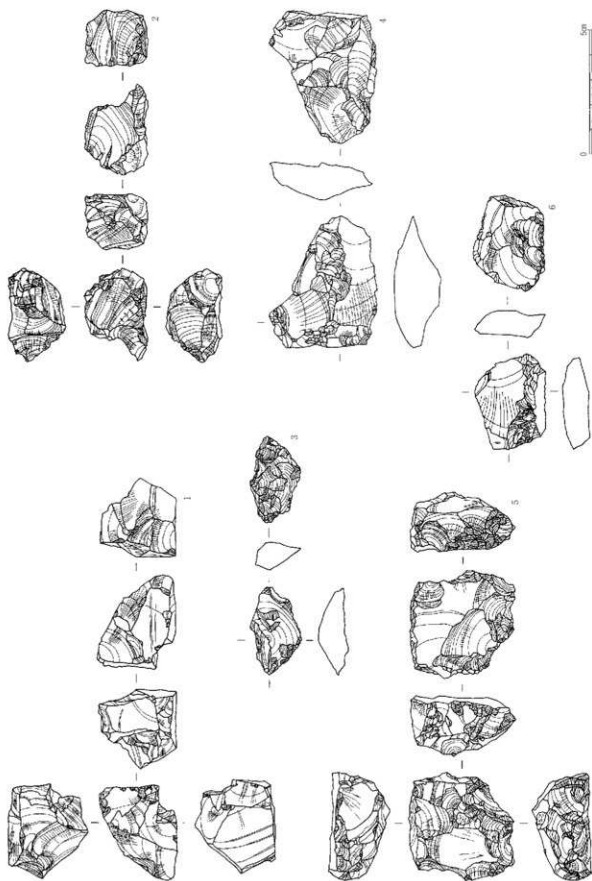
第73図 遺構外出土遺物(5)



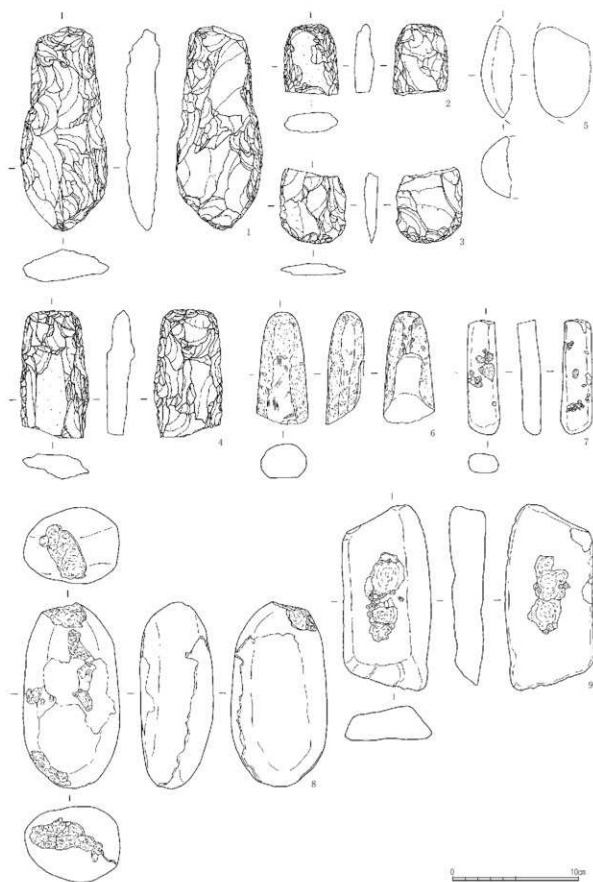
第74図 遺構外出土遺物(6)



第75図 遺構外出土遺物 (7)

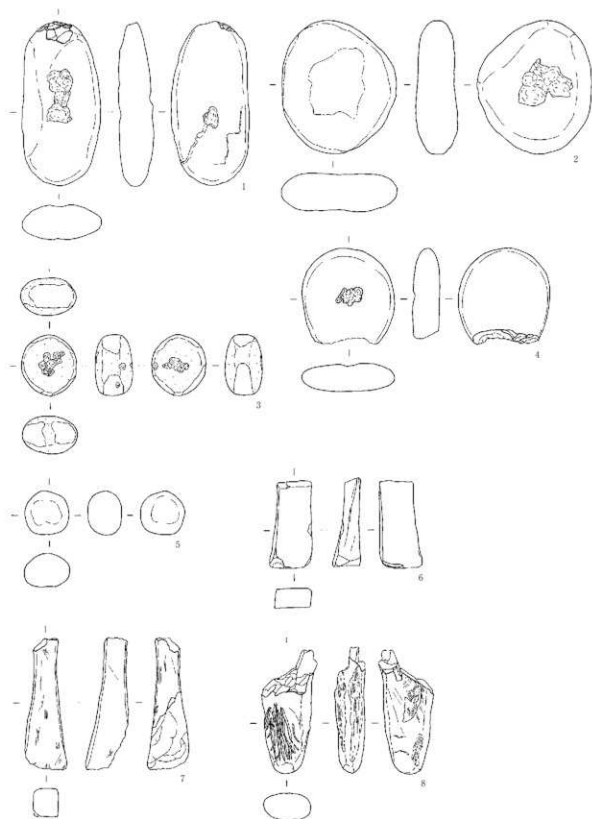


第76図 遺構外出土遺物 (8)



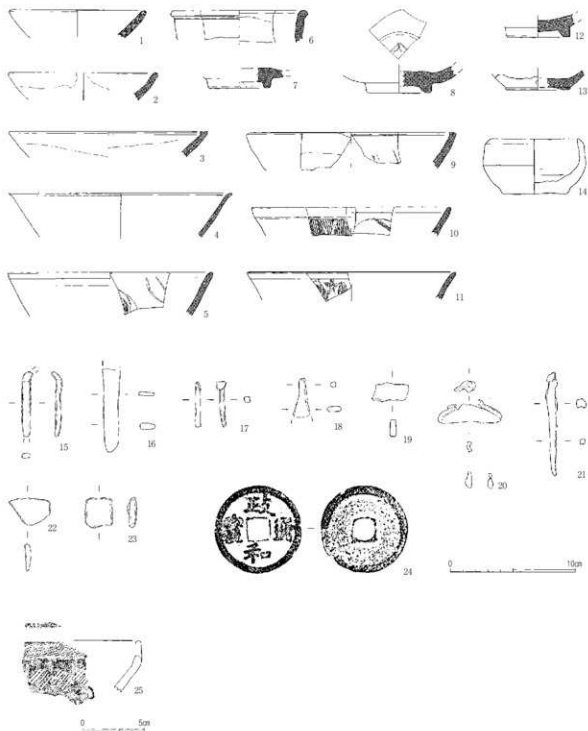
第77図 遺構外出土遺物(9)





第78図 遺構外出土遺物 (10)

7. 遺構外出土の遺物



第79図 遺構外出土遺物 (11) (24: S-1/1)

## 第V章 ま と め

今回の調査が、3次にわたる調査の最終調査次となった。

第3次調査では、縄文時代の住居址が1基出土した。時期としては前期末葉であり、この遺跡で最も多く出土した時期であった。これまでの調査結果から考えると、縄文時代前期末葉から中期初頭を中心に住居址が扇状地上にまばらに展開し、その分布範囲内に当該期の土坑が分布し、あわせて時期は明確ではないが、小竪穴状遺構も散在する状況が窺えた。

弥生時代については、今回の調査では削平によって遺構を把握することができなかったものの、埋蔵炉が2ヶ所出土したことから、2基の住居址が存在していたことが推定できた。合計14基の住居址が3次に渡る調査で発見されたが、これらの住居址の生活基盤が、断崖下の湧水によって形成された湿地での水田耕作であったとすると、短期間だけこの地を生活の場として選択した状況について課題が残ることになる。小規模な住居址も存在し、町内でも類例のない出土状況なので、今後資料の増加を期待したい。

平安時代の住居址は主として松本平の編年で、15期と考えられる時期が主体で、8期頃と考えられる住居址が1基検出されたのみであった。第2次調査で、この付近に検出された住居址は11期と15期であったため、この地点は平安時代末期の集落域といえる。調査区域全体を概観すると、第2次調査報告書での指摘のとおり、北部から南部へと居住域が移動していることを追認できた。

さらに、この付近では、中世と考えられる竪穴建物址をはじめ、建物の規模を把握することは困難であったものの、柱穴が多数出土しており、龍泉窯系の青磁碗や白磁V類の碗をはじめ、卸皿、鉛釉の皿の破片等が出土し、これらの陶磁器のほかに、竪穴建物址の覆土中からは内耳土器も出土していることから、平安時代末期から中世・戦国時代頃までの痕跡を見ることができた。竪穴建物址については段丘先端部に位置しており、遺構の重複が見てとれ、底面に柱穴が確認されていない。また、礫が出土している遺構もあることから、墓塚も含まれている可能性がある。

残念ながら、北東部が未調査なため、中世の遺構の広がりについて明確にできないが、少なくとも第1次調査で出土した鉄生産関連遺構に付随する遺構が、段丘崖付近に展開していたことが考えられる。

ところで、神谷遺跡の東部下段に存在するうずらいの集落は、上諏訪造宮帳（1578年）にその名がみられ、戦国時代には存在していたことがわかる。また、この地域で最古と考えられる元禄13（1700）年の年号が刻まれた庚申文字碑が集落内に存在しており、今は取り壊されて消滅してしまった虚空像堂や、集落北部に諏訪神社も現存していることから、中世まで遡ることができると考えられ、この集落が存在していた時期に、背後の山麓部で鉄生産が行われていた可能性を考えなくてはならない。また、その下段には、天竜川に接するようにして鎌倉期の陶磁器片を出土している居館（新町原田南遺跡）が構えられ、薬研堀に囲まれた部分には柱穴が並び、掘立柱建物址が存在していたことがわかっていく。

新町地区は宮処郷の一部であり、宮所孫次郎が大庭台地に居を構え、この一帯を支配していたといわれる。この宮所郷に所在する居館址の上部に展開する扇状地上で、製鉄関連遺構が操業していたことは、宮所氏との関連を抜きには考えられないのではなからうか。史料からは、「土豪」といった感のある宮所氏と「製鉄」という特殊な職能との関係について、新たな角度から検討していかなくてはならないであろう。

末筆とはなりましたが、現場作業および整理作業に携わっていただいた、多くの関係者のみなさまに感謝を申し上げます。

写真図版





第69号住居址



第70号住居址



第71·72号住居址



第72号住居址炉



第80号住居址炉



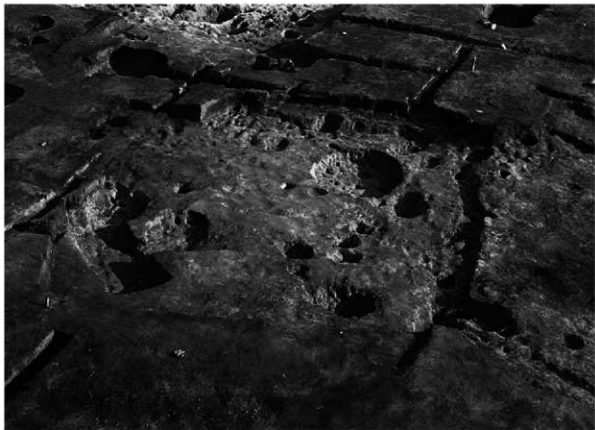


第73号住居址(1)





第73号住居址 (2)



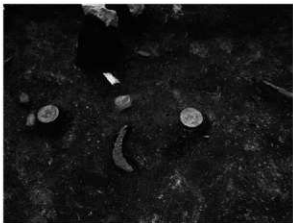
第74号住居址



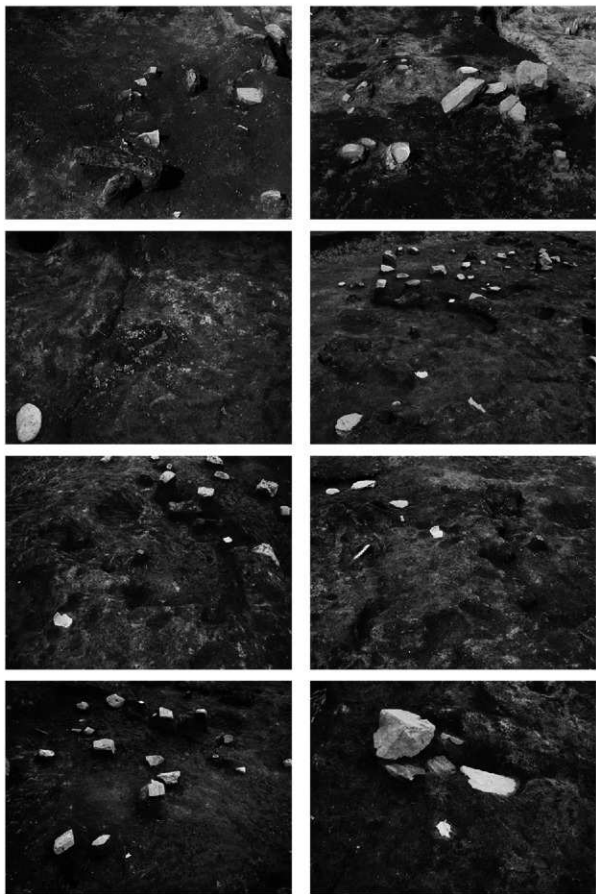
第74·75·77号住居址



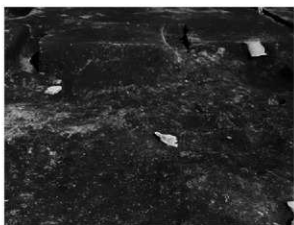
第75·77号住居址



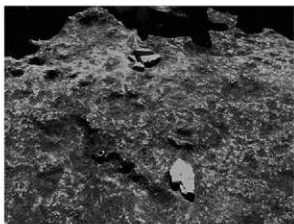
第75号住居址(1)



第75号住居址(2)



第77号住居址(1)



第77号住居址(2)

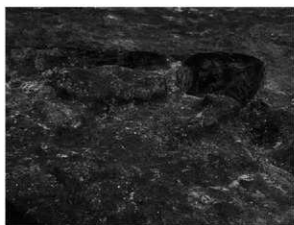
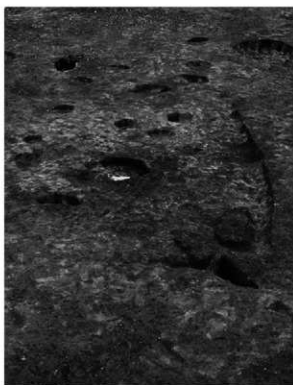


第78号住居址

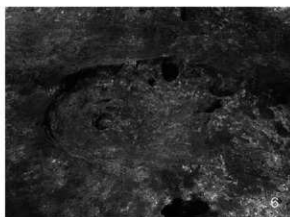
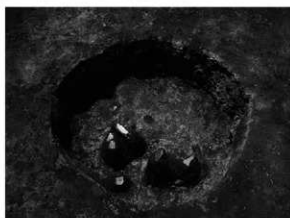
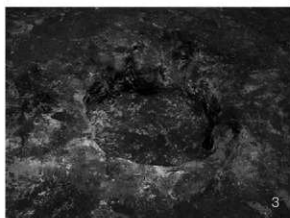
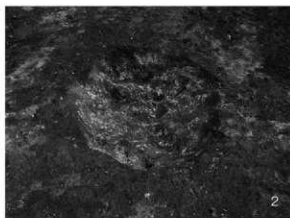
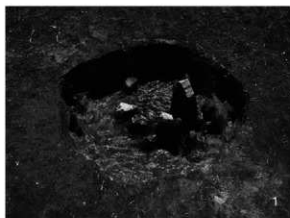




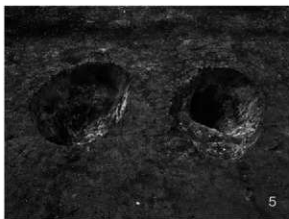
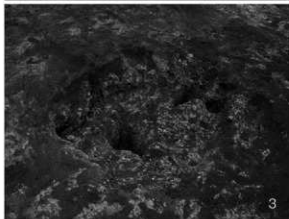
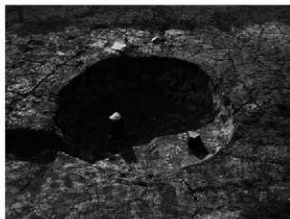
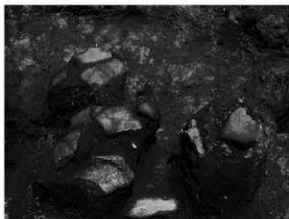
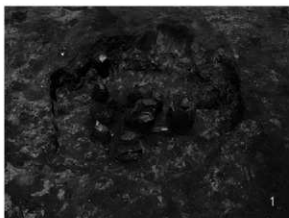
第79号住居址



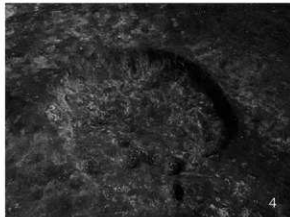
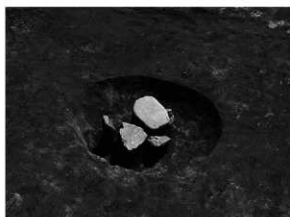
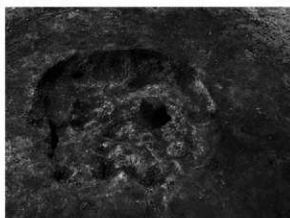
第81号住居址



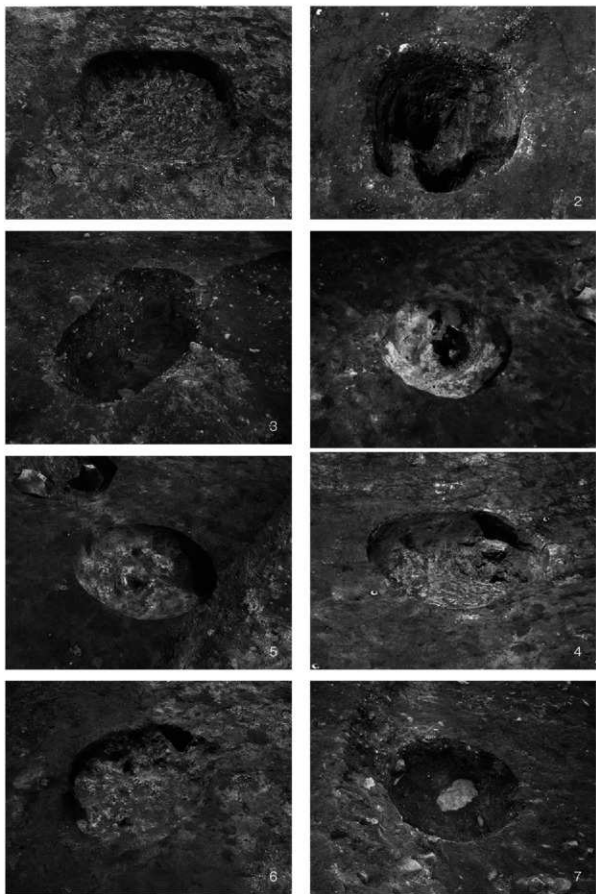
土 坑 (1) (1 : 331土、2 : 332土、3 : 333土、4 : 334土、5 : 336土、6 : 337土)



土坑(2) (1:335土, 2:338土, 3:335土, 4:341土, 5:339·340土, 6:345土)



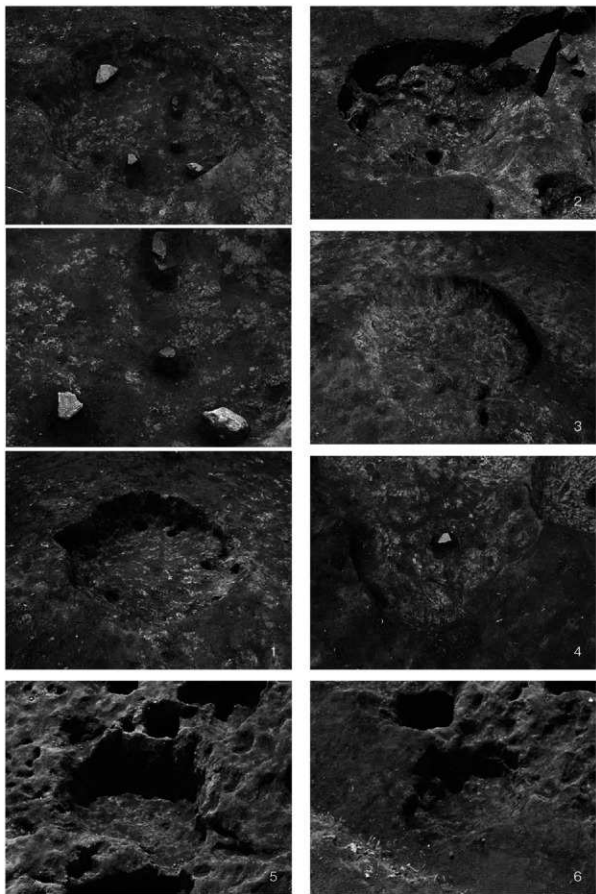
土坑(3) (1:342・343土, 2:342土, 3:343土, 4:346土, 5:344土, 6:347土)



土坑(4) (1:348土, 2:349土, 3:351土, 4:352土, 5:353土, 6:355土, 7:357土)



土坑(5) (350·416·417±)



土坑(6) (1:354土、2:358土、3:346土、4:360土、5:361土、6:362土)



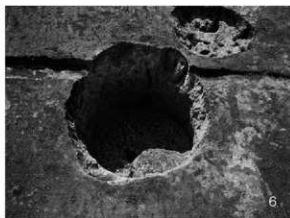
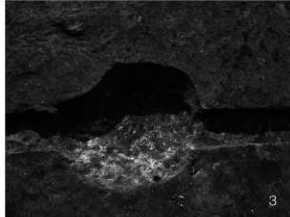
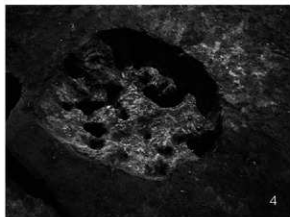
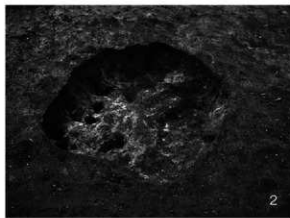
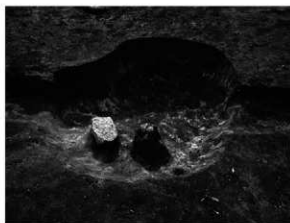
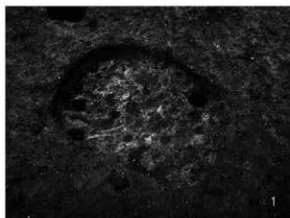


EB-85付近土坑群

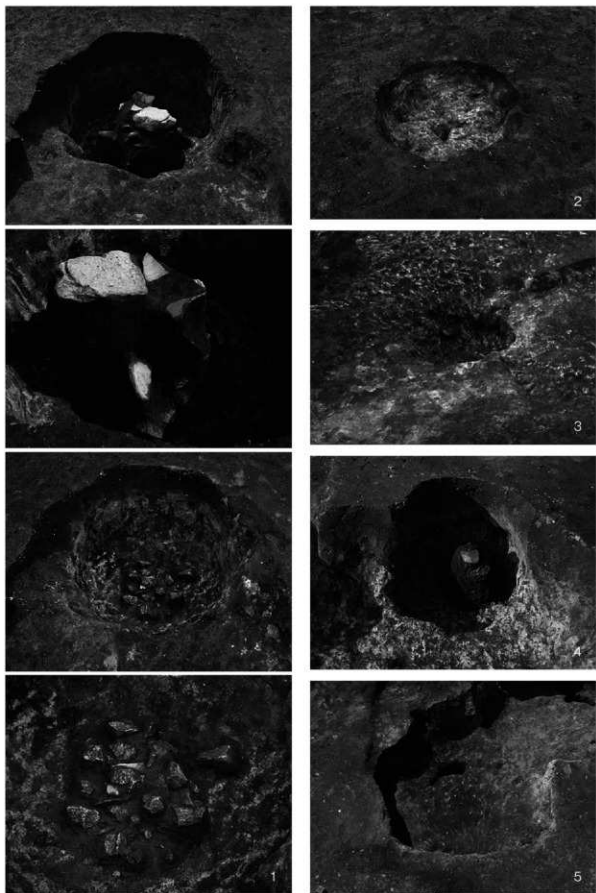


DV-82付近土坑群

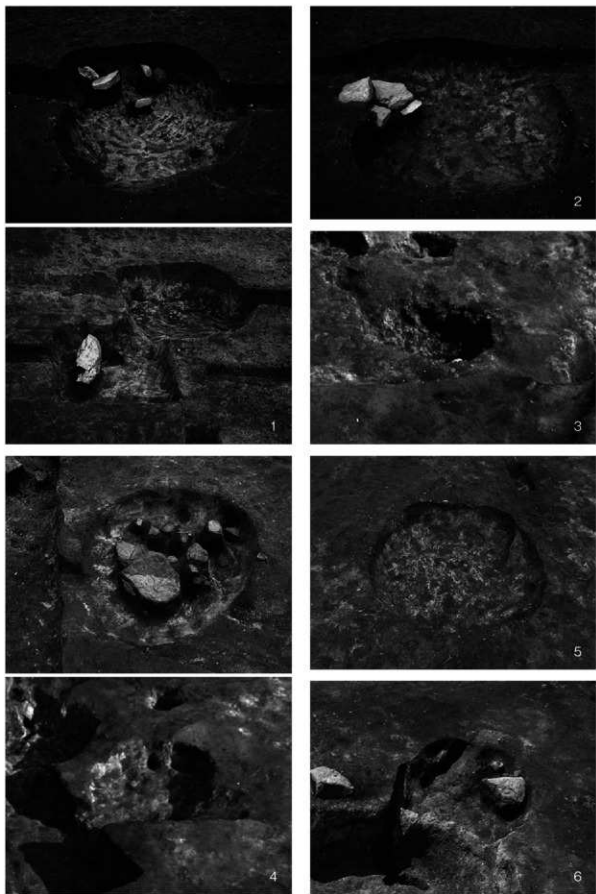
土坑(7)



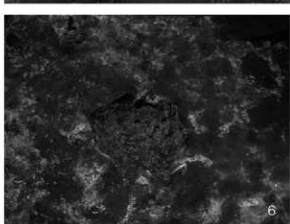
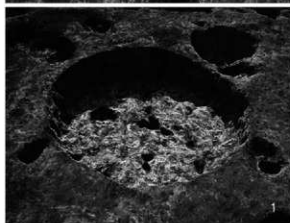
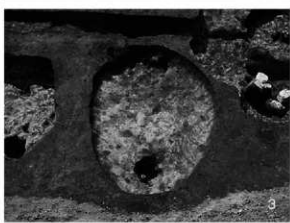
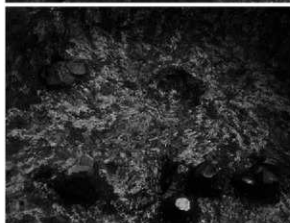
土 坑 (8) (1:363土、2:364土、3:365土、4:366土、5:367土、6:368土)



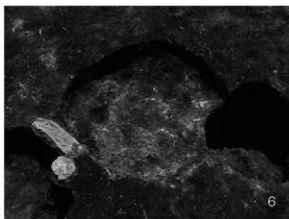
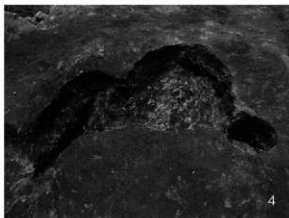
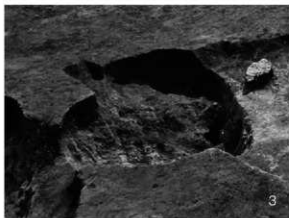
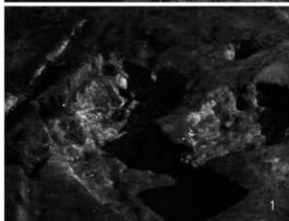
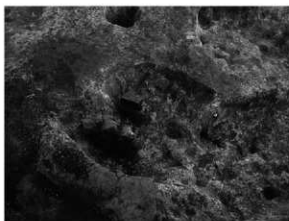
土坑(9) (1:369土, 2:370土, 3:371土, 4:372土, 5:373土)



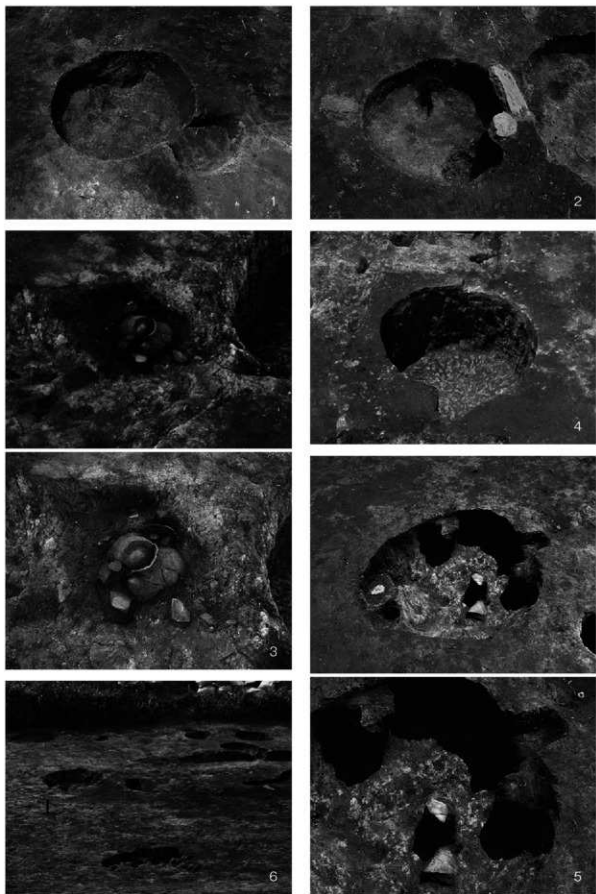
土 坑 (10) (1 : 374土、2 : 375土、3 : 380土、4 : 382土、5 : 383土、6 : 384土)



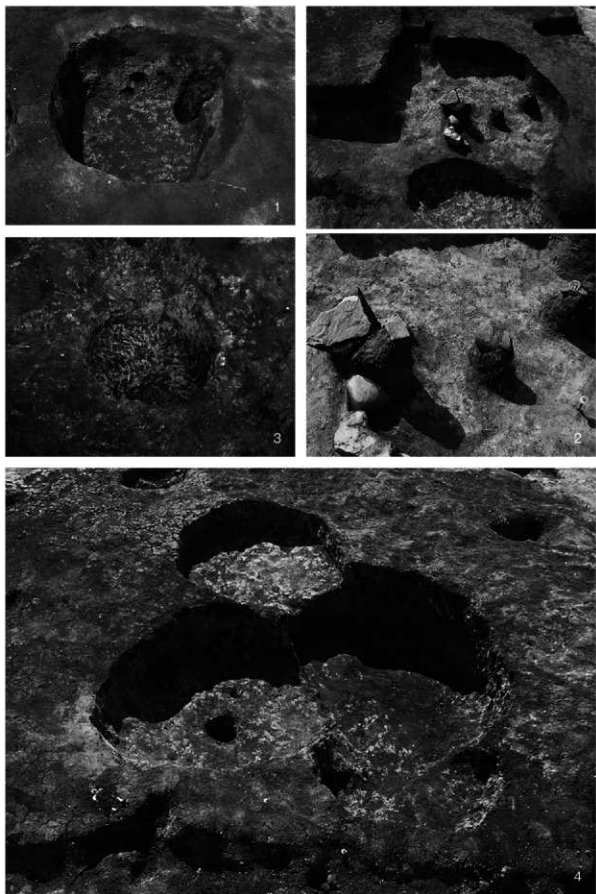
土坑(11) (1:381土, 2:387・388土, 3:389土, 4:390土, 5:391土, 6:392土)



土 坑 (12) (1 : 393土、2 : 394土、3 : 395土、4 : 396土、5 : 397土、6 : 398土)

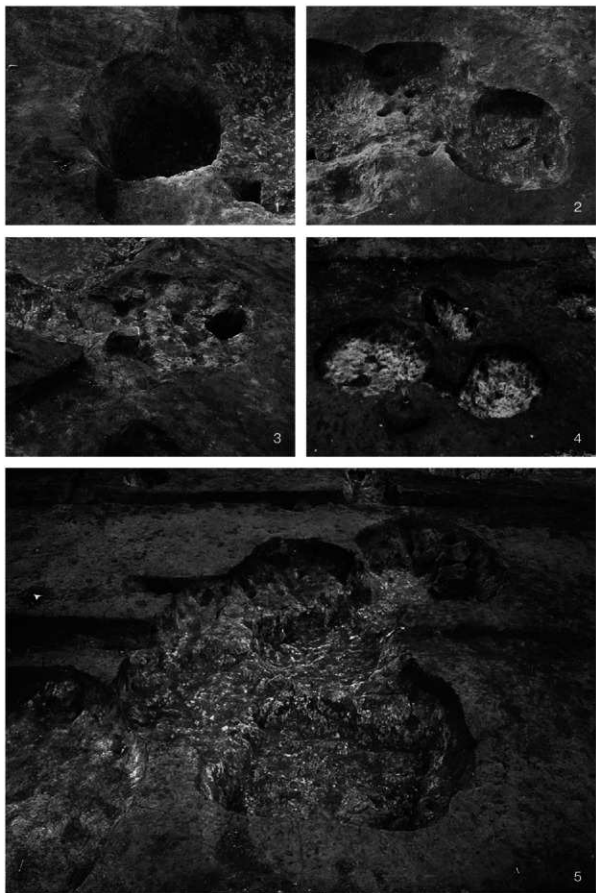


土坑 (13) (1: 399土, 2: 400土, 3: 402土, 4: 403土, 5: 404土, 6: 405土附近)

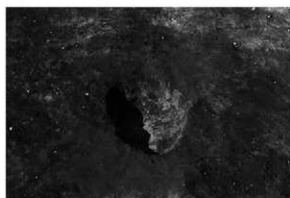
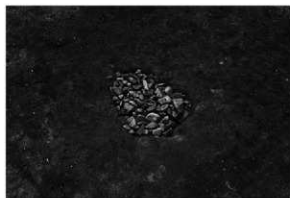


土坑(14) (1:407土, 2:408土, 3:409土, 4:411·412·414·415土)

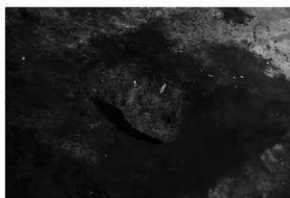




土坑 (15) (1:416土、2:417土、3:418土、4:420土、5:420・421・422土)



第23号集石



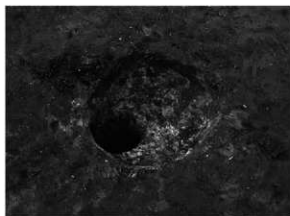
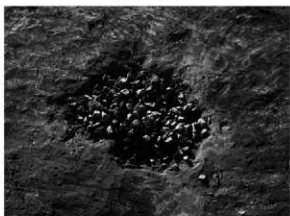
第24号集石



第25号集石

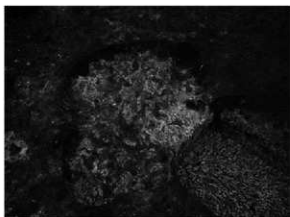


第28号集石



第29号集石

第30号集石

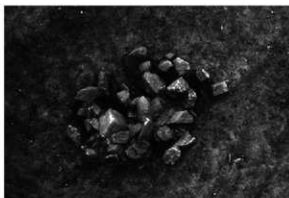


第31号集石

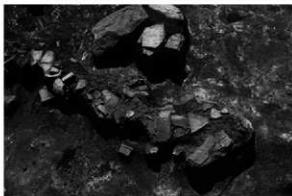
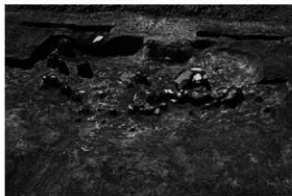
第34号集石



第32号集石



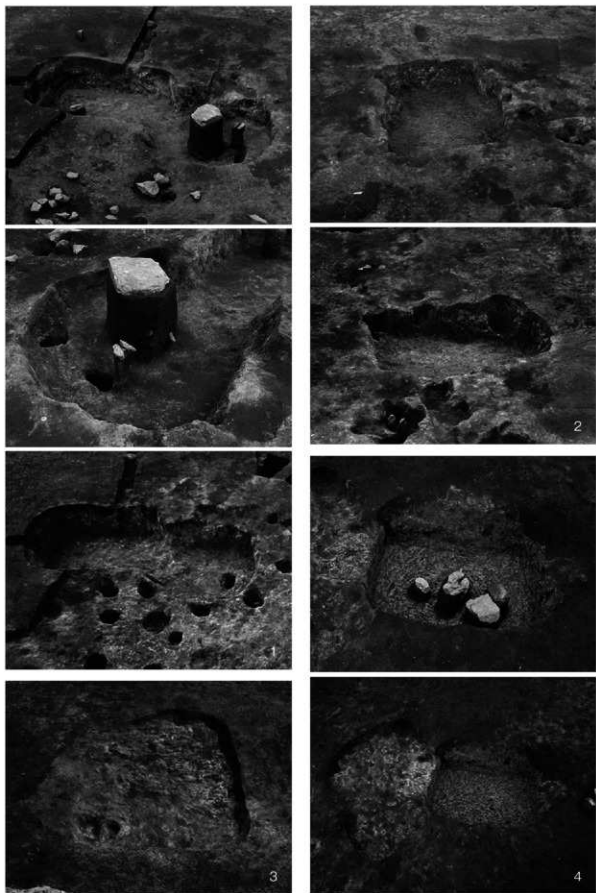
第33号集石



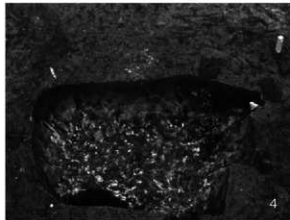
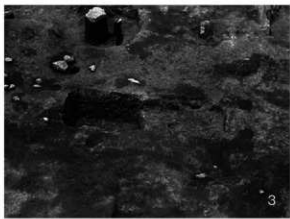
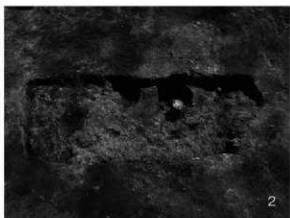
不明遺構



竖穴(1)

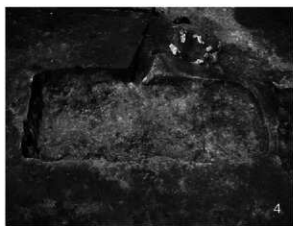
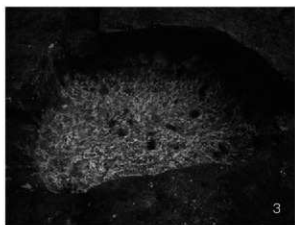
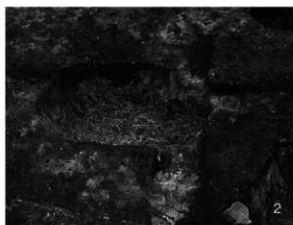


堅 穴 (2) (1: 4・7照, 2: 5照, 3: 8照, 4: 10照)

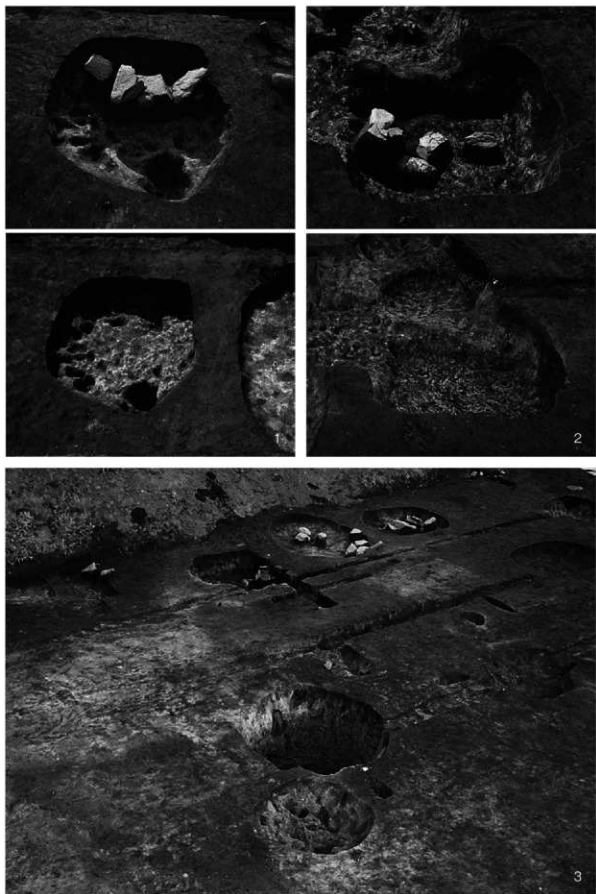


竖 穴 (3) (1:9 型, 2:11 型, 3:12·13 型, 4:15 型, 5:16 型, 6:17 型)

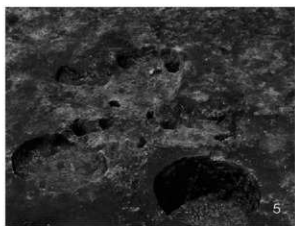
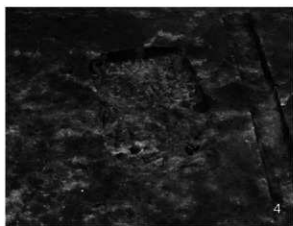
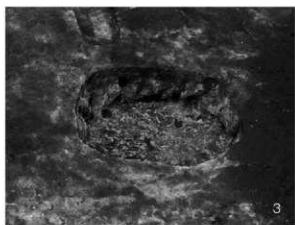
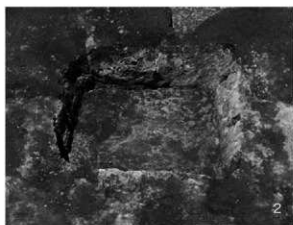




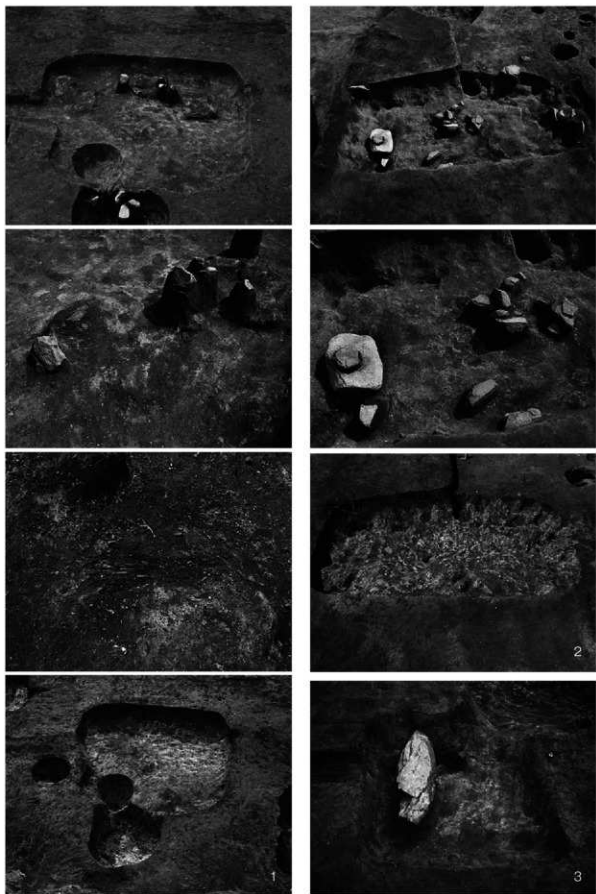
鑿 穴 (4) (1: 6-14 鑿, 2: 18 鑿, 3: 19 鑿, 4: 12-23 鑿, 5: 25-34 鑿)



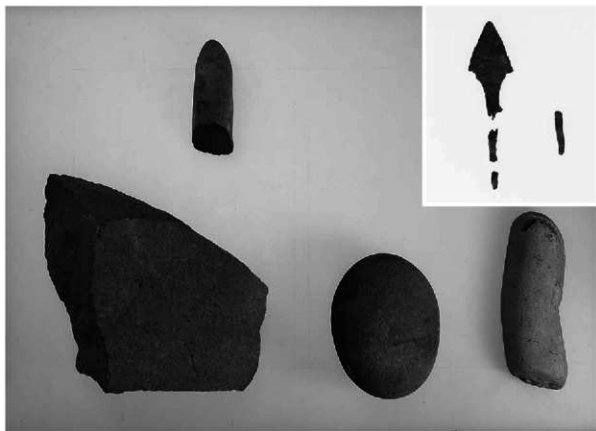
竖穴(5) (1:20墓、2:21墓、3:20・21・24墓付近)



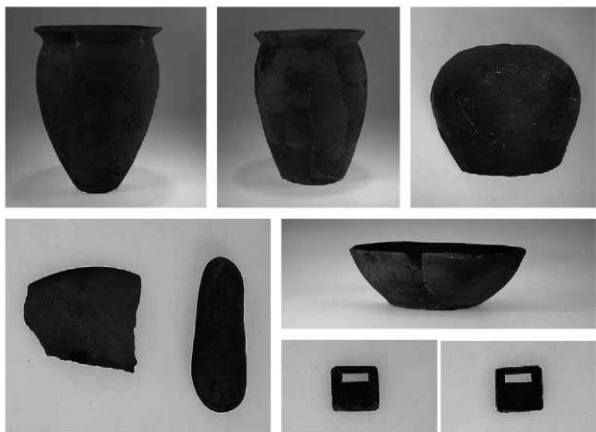
鑿 穴 (6) (1: 26·28·31 鑿附近, 2: 26 鑿, 3: 27 鑿, 4: 28 鑿, 5: 31 鑿)



竖穴(7) (1:29竖、2:30竖、3:32竖)



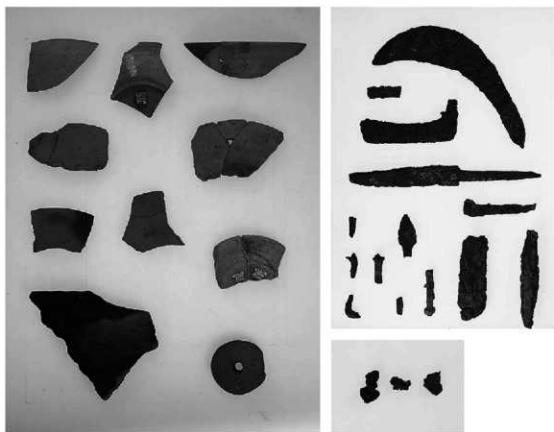
第69号住居址



第70号住居址



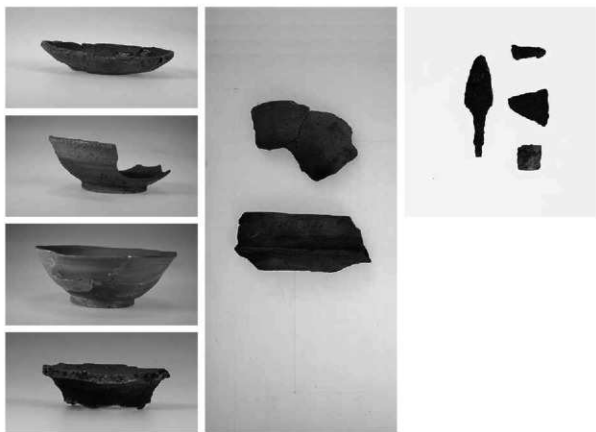
第73・74号住居址



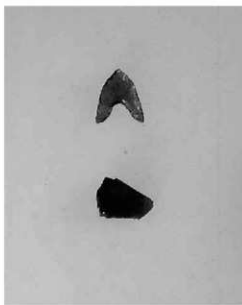
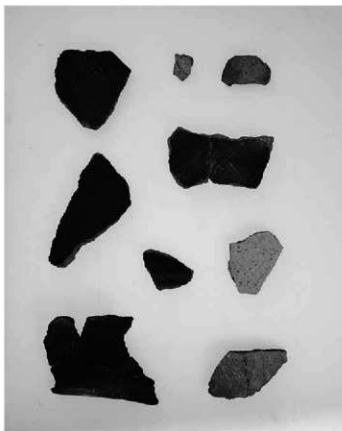
第75号住居址(1)



第75号住居址(2)



第77号住居址



第78号住居址



第80号住居址

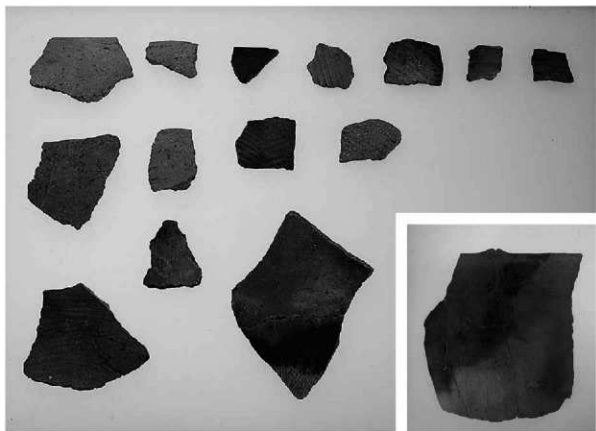




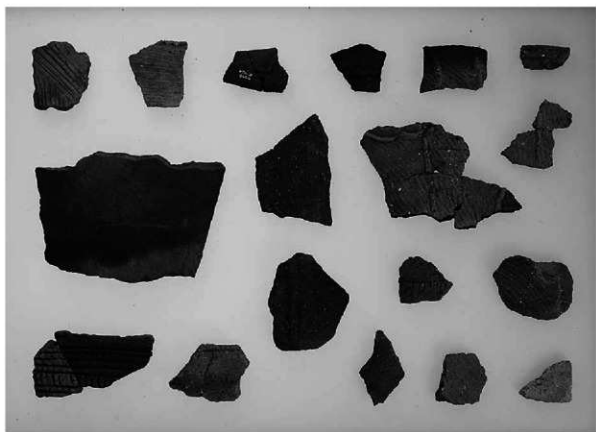
土坑 (1) (331土、332土)



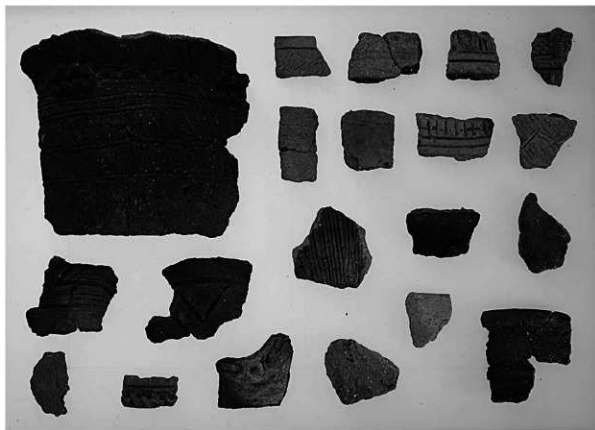
土坑 (2) (334土、335土、342土)



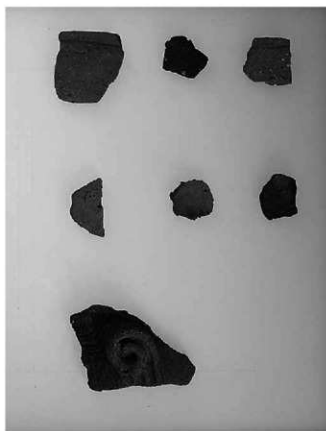
土坑 (3) (338土)



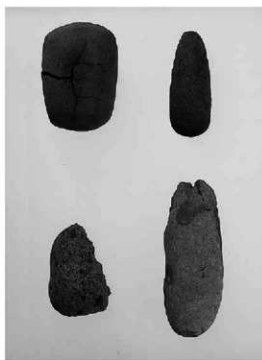
土坑 (4) (344土、350土、309土)



土坑 (5) (384土, 386土, 391土, 396土, 407土, 415土)



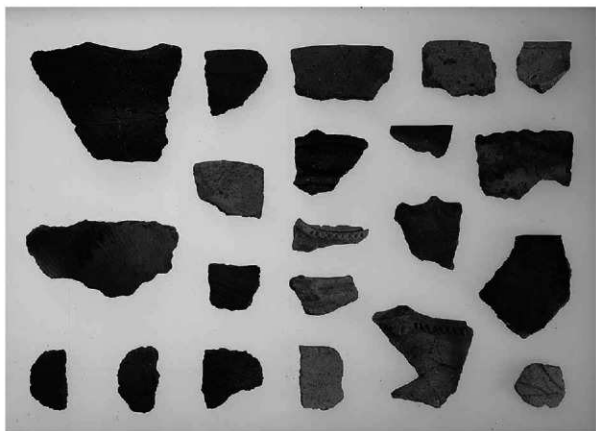
土坑 (6) (408土)



土坑 (7) (533土, 551土, 560土)



土坑 (8) (369±, 402±, 403±)



土坑 (9) (373±, 374±, 382±)



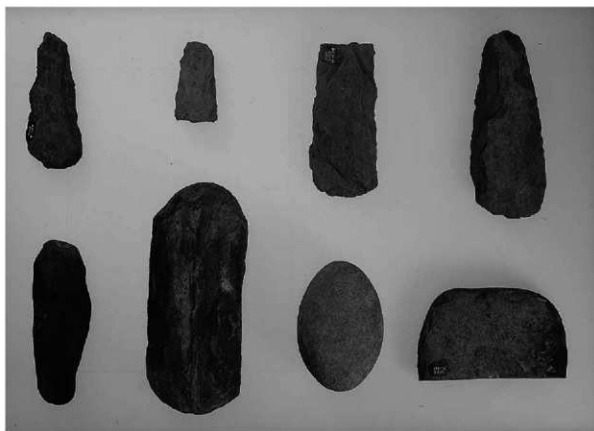
土坑 (10) (408土)



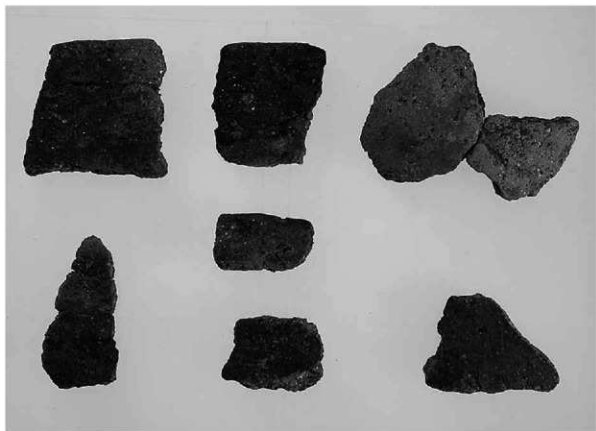
土坑 (11) (402土)



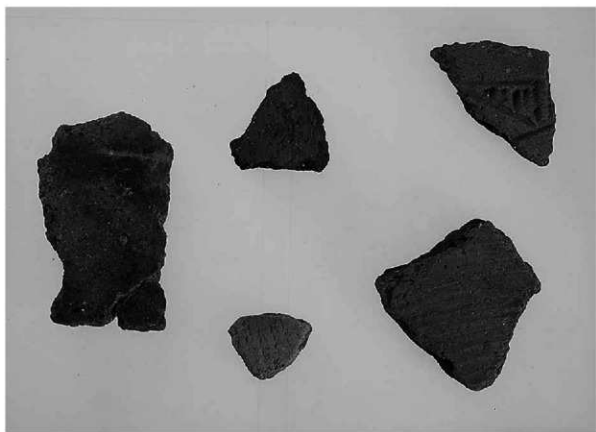
ビット (339土西ビット1)



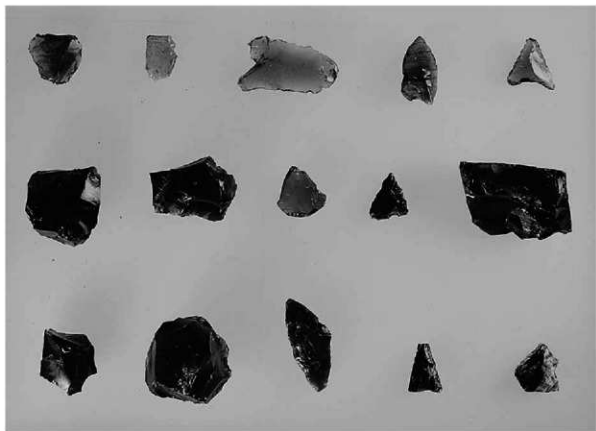
土坑 (12) (420土、331土、333土、335土、365土)



土坑 (13) (354土)



土坑 (14) (354土、396土)



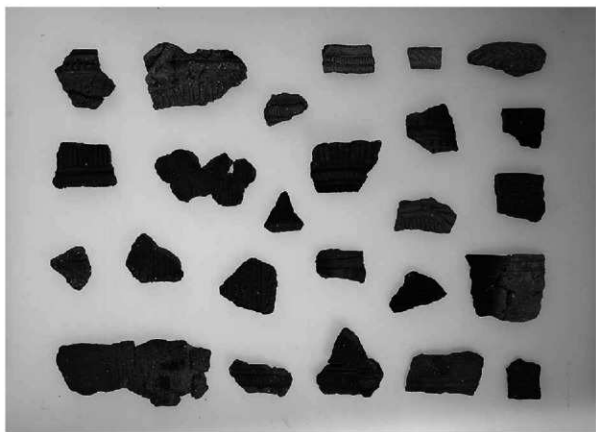
土坑·集石



堅穴建物址鉄器

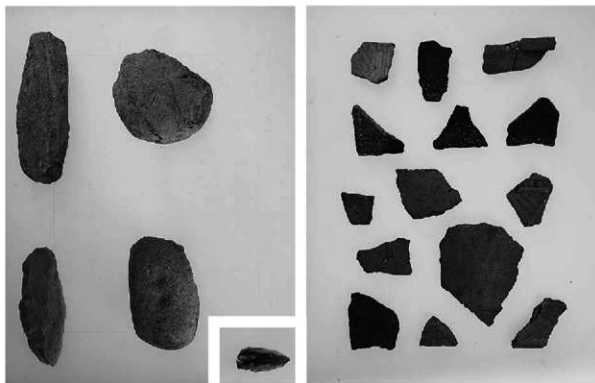


豎穴·不明遺構

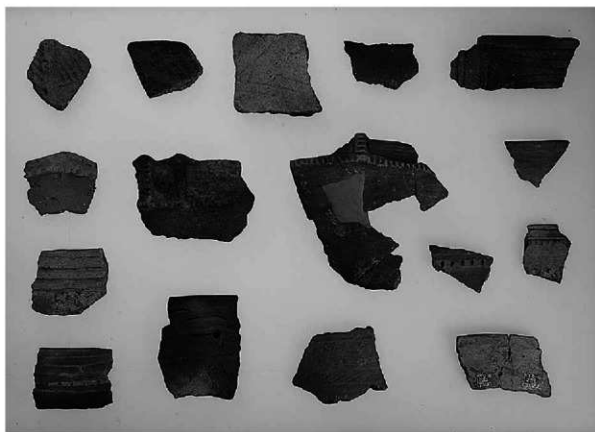


不明遺構(1)

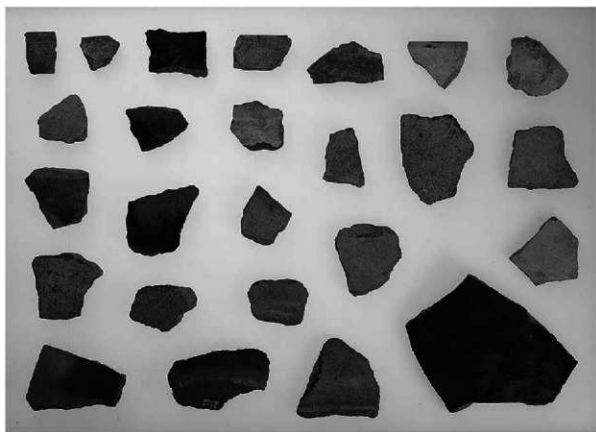
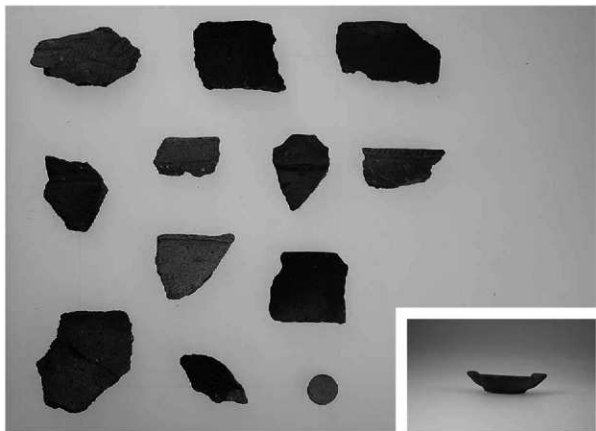




不明遺構 (2)



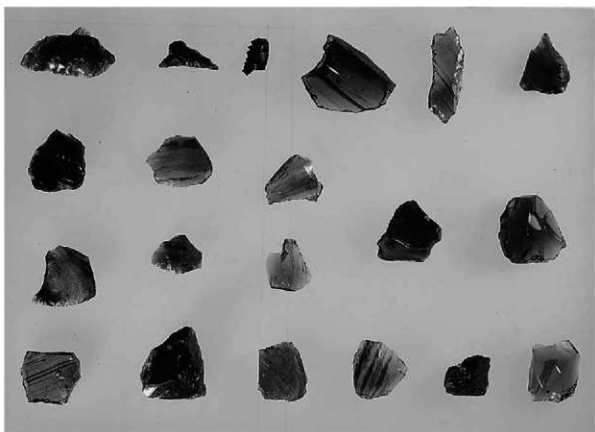
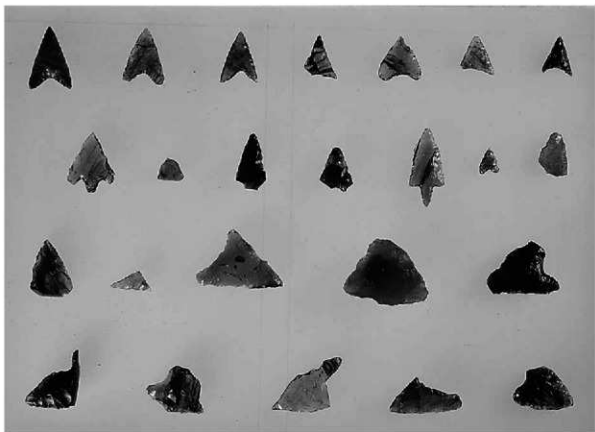
遺構外出土遺物 (1)



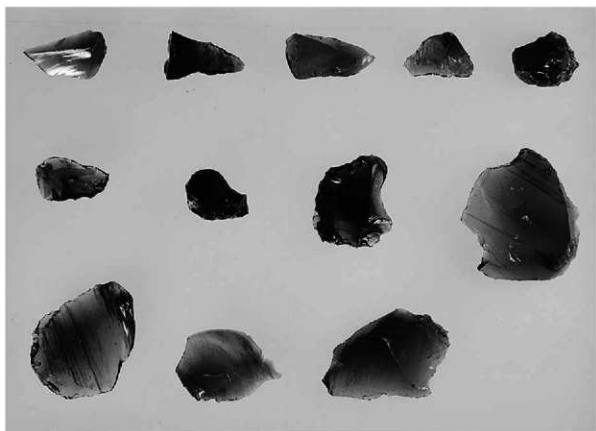
道傍外出土遺物(2)



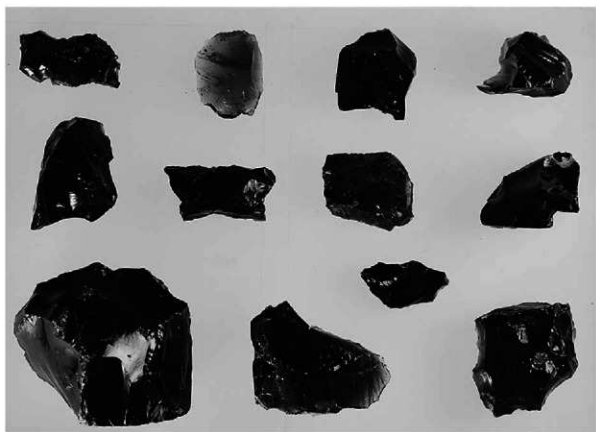
道傍外出土遺物(3)



道傍外出土遺物(4)



道傍外出土遺物(5)



道傍外出土遺物(6)

## 報告書抄録

ふりがな	かみやどいせき さん						
書名	神谷所遺跡Ⅲ						
副書名	後山工業団地造成事業に先立つ緊急発掘調査						
著者名	福島 永						
編集機関	辰野町教育委員会						
所在地	〒399-0493 長野県上伊那郡辰野町中央1番地 電話 (0266) 41-1681						
発行年月日	平成23(2011)年3月31日						
所収遺跡名	所在地	コード		日本測地系		調査期間	調査面積
		市町村	遺跡番号	北緯	東経		
神谷所遺跡	長野県上伊那郡辰野町大字伊那富字後山5908番地ほか	20382	66	35°57'52"	137°58'37"	19940411 \n 19940819	3,200㎡
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		
神谷所遺跡	集落址 狩猟場	縄文時代	住居址	1	縄文時代前期末葉・後期土器		
			集石	11	弥生時代前期・後期土器		
	集石炉		1	平安時代灰釉陶器・土師器			
	土坑(落し穴状土坑含む)		90	縄文時代石器			
	弥生時代		住居址	2	平安時代鉄器		
	平安時代	土坑	2	中世陶磁器・内耳土器			
		住居址	9				
中世		竪穴建物址	33				
不明	不明	溝址	2				
		不明	1				
特記事項	竪穴建物址はその多くから遺物の出土がなく、時期を明確にはできなかったが、龍泉窯の青磁碗片、白磁V類碗片、美濃瀬戸窯の香炉片・内耳土器片が出土していることから、中世を通じて存在していた可能性がある。また、第1次調査で検出された製鉄関連遺構とのつながりについても検討していかなくてはならない。						

## 神谷所遺跡Ⅲ

---

後山工業団地造成事業に先立つ第3次緊急発掘調査報告書

発行日 平成23年3月31日

編集 辰野町教育委員会

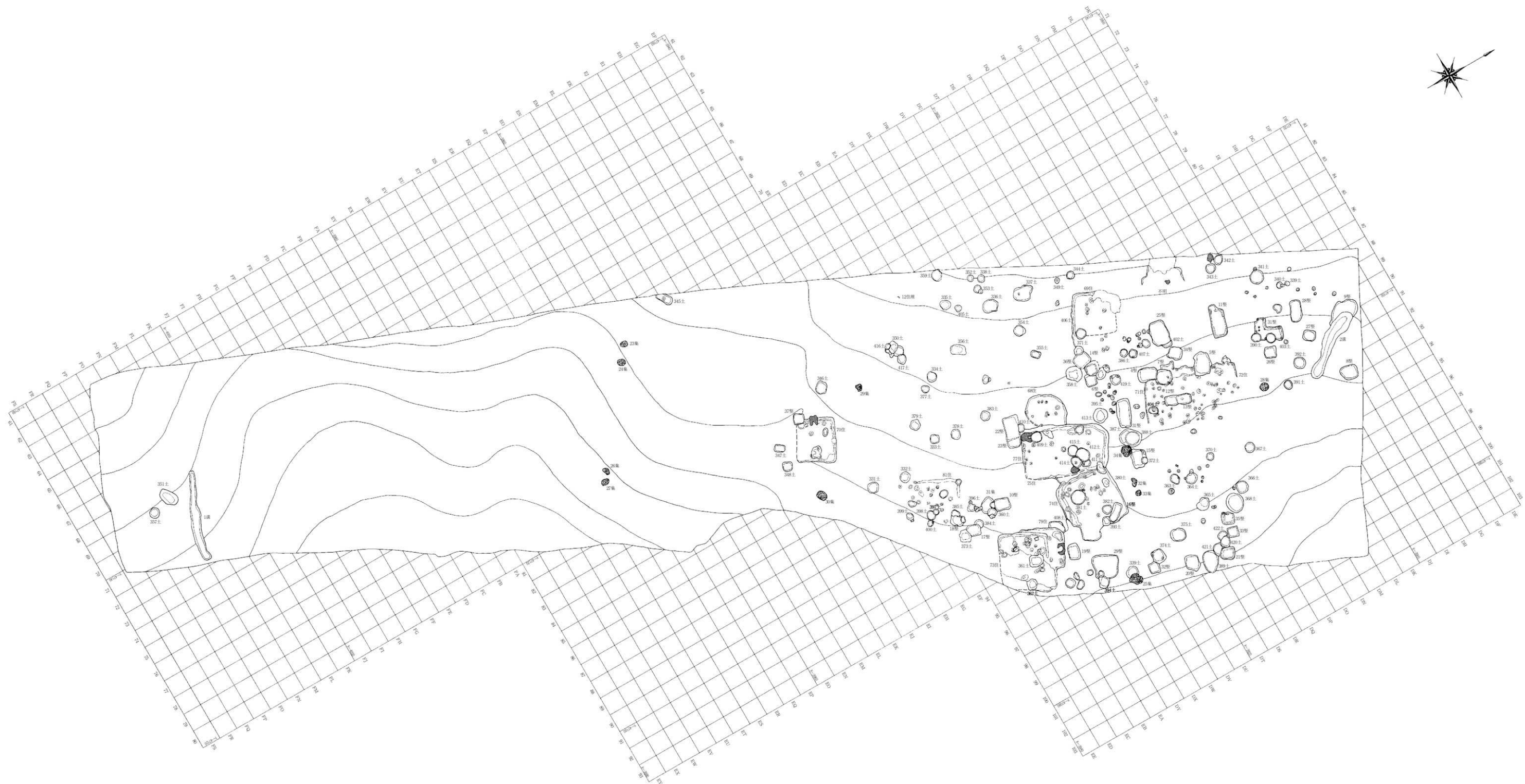
〒399-0493 長野県上伊那郡辰野町中央1  
電話 0266 (41) 1111

印刷 鬼灯書籍株式会社

〒381-0012 長野県長野市柳原2133-5  
電話 026 (244) 0235

---





付図 神谷所遺跡第3次調査 全体測量図 S = 1/200